

315
382

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 30 1 2 3 4 5

始



特220
652



天台宗聖典



自ら佛みづかに歸依ほんげしたてまつる當まさに願ねがはくば衆生しゆじやうととも
もに大道だいたうを體解たいげして無上むじやう意いを起おこさん

自ら法ほふに歸依きえしたてまつる當まさに願ねがはくば衆生しゆじやうととも
もに深ふかく經藏きやうざうに入りて智慧ちゐ海うみの如ごとくならん

自ら僧そうに歸依きえしたてまつる當まさに願ねがはくば衆生しゆじやうととも
もに大衆だいしゆを統理とうりして一切いっせ無礙むゐならん

無上甚深微妙の法は
百千萬劫にも遭遇すること難し
我今見聞し受持することを得たり
願はくば如來の眞實義を解せん

傳教大師發願文

悠悠たる三界純ら苦にして安きこと無く擾々たる四生唯患にして樂し
からず牟尼の日久しく隠れて慈尊の月未だ照らさず三災の危きに近づき
五濁の深さに没む加以風命保ち難く露體消え易し草堂樂み無しと雖も然
も老少白骨を散じ曝す土室闇く進しと雖も而も貴賤魂魄を争ひ宿す彼を
瞻己を省るに此の理必定せり仙丸未だ服せず遊魂留め難し命通未だ得ず
死辰何とか定めん生ける時善を作さずんば死するの日獄の薪と成らん得
難くして移り易きは其れ人身なり矣發し難くして忘れ易きは斯れ善心な
り焉是を以て法皇牟尼は大海の針妙高の線を假りて人身の得難きことを

喻況へたまふ古賢禹王は一寸の陰半寸の暇を惜みて、一生の空しく過ぐる
 ことを歎勸せり因無くして果を得るは是の處り有ること無く善無くして
 苦を免るゝは是の處り有ること無し伏して己が行迹を尋ね思ふに無戒に
 して竊に四事の勞りを受け愚癡にして亦四生の怨と成る是の故に未曾有
 因縁經に云く施す者は天に生れ受くる者は獄に入ると提韋女人の四事の
 供は末利夫人の福と表はれ貪著利養の五衆の果は石女擔鬻の罪と顯はる。
 明かなる哉や善惡の因果誰が有慙の人か此の典を信ぜざらんや然れば則
 ち苦因を知りて而も苦果を畏れざるを釋尊は闡提と遮したまひ人身を得
 て徒に善業を作さざるを聖教には空手と噴めたまへり是に於て愚が中の
 極愚狂が中の極狂塵秃の有情底下の寂澄上は諸佛に違し中は皇法に背き
 下は孝禮を闕けり謹んで迷狂の心に隨ひ三二の願を發す無所得を以て方

便と爲し無上第一義の爲めに金剛不壞不退の心願を發す我未だ六根相似
 の位を得ざるより以還出假せじ(其二)未だ理を照す心を得ざるより以還才
 藝あらず(其三)未だ淨戒を具足することを得ざるより以還檀主の法會に預
 らじ(其三)未だ般若の心を得ざるより以還世間人事の緣務に著せじ相似の
 位を除く其四三際の間中に修する所の功德は獨り己が身に受けず普く有
 識に同施して悉く皆無上菩提を得せしめん(其五)伏して願はくば解脱の味
 は獨り飲まず安樂の果は獨り證せず法界の衆生とともに同じく妙覺に登
 り法界の衆生とともに同じく妙味を服せん若し此の願力に依りて六根相
 似の位に至り若し五神通を得ん時は必ず自度を取らず正位を證せず一切
 に著せざらん願はくは必ず今生無作無縁の四弘誓願に引導せられて周く
 法界に旋らし遍く六道に入り佛國土を淨め衆生を成就して未來際を盡す

まで恒つねに佛事ぶつじを作なさんことを

天台宗聖典總目次

三禮		
開經偈		一
傳教大師發願文		二
○			
妙法蓮華經	鳩摩羅什三藏譯	一三九〇
法華諸品大意	傳教大師撰	三九一
妙法蓮華經玄義序		
私記緣起	章安大師撰	三九三—三九六
序王	天台大師述	三九三
私序王	章安大師撰	三九四
譚玄本序	天台大師述	三九五
天台四教儀	諦觀法師錄	三九六
十不二門	荆溪大師撰	三九七
摩訶止觀抄		四三三
序文略抄	章安大師撰編者抄	四三一—四六八

四種三昧章	天台大師說	四三
止觀大意	荆溪大師述	四六九
始終心要	荆溪大師撰	四八一
○ 梵網菩薩戒經	鳩摩羅什三藏譯	四八三
山家學生式	傳教大師撰	五一九
上顯戒論表	傳教大師撰	五二六
顯戒論抄	傳教大師撰	五二九—五三七
序 偈	傳教大師撰	五三九
開雲顯月篇第一	傳教大師撰	五三一
後 偈	傳教大師撰	五三六
授菩薩戒儀	傳教大師撰	五三九
傳教大師御遺誠	傳教大師撰	五三七
○ 大毗盧遮那經入真言門住心品	善無畏三藏譯	五五九
菩提心論	龍猛菩薩造	五七一
北嶺教時要義	放光金剛錄	五八〇

本覺讚		五九八
註本覺讚		五九九
○ 阿彌陀經	鳩摩羅什三藏譯	六〇一
觀心略要集	慧心僧都述	六〇六
眞如觀	慧心僧都述	六五七
橫川法語	慧心僧都撰	六八五
奏進法語	眞盛上人撰	六八六
○ 極樂國彌陀和讚	千觀阿闍梨作	六八七
天台大師和讚	慧心僧都作	六九〇
傳教大師和讚		六九八
○ 祖疏略纂		七〇二
法華懺法		七二七
例時作法		七四九

聲明

三禮如來唄 271-272

六種回向 271

伽陀 271

回向伽陀 271

四智讚 271

同讚 271

錫杖 272

總回向文 1

附錄

天台宗史概説 3

天台宗義概要 8

略解題 13

聖典纂修後記 1

妙法蓮華經序品第一

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

如是我聞。一時佛住。王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆。萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。逮得已利。盡諸有結。心得自在。其名曰。阿若憍陳如。摩訶迦葉。優樓頻伽。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。摩訶迦旃延。阿菟樓駄。劫賓那。橋梵波提。離婆多。畢陵伽婆蹉。薄拘羅。摩訶拘絺羅。難陀。孫陀羅難陀。富樓那。彌多羅尼子。須菩提。阿難。羅睺羅。如是衆所知識。大阿羅漢等。復有學無學二千人。摩訶波闍波提比丘尼。與眷屬六千人俱。羅睺羅母。耶輸陀羅比丘尼。亦與眷屬俱。菩薩摩

妙法蓮華經序品第一

姚秦の三藏法師鳩摩羅什詔を奉して譯す。

■是の如きを、我聞きき。一時、佛、王舍城耆闍崛山の中に住したまひ、大比丘衆、萬二千人と俱なりき。皆是阿羅漢なり。諸漏已に盡して復煩惱無し。己利を逮得し、諸の有結を盡して、心得自在を得たり。其の名を阿若憍陳如、摩訶迦葉、優樓頻伽、那提迦葉、舍利弗、大目犍連、摩訶迦旃延、阿菟樓駄、伽耶迦葉、那提迦葉、舍利弗、大目犍連、摩訶迦旃延、阿菟樓駄、劫賓那、橋梵波提、離婆多、畢陵伽婆蹉、薄拘羅、摩訶拘絺羅、難陀、孫陀羅難陀、富樓那、彌多羅尼子、須菩提、阿難、羅睺羅と曰ふ。是の如き、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。復、學無學の二千人あり。摩訶波闍波提比丘尼、眷屬六千人と俱なり。羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、亦眷屬と俱なり。菩薩摩訶薩八萬人あり。皆阿耨多羅三藐三菩提に於いて退轉せず。皆陀羅尼を得樂説辯才ありて、不退轉の法輪を轉じ、無量百千の諸佛を供養し、

訶薩八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉。皆得陀羅尼。樂說辯才。轉不退轉法輪。供養無量百千諸佛。於諸佛所。植衆德本。常爲諸佛之所稱歎。以慈修身。善入佛慧。通達大智。到於彼岸。名稱普聞。無量世界。能度無數百千衆生。其名曰。文殊師利菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。寶掌菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。寶月菩薩。月光菩薩。滿月菩薩。大力菩薩。無量力菩薩。越三界菩薩。毘陀婆羅菩薩。彌勒菩薩。寶積菩薩。導師菩薩。如是等菩薩摩訶薩。八萬人俱。爾時釋提桓因。與其眷屬。二萬天子俱。復有名月天子。普香天子。寶光天子。四大天王。與其眷屬。萬天子俱。自在天子。大自在天子。與其眷屬。三萬天子俱。娑婆世界主。梵天王。尸棄大

諸佛の所に於いて、衆の徳本を植ゑ、常に諸佛に稱歎せらるること爲、慈を以つて身を修め、善く佛慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り、名稱普く無量の世界に聞えて、能く無數百千の衆生を度す。7 其の名を文殊師利菩薩、觀世音菩薩、得大勢菩薩、常精進菩薩、不休息菩薩、寶掌菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、寶月菩薩、月光菩薩、滿月菩薩、大力菩薩、無量力菩薩、越三界菩薩、毘陀婆羅菩薩、彌勒菩薩、寶積菩薩、導師菩薩と曰ふ。8 是の如き等の菩薩摩訶薩八萬人と俱なり。9 爾の時に釋提桓因、其の眷屬二萬の天子と俱なり。復、名月天子、普香天子、寶光天子、四大天王有り、其の眷屬萬の天子と俱なり。10 自在天子、大自在天子、其の眷屬三萬の天子と俱なり。娑婆世界の主梵天王、尸棄大梵、光明大梵等、其の眷屬萬二千の天子と俱なり。11 八つの龍王有り、難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和脩吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王等なり。12 各、若干の百千の眷屬と俱なり。13 四つの緊那羅王あり。法緊那羅王、妙法緊那羅王、大法輪那羅王、持法緊那羅王、大法緊那羅王、持法緊那羅王なり。14 各、若干の百千の眷屬と俱なり。15 四つの迦樓羅王有り。大威徳迦樓羅王、大身迦樓羅王、大滿迦樓羅王、如意迦樓羅王なり。16 各、若干の百千の眷屬と俱なり。17 章提希の子阿闍世王、若干の百千の眷屬と俱なり。18 各、佛足を禮し、退いて一面に坐しぬ。

梵。光明大梵等。與其眷屬。萬二千天子俱。有八龍王。難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王。和脩吉龍王。徳叉迦龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優鉢羅龍王等。各與若干。百千眷屬俱。有四緊那羅王。法緊那羅王。妙法緊那羅王。大法輪那羅王。持法緊那羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四乾闥婆王。樂乾闥婆王。樂音乾闥婆王。美乾闥婆王。美音乾闥婆王。各與若干。百千眷屬俱。有四阿脩羅王。婆稚阿脩羅王。佉羅鞞駄阿脩羅王。毗摩質多羅阿脩羅王。羅睺阿脩羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四迦樓羅王。大威徳迦樓羅王。大身迦樓羅王。大滿迦樓羅王。如意迦樓羅王。各與若干。百千眷屬俱。章提希子。阿闍世王。與若干。百千眷屬俱。各禮佛足。退坐一面。

眷屬と俱なり。13 四つの乾闥婆王有り。樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王、美乾闥婆王、美音乾闥婆王なり。14 各若干の百千の眷屬と俱なり。14 四つの阿脩羅王有り。婆稚阿脩羅王、佉羅鞞駄阿脩羅王、毗摩質多羅阿脩羅王、羅睺阿脩羅王なり。15 各若干の百千の眷屬と俱なり。15 四つの迦樓羅王有り。大威徳迦樓羅王、大身迦樓羅王、大滿迦樓羅王、如意迦樓羅王なり。16 各若干の百千の眷屬と俱なり。16 章提希の子阿闍世王、若干の百千の眷屬と俱なり。17 各、佛足を禮し、退いて一面に坐しぬ。

爾時世尊、四衆圍繞、供養恭敬、尊重讚歎。爲諸菩薩、說大乘經、名無量義、教菩薩法、佛所護念、佛說此經已。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨、曼陀羅華。摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、伽樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及諸小王、轉輪聖王。是諸大衆、得未曾有、歡喜合掌、一心觀佛。爾時佛、放眉間白毫相光。照東方、萬八千世界。靡不周徧。不至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。於此世界、盡見彼土。六趣衆生。又見彼土。現在諸佛。及聞諸佛。所說經法。并見彼諸比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。諸修行得道者。復見諸菩薩摩

爾の時に世尊、四衆に圍繞せられ、供養恭敬、尊重讚歎せられしに、諸の菩薩の爲に、大乘經の、無量義、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。佛、此の經を説き已りて、結跏趺坐し、無量義處三昧に入りて、身心動じたまはず。是の時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨して、佛の上、及び諸の大衆に散じ、普佛世界六種に震動す。爾の時に、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及び諸の小王、轉輪聖王、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歡喜し合掌して一心に佛を觀たてまつる。爾の時に佛、眉間白毫相の光を放ちて、東方萬八千の世界を照したまふに、周徧せざること靡し。下、阿鼻地獄に至り、上、阿迦尼吒天に至る。此の世界に於いて、盡く彼の土の六趣の衆生を見、又、彼の土の現在の諸佛を見、及び諸佛の所説の經法を聞き、并びに彼の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、諸の修業ありて得道する者を見、復、諸の菩薩摩訶薩、種種の因縁、種種の信

訶薩、種種因縁、種種信解、種種相貌。行菩薩道。復見諸佛、般涅槃者。復見諸佛、般涅槃後。以佛舍利。起七寶塔。爾時彌勒菩薩。作是念。今者世尊、現神變相。以何因縁。而有此瑞。今佛世尊、入于三昧。是不可思議。現希有事。當以問誰。誰能答者。復作此念。是文殊師利。法王子。已曾親近供養。過去無量諸佛。必應見此。希有之相。我今當問。爾時比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及諸天龍、鬼神等、咸作此念。是佛光明。神通之相。今當問誰。

解、種種の相貌ありて、菩薩の道を行するを見、復、諸佛の般涅槃したまふ者を見、復、諸佛の般涅槃の後、佛舍利を以つて、七寶の塔を起つるを見る。爾の時に彌勒菩薩、是の念を作さく、今者世尊、神變の相を現じたまふ。何の因縁を以つて此の瑞有る。今佛世尊は、三昧に入りたまへり。是の不可思議に希有の事を現ざるを、當に以つて誰にか問ふべき。誰か能く答へん者なる。復、此の念を作さく、是の文殊師利法王子は、已に曾、過去の無量の諸佛に親近し供養せり。必ず應に、此の希有の相を見たるべし。我、今當に問ふべし。爾の時に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天龍、鬼神等、咸く此の念を作さく、是の佛の光明神通の相を、今當に誰にか問ふべき。

爾の時に彌勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又、四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天龍、鬼神等の衆會の心を觀じて、文殊師利に問ひて言はく、何の因縁を以つて、此の瑞神通の相有して、大光明を放ち、東方萬八千の土を照したまふに、悉く彼の佛の國界の莊嚴を見る。

於是彌勒菩薩欲重宣此義以偈問曰

文殊師利 導師何故
 眉間白毫 大光普照
 雨曼陀羅 曼殊沙華
 栴檀香風 悅可衆心
 以是因緣 地皆嚴淨
 而此世界 六種震動
 時四部衆 咸皆歡喜
 身意快然 得未曾有
 眉間光明 照于東方
 萬八千土 皆如金色
 從阿鼻獄 上至有頂
 諸世界中 六道衆生
 生死所趣 善惡業緣
 受報好醜 於此悉見

四 是に於いて彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を以つて問ひて曰はく、

1 文殊師利 導師何が故ぞ
 2 眉間白毫の 大光普く照したまふ
 3 曼陀羅 曼殊沙華を雨して
 4 栴檀の香風 衆の心を悦可す
 5 是の因縁を以つて 地皆嚴淨なり
 6 而も此の世界 六種に震動す
 7 時に四部の衆 咸く皆歡喜し
 8 身意快然として 未曾有なることを得つ
 9 眉間の光明 東方
 10 萬八千の土を照したまふに 皆金色の如し
 11 阿鼻獄より 上有頂に至るまで
 12 諸の世界の中の 六道の衆生
 13 生死の所趣 善惡の業縁
 14 受報の好醜 此に於いて悉く見る

又觀諸佛 聖主師子
 演說經典 微妙第一
 其聲清淨 出柔輦音
 教諸菩薩 無數億萬
 梵音深妙 令人樂聞
 名於世界 講說正法
 種種因緣 以無量論
 照明佛法 開悟衆生
 若人遭苦 厭老病死
 爲說涅槃 盡諸苦際
 若人有福 曾供養佛
 志求勝法 爲說緣覺
 若有佛子 修種種行
 求無上慧 爲說淨道
 文殊師利 我住於此
 見聞若斯 及千億事

8 又諸佛 聖主師子
 9 經典の 微妙第一なるを演説したまふ
 10 其の聲 清淨に 柔輦の音を出して
 11 諸の菩薩を教へたまふこと 無數億萬に
 12 梵音深妙にして 人をして聞かんと樂はしめ
 13 各世界に於いて 正法を講説するに
 14 種種の因縁をもつてし 無量の論を以つて
 15 佛法を照明し 衆生を開悟せしめたまふを觀る
 16 若人苦に遭ひて 老病死を厭ふには
 17 爲に涅槃を説きて 諸苦の際を盡さしめ
 18 若人福有りて 曾て佛を供養し
 19 勝法を志求するには 爲に緣覺を説き
 20 若佛子有りて 種種の行を修し
 21 無上慧を求むるには 爲に淨道を説きたまふ
 22 文殊師利 我此に住して
 23 見聞すること斯の若く 千億の事に及べり

如是衆多 今當略說
 我見彼土 恆沙菩薩
 種種因緣 而求佛道
 或有行施 金銀珊瑚
 眞珠摩尼 磚磑碼碯
 金剛諸珍 奴婢車乘
 寶飾輦輿 歡喜布施
 廻向佛道 願得是乘
 三界第一 諸佛所歎
 或有菩薩 駟馬寶車
 欄楯華蓋 軒飾布施
 復見菩薩 身肉手足
 及妻子施 求無上道
 又見菩薩 頭目身體
 欣樂施與 求佛智慧
 文殊師利 我見諸王

是の如く衆多なる 今當に略して説くべし
 15 我彼の土の 恆沙の菩薩
 種種の因縁をもつて 佛道を求むるを見る
 16 或は施を行するに 金銀珊瑚
 眞珠摩尼 磚磑碼碯
 金剛の諸珍 奴婢車乘
 寶飾の輦輿を 歡喜し布施し
 佛道に廻向して 是の乗の
 三界第一にして 諸佛の歎じたまふ所なるを得んと願ふ有り
 17 或は菩薩の 駟馬の寶車の
 欄楯華蓋あり 軒飾あるを布施する有り
 18 復菩薩の 身肉手足
 及び妻子を施して 無上道を求むるを見る
 19 又菩薩の 頭目身體を
 欣樂施與して 佛の智慧を求むるを見る
 20 文殊師利 我諸王の

往詣佛所 問無上道
 便捨樂土 宮殿臣妾
 鬚髮除翳 而被法服
 或見菩薩 而作比丘
 獨處閑靜 樂誦經典
 又見菩薩 勇猛精進
 入於深山 意惟佛道
 又見離欲 常處空閑
 深修禪定 得五神通
 又見菩薩 安禪合掌
 以千萬偈 讚諸法王
 復見菩薩 智深志固
 能問諸佛 聞悉受持
 又見佛子 定慧具足
 以無量論 爲衆講法
 欣樂說法 化諸菩薩

佛所に往詣して 無上道を問ひたてまつり
 便ち樂土 宮殿臣妾を捨てて
 鬚髮を翳除し 法服を被るを見る
 21 或は菩薩の 而も比丘と作りて
 獨り閑靜に處し 樂みて經典を誦するを見る
 22 又菩薩の 勇猛精進し
 深山に入りて 佛道を思惟するを見る
 23 又欲を離れ 常に空閑に處し
 深く禪定を修して 五神通を得るを見る
 24 又菩薩の 禪に安んじて合掌し
 千萬の偈を以つて 諸法の王を讚めたてまつるを見る
 25 復菩薩の 智深く志固くして
 能く諸佛に問ひたてまつり 聞きて悉く受持するを見る
 26 又佛子の 定慧具足して
 無量の論を以つて 衆の爲に法を講じ
 欣樂說法して 諸の菩薩を化し

破魔兵衆 而擊法鼓
 又見菩薩 寂然宴默
 天龍恭敬 不以爲喜
 又見菩薩 處林放光
 濟地獄苦 令入佛道
 又見佛子 未嘗睡眠
 經行林中 勤求佛道
 又見具戒 威儀無缺
 淨如寶珠 以爲佛道
 又見佛子 住忍辱力
 增上慢人 惡罵捶打
 皆悉能忍 以爲佛道
 又見菩薩 離諸戲笑
 及癡眷屬 親近智者
 一心除亂 攝念山林
 億千萬歲 以求佛道

魔の兵衆を破して 法鼓を撃つを見る
 27 又菩薩の 寂然宴默にして
 天龍恭敬すれども 爲を以つて喜とせざるを見る
 28 又菩薩の 林に處して光を放ち
 地獄の苦を濟ひて 佛道に入らしむるを見る
 29 又佛子の 未だ嘗て睡眠せずして
 林中に經行し 佛道を勤求するを見る
 30 又戒を具して 威儀缺くること無く
 淨きこと寶珠の如くにして 以つて佛道を求むるを見る
 31 又佛子の 忍辱の力に住して
 增上慢の人の 惡罵捶打するを
 皆悉く能く忍びて 以つて佛道を求むるを見る
 32 又菩薩の 諸の戲笑
 及び癡なる眷屬を離れ 智者に親近し
 一心に亂を除き 念を山林に攝して
 億千萬歲 以つて佛道を求むるを見る

或見菩薩 肴膳飲食
 百種湯藥 施佛及僧
 名衣上服 價直千萬
 或無價衣 施佛及僧
 千萬億種 栴檀寶舍
 衆妙臥具 施佛及僧
 清淨園林 華果茂盛
 流泉浴池 施佛及僧
 如是等施 種種微妙
 歡喜無厭 求無上道
 或有菩薩 說寂滅法
 種種教詔 無數衆生
 或見菩薩 觀諸法性
 無有二相 猶如虛空
 又見佛子 心無所著
 以此妙慧 求無上道

33 或は菩薩の 肴膳飲食
 百種の湯藥を 佛及び僧に施し
 34 名衣上服の 價直千萬なる
 或は無價の衣を 佛及び僧に施し
 35 千萬億種の 栴檀の寶舍
 衆妙の臥具を 佛及び僧に施し
 36 清淨の園林の 華果茂盛にて
 流泉浴地あるを 佛及び僧に施し
 37 是の如き等の施の 種種微妙なるを
 歡喜し厭くこと無くして 無上道を求むるを見る
 38 或は菩薩の 寂滅の法を説きて
 種種に 無數の衆生に教詔する有り
 39 或は菩薩の 諸法の性は
 二相有ること無く 猶虚空の如しと觀するを見る
 40 又佛子の 心に所著無くして
 此の妙慧を以つて 無上道を求むるを見る

文殊師利 又有菩薩
 佛滅度後 供養舍利
 又見佛子 造諸塔廟
 無數恆沙 嚴飾國界
 寶塔高妙 五千由旬
 縱廣正等 二千由旬
 一一塔廟 各千幢幡
 珠交露幔 寶鈴和鳴
 諸天龍神 人及非人
 香華伎樂 常以供養
 文殊師利 諸佛子等
 爲供舍利 嚴飾塔廟
 國界自然 殊特妙好
 如天樹王 其華開敷
 佛放一光 我及衆會
 見此國界 種種殊妙

41 文殊師利 又菩薩の
 佛滅度の後 舍利を供養する有り
 42 又佛子の 諸の塔廟を造ること
 無數恆沙にして 國界を嚴飾し
 寶塔高妙にして 五千由旬
 縱廣正等にして 二千由旬
 43 一一の塔廟に 各千の幢幡あり
 珠をもつて交露せる幔ありて 寶の鈴和鳴せり
 44 諸の天龍神 人及び非人
 香華伎樂を 常に以つて供養するを見る
 45 文殊師利 諸の佛子等
 舍利を供せんが爲に 塔廟を嚴飾す
 國界自然に 殊特妙好なること
 天の樹王の 其の華開敷せるが如し
 46 佛一の光を放ちたまふに 我及び衆會
 此の國界の 種種に殊妙なるを見る

諸佛神力 智慧希有
 放一淨光 照無量國
 我等見此 得未曾有
 佛子文殊 願決衆疑
 四衆欣仰 瞻仁及我
 世尊何故 放斯光明
 佛子時答 決疑令喜
 何所饒益 演斯光明
 佛坐道場 所得妙法
 爲欲說此 爲當授記
 示諸佛土 衆寶嚴淨
 及見諸佛 此非小緣
 文殊當知 四衆龍神
 瞻察仁者 爲說何等
 爾時文殊師利 語彌勒菩薩摩訶薩 及諸大
 士 善男子等 如我惟忖 今佛世尊 欲說大

47 諸佛は神力 智慧希有なり
 一の淨光を放ちて 無量の國を照したまふ
 我等此を見て 未曾有なることを得たり
 48 佛子文殊 願はくば衆の疑を決したまへ
 四衆欣仰して 仁及び我を瞻る
 世尊何故ぞ 斯の光明を放ちたまふ
 49 佛子時に答へて 疑を決して喜ばしめたまへ
 佛子時に答へて 疑を決して喜ばしめたまへ
 何の饒益する所ありてか 斯の光明を演べたまふ
 50 佛道場に坐して 得たまへる所の妙法
 爲めて此を説かんと欲す 爲めて當に授記やしたまふべき
 51 諸の佛土の 衆寶嚴淨なるを示し
 及び諸佛を見たてまつること 此小緣に非じ
 52 文殊當に知るべし 四衆龍神は
 仁者 爲めて何等をか説きたまはんと瞻察す
 5 爾の時に文殊師利 彌勒菩薩摩訶薩 及び諸の大士に語ら
 く、善男子等、我が惟忖するが如き、今佛世尊、大法を説き、大

法。雨大法雨。吹大法風。擊大法鼓。演大法義。諸善男子。我於過去諸佛。曾見此瑞。放斯光已。即說大法。是故當知。今佛現光。亦復如是。欲令衆生。咸得聞知。一切世間。難信之法。故現斯瑞。諸善男子。如過去無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。爾時有佛。號日月燈明如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。演說正法。初善。中善。後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足清白。梵行之相。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。說應六波羅密。令得阿耨多羅三藐三菩提。成一切種智。次復有佛。亦名日月燈明。次復有佛。亦名日月燈明。如是二萬佛。皆同一字。號日月

法の雨を雨し、大法の風を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲すらん。諸の善男子、我、過去の諸佛に於いて、曾て此の瑞を見たてまつりしに、斯の光を放ち已りて、即ち大法を説きたまひき。是の故に當に知るべし。今の佛の光を現じたまふも、亦復是の如く、衆生をして、咸く一切世間難信の法を聞きしることを得しめんと欲するが故に、斯の瑞を現じたまふならん。諸の善男子、過去無量無邊不可思議阿僧祇劫の如き、爾の時に佛有す。日月燈明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號く。正法を演説したまふ。初善、中善、後善なり。其の義深遠に、其の語巧妙に、純一無雜にして具足清白梵行の相なり。聲聞を求むる者の爲には、應ぜる四諦の法を説きて生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應ぜる十二因緣の法を説き、諸の菩薩の爲には、應ぜる六波羅密を説きて阿耨多羅三藐三菩提を得、一切種智を成ぜしめたまふ。次に復佛有す。亦、日月燈明と名く。次に復佛有す。亦、日月燈明と名く。

燈明。又同一姓。姓頗羅墮。彌勒當知。初佛後佛。皆同一字。名日月燈明。十號具足。所可說法。初中後善。其最後佛。未出家時。有八王子。一名有意。二名善意。三名無量意。四名寶意。五名增意。六名除疑意。七名響意。八名法意。是八王子。威德自在。各領四天下。是諸王子。聞父出家。得阿耨多羅三藐三菩提。悉捨王位。亦隨出家。發大乘意。常修梵行。皆爲法師。已於千萬佛所。植諸善本。是時日月燈明佛。說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛所護念。說是經已。即於大衆中。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨。曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。

是の如く二萬佛、皆同じく一字にして、日月燈明と號く。又、同じく一姓にして、頗羅墮を姓とせり。彌勒、當に知るべし。初佛、後佛、皆同じく一字にして日月燈明と名け、十號具足せり。説きたまふ所の法、初中後善なり。其の最後の佛、未だ出家したまはざりし時、八王子有り。一をば有意と名け、二をば善意と名け、三をば無量意と名け、四をば寶意と名け、五をば増意と名け、六をば除疑意と名け、七をば響意と名け、八をば法意と名く。是の八王子、威德自在にして、各四天下を領す。是の諸の王子、父出家して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと聞き、悉く王位を捨て、亦、隨ひて出家して、大乘の意を發し、常に梵行を修して、皆法師と爲れり。已に千萬の佛の所に於いて諸の善本を植ゑたり。是の時に日月燈明佛、大乘經の無量義、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。是の經を説き已りて、即ち大衆の中に於いて結跏趺坐し、無量義處三昧に入りて、身心動じたまはず。是の時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨して、佛の上、及び諸の

龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王等。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。爾時如來。放眉間白毫相光。照東方。萬八千佛土。靡不周徧。如今所見。是諸佛土。彌勒當知。爾時會中。有二十億菩薩。樂欲聽法。是諸菩薩。見此光明。普照佛土。得未曾有。欲知此光。所爲因緣。時有菩薩。名曰妙光。有八百弟子。是時日月燈明佛。從三昧起。因妙光菩薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。六十小劫。不起于座。時會聽者。亦坐一處。六十小劫。身心不動。聽佛所說。謂如食頃。是時衆中。無有一人。若身若心。而生懈倦。日月燈明佛。於六十小劫。說是經已。卽於梵魔。沙

大衆に散じ、普佛世界六種に震動す。爾の時に、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及び諸の小王、轉輪聖王等、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歡喜し合掌して、一心に佛を觀たてまつる。爾の時に如來、眉間白毫相の光を放ちて、東方萬八千の佛土を照したまふに、周徧せざること靡し、今見る所の是の諸の佛土の如し。彌勒當に知るべし。爾の時に會中に、二十億の菩薩有りて、法を聽かんと樂欲す。是の諸の菩薩、此の光明の普く佛土を照すを見て、未曾有なることを得て、此の光の所爲の因縁を知らんと欲す。時に菩薩有り、名を妙光と曰ふ。八百の弟子有り。是の時に日月燈明佛、三昧より起ちて、妙光菩薩に因せて、大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。六十小劫座を起ちたまはず。時の會の聽者も、亦一處に坐して六十小劫身心動ぜず。佛の所説を聽くこと食頃の如しと謂へり。是の時に、衆中に一人の、若は身、若は心に懈倦を生ずる有ること無かりき。日月燈明佛、六十小

門。婆羅門。及天人。阿脩羅衆中。而宣此言。如來於今日中夜。當入無餘涅槃。時有菩薩。名曰德藏。日月燈明佛。卽授其記。告諸比丘。是德藏菩薩。次當作佛。號曰淨身。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。佛授記已。便於中夜。入無餘涅槃。佛滅度後。妙光菩薩。持妙法蓮華經。滿八十小劫。爲人演說。日月燈明佛八子。皆師妙光。妙光教化。令其堅固。阿耨多羅三藐三菩提。是諸王子。供養無量。百千萬億佛已。皆成佛道。其最後成佛者。名曰然燈。八百弟子。中有一人。號曰求名。貪著利養。雖復讀誦衆經。而不通利。多所忘失。故號求名。是人亦以。種諸善根。因緣故。得值無量。百千萬億諸佛。供養恭敬。尊重讚歎。彌勒當知。爾時

劫に於いて、是の經を説き已りて、卽ち梵、魔、沙門、婆羅門、及び天、人、阿脩羅衆の中に於いて、此の言を宣べたまはく、如來、今日の中夜に於いて、當に無餘涅槃に入るべし。時に菩薩有り。名を德藏と曰はん。日月燈明佛、卽ち其に記を授け、諸の比丘に告げたまはく、是の德藏菩薩、次に當に作佛すべし。號を淨身多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はん。佛授記し已りて、便ち中夜に於いて無餘涅槃に入りたまふ。佛滅度の後に、妙光菩薩、妙法蓮華經を持ちて、八十小劫を満てて人の爲に演説す。日月燈明佛の八子、皆妙光を師とす。妙光教化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。是の諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已りて、皆佛道を成す。其の最後に成佛したまふをば、名を然燈と曰ふ。八百の弟子の中に一人有り。號を求名と曰ふ。利養に貪著せり。復、衆經を讀誦すと雖も、而も通利せず。忘失する所多し。故に求名と號く。是の人亦、諸の善根を種るたる因縁を以つての故に、無量百千萬億の諸佛に値ひたてまつることを得て、供養恭敬、尊重讚歎せり。彌勒、

妙光菩薩。豈異人乎。我身是也。求名菩薩。汝身是也。今見此瑞。與本無異。是故惟付。今日如來。當說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。爾時文殊師利。於大眾中。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世 無量無數劫
有佛人中尊 號日月燈明
世尊演說法 度無量衆生
無數億菩薩 令入佛智慧
佛未出家時 亦隨修梵行
見大聖出家 經名無量義
時佛說大乘 而爲廣分別
於諸大眾中 即於法座上
佛說此經已 名無量義處
跏趺坐三昧

當に知るべし。爾の時の妙光菩薩、豈、異人ならんや。我が身是なり。求名菩薩は汝が身是なり。今、此の瑞を見るに、本と異なること無し。是の故に惟付するに、今日の如來も、當に、大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふべし。爾の時に文殊師利、大眾の中に於いて、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我過去世の 無量無數劫を念ふに
佛人中尊有しき 日月燈明と號く
世尊法を演説し 無量の衆生
無數億の菩薩を度して 佛の智慧に入らしめたまふ
佛未だ出家したまはざりし時の 所生の八王子
大聖の出家を見て 亦隨ひて梵行を修す
時に佛大乘經の 無量義と名くるを
諸の 大眾の中に於いて 爲に廣く分別したまふ
佛此の經を説き已りて 即ち法座の上に於いて
跏趺して三昧に坐したまふ 無量義處と名く

天雨曼陀華 天鼓自然鳴
諸天龍鬼神 供養人中尊
一切諸佛土 即時大震動
佛放眉間光 現諸希有事
此光照東方 萬八千佛土
示一切衆生 生死業報處
有見諸佛土 以衆寶莊嚴
瑠璃頗梨色 斯由佛光照
及見諸天人 龍神夜叉衆
乾闥緊那羅 各供養其佛
又見諸如來 自然成佛道
身色如金山 端嚴甚微妙
如淨瑠璃中 內現眞金像
世尊在大衆 敷演深法義
一一諸佛土 聲聞衆無數
因佛光所照 悉見彼大衆

7 天より曼陀華を雨し 天鼓自然に鳴り
8 諸の天龍鬼神 人中尊を供養す
9 一切の諸の佛土 即時に大いに震動し
10 佛眉間の光を放ち 諸の希有の事を現じたまふ
11 此の光東方 萬八千の佛土を照して
12 一切衆生の 生死の業報處を示したまふ
13 諸の佛土の 衆寶を以つて莊嚴して
14 瑠璃頗梨の色なるを見る有り 斯佛の光の照したまふに由る
15 及び諸の天人 龍神夜叉衆
16 乾闥緊那羅 各其の佛を供養するを見る
17 又諸の如來の 自然に佛道を成じて
18 身の色金山の如く 端嚴にして甚だ微妙なること
19 淨瑠璃の中 内に眞金の像を現するが如くなるを見る
20 世尊大衆に在して 深法の義を敷演したまふ
21 一一の諸の佛土 聲聞衆無數なり
22 佛の光の所照に因りて 悉く彼の大衆を見る

或有諸比丘 在於山林中
 精進持淨戒 猶如護明珠
 又見諸菩薩 行施忍辱等
 其數如恆沙 斯由佛光照
 又見諸菩薩 深入諸禪定
 身心寂不動 以求無上道
 又見諸菩薩 知法寂滅相
 各於其國土 說法求佛道
 爾時四部衆 見日月燈佛
 現大神通力 其心皆歡喜
 各各自相問 是事何因緣
 天人所奉尊 適從三昧起
 讚妙光菩薩 汝爲世間眼
 一切所歸信 能奉持法藏
 如我所說法 唯汝能證知
 世尊既讚歎 令妙光歡喜

15 或は諸の比丘の 山林の中に在りて
 精進し淨戒を持つこと 猶明珠を護るが如くなる有り
 16 又諸の菩薩の 施忍辱等を行すること
 其の數恆沙の如くなるを見る 斯佛の光の照したまふに由る
 17 又諸の菩薩の 深く諸の禪定に入りて
 身心寂かにして動ぜず 以つて無上道を求むるを見る
 18 又諸の菩薩の 法の寂滅の相を知りて
 各其の國土に於いて 法を説きて佛道を求むるを見る
 19 爾の時に四部の衆 日月燈佛の
 大神通力を現じたまふを見て 其の心皆歡喜して
 各各自ら相問はく 是の事何の因緣ぞ
 20 天人所奉の尊 適めて三昧より起ちて
 妙光菩薩を讚めたまはく 汝は爲世間の眼
 一切に歸信せられて 能く法藏を奉持す
 21 我が所説の法の如きは 唯汝のみ能く證知せり
 世尊既に讚歎し 妙光をして歡喜せしめて

説是法華經 不起於此座
 是妙光法師 佛說是法華
 尋即於是日 諸法實相義
 我今於中夜 汝一心精進
 諸佛甚難值 世尊諸子等
 各各懷悲惱 聖主法之王
 我若滅度時 是德藏菩薩
 心已得通達 號曰爲淨身
 滿六十小劫 所説上妙法
 悉皆能受持 令衆歡喜已
 告於天人衆 已爲汝等説
 當入於涅槃 當離於放逸
 億劫時一遇 聞佛入涅槃
 佛滅一何速 安慰無量衆
 汝等勿憂怖 於無漏實相
 其次當作佛 亦度無量衆

この法華經を説きたまふ 六十六小劫を満てて
 此の座を起ちたまはず 説きたまふ所の上妙の法
 是の妙光法師 悉く皆能く受持す
 23 佛是の法華を説きて 衆をして歡喜せしめ已りて
 尋いで即ち是の日に於いて 天人衆に告げたまはく
 諸法實相の義 已に汝等が爲に説きつ
 我今中夜に於いて 當に涅槃に入るべし
 汝一心に精進し 當に放逸を離るべし
 諸佛には甚た値ひ難し 億劫に時に一たび遇ひたてまつる
 24 世尊の諸子等 佛涅槃に入りたまはんと聞きて
 各各に悲惱を懷く 佛滅したまふこと一何ぞ速かなる
 25 聖主法の王 無量の衆を安慰したまはく
 我若滅度しなん時 汝等憂怖すること勿れ
 是の德藏菩薩 無漏實相に於いて
 心已に通達することを得たり 其次に當に作佛すべし
 號を曰つて淨身と爲けん 亦無量の衆を度せん

佛此夜滅度 如薪盡火滅
 分布諸舍利 而起無量塔
 比丘比丘尼 其數如恒沙
 倍復加精進 以求無上道
 是妙光法師 奉持佛法藏
 八十小劫中 廣宣法華經
 是諸八王子 妙光所開化
 堅固無上道 當見無數佛
 供養諸佛已 隨順行大道
 相繼得成佛 轉次而授記
 最後天中天 號曰然燈佛
 諸仙之導師 度脫無量衆
 是妙光法師 時有一弟子
 心常懷懈怠 貪著於名利
 求名利無厭 多遊族姓家
 棄捨所習誦 廢忘不通利

佛此の夜滅度したまふこと 薪盡きて火の滅するが如し
 諸の舍利を分布して 無量の塔を起つ
 27 比丘比丘尼 其の數恒沙の如し
 倍復精進を加へて 以つて無上道を求む
 28 是の妙光法師 佛の法藏を奉持して
 八十小劫の中に 廣く法華經を宣ぶ
 29 是の諸の八王子 妙光に開化せられて
 無上道に堅固にして 當に無數の佛を見たてまつるべし
 30 諸佛を供養し已りて 隨順して大道を行じ
 相繼いで成佛することを得 轉次して授記す
 31 最後の天中天をば 號を然燈佛と曰ふ
 諸仙の導師として 無量の衆を度脱したまふ
 32 是の妙光法師 時に一りの弟子あり
 心常に懈怠を懷きて 名利に貪著せり
 名利を求むるに厭くこと無くして 多く族姓の家に遊ぶ
 習誦する所を棄捨し 廢忘して通利せず

以是因緣故 號之爲求名
 亦行衆善業 得見無數佛
 供養於諸佛 隨順行大道
 具六波羅蜜 今見釋師子
 其後當作佛 號名曰彌勒
 廣度諸衆生 其數無有量
 彼佛滅度後 懈怠者汝是
 妙光法師者 今則我身是
 我見燈明佛 本光瑞如此
 以是知今佛 欲說法華經
 今相如本瑞 是諸佛方便
 今佛放光明 助發實相義
 諸人今當知 合掌一心待
 佛當雨法雨 充足求道者
 諸求三乘人 若有疑悔者
 佛當爲除斷 令盡無有餘

是の因緣を以つての故に 之を號けて求名と爲す
 33 亦衆の善業を行じて 無數の佛を見たてまつることを得
 諸佛を供養し 隨順して大道を行じ
 34 六波羅蜜を具して 今釋師子を見たてまつる
 其後に當に作佛すべし 號をば名けて彌勒と曰はん
 廣く諸の衆生を度すること 其の數量あること無けん
 35 彼の佛の滅度の後 懈怠なりし者は汝是なり
 妙光法師は 今則ち我が身是なり
 36 我燈明佛を見たてまつりしに 本の光瑞此の如し
 是を以つて知りぬ今の佛も 法華經を説かんと欲すならん
 37 今の相本の瑞の如し 是諸佛の方便なり
 今の佛の光明を放ちたまふも 實相の義を助發せんとなり
 38 諸人今當に知るべし 合掌して一心に待ちたまつれ
 佛當に法雨を雨して 道を求むる者に充足したまふべし
 諸の三乘を求むる人 若有疑悔有らば
 佛當に爲に除斷して 盡して餘有ること無からしめたまはん

妙法蓮華經方便品第二

爾時世尊。從三昧安詳而起。告舍利弗。諸佛智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切聲聞。辟支佛。所不能知。所以者何。佛會親近。百千萬億。無數諸佛。盡行諸佛。無量道法。勇猛精進。名稱普聞。成就甚深。未曾有法。隨宜所說。意趣難解。舍利弗。吾從成佛已來。種種因緣。種種譬諭。廣演言教。無數方便。引導衆生。令離諸著。所以者何。如來方便。知見波羅蜜。皆已具足。舍利弗。如來知見。廣大深遠。無量。無礙力。無所畏。禪定。解脫。三昧。深入無際。成就一切。未曾有法。舍利弗。如來能種種分別。巧說諸法。言辭柔軟。悅可衆心。舍利弗。取要言

妙法蓮華經方便品第二

爾の時に世尊、三昧より安詳として起ちて、舍利弗に告げたまはく。諸佛の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。一切聲聞、辟支佛の知ること能はざる所なり。所以は何ん。佛會、百千萬億無數の諸佛に親近して、盡して諸佛の無量の道法を行じ、勇猛精進にして、名稱普く聞えたまへり。甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨ひて説きたまふ所、意趣解り難し。舍利弗、吾成佛してより已來、種種の因緣、種種の譬諭をもつて廣く言教を演べ、無數の方便をもつて衆生を引導して、諸の著を離れしむ。所以は何ん。如來は方便、知見波羅蜜、皆已に具足せり。舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり。無量無礙、力、無所畏、禪定、解脫、三昧ありて、深く無際に入りて、一切未曾有の法を成就せり。舍利弗、如來は能く種種に分別し、巧みに諸法を説き、言辭柔軟にして衆の心を悅可す。舍利弗、

之。無量無邊。未曾有法。佛悉成就。止。舍利弗。不須復說。所以者何。佛所成就。第一希有。難解之法。唯佛與佛。乃能究盡。諸法實相。所謂諸法。如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
 世雄不可量 諸天及世人
 一切衆生類 無能知佛者
 佛力無所畏 解脫諸三昧
 及佛諸餘法 無能測量者
 本從無數佛 具足行諸道
 甚深微妙法 難見難可了
 於無量億劫 行此諸道已
 道場得成果 我已悉知見

要を取りて之を言はば、無量無邊未曾有の法を、佛悉く成就したまへり。10 止みなん舍利弗、復説くべからず。11 所以は何ん。佛の成就したまへる所は、第一希有難解の法なり。唯、佛と佛とのみ、乃し能く諸法實相を究盡したまへり。12 所謂諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
 2 世雄は量るべからず 諸天及び世人
 1 一切衆生の類 能く佛を知る者無し
 3 佛の力無所畏 解脫諸の三昧
 4 及び佛の諸餘の法は 能く測量する者無し
 5 本無數の佛に従ひて 具足して諸道を行じたまへり
 6 甚深微妙の法は 見難く了すべきこと難し
 7 無量億劫に於いて 此の諸の道を行じ已りて
 8 道場にして果を成ずることを得て 我已に悉く知見せり

如是我大果報 種種性相義
 我及十方佛 乃能知是事
 是法不可示 言辭相寂滅
 諸餘衆生類 無有能得解
 除諸菩薩衆 信力堅固者
 諸佛弟子衆 曾供養諸佛
 一切漏已盡 住是最後身
 如是諸人等 其力所不堪
 假使滿世間 皆如舍利弗
 盡思共度量 不能測佛智
 正使滿十方 皆如舍利弗
 及餘諸弟子 亦滿十方刹
 盡思共度量 亦復不能知
 辟支佛利智 無漏最後身
 亦滿十方界 其數如竹林
 斯等共一心 於億無量劫

6 是の如き大果報 種種の性相の義
 7 我及び十方の佛 乃し能く是の事を知しめせり
 8 是の法は示すべからず 言辭の相寂滅せり
 9 諸餘の衆生の類 能く得解すること有ること無し
 10 諸の菩薩衆の 信力堅固なる者をば除く
 11 諸佛の弟子衆の 曾諸佛を供養し
 12 一切の漏已に盡して 是の最後身に住せる
 13 是の如き諸人等 其の力堪へざる所なり
 14 假使世間に滿てらん 皆舍利弗の如くにして
 15 思を盡して共に度量すとも 佛智は測ること能はじ
 16 正使十方に滿てらん 皆舍利弗の如く
 17 及び餘の諸の弟子 亦十方の刹に滿てらん
 18 思を盡して共に度量すとも 亦復知ること能はじ
 19 辟支佛の利智にして 無漏の最後身なる
 20 亦十方界に滿ちて 其の數竹林の如くならん
 21 斯等共に一心に 億無量劫に於いて

欲思佛實智 莫能知少分
 新發意菩薩 供養無數佛
 了達諸義趣 又能善說法
 如稻麻竹葦 充滿十方刹
 一心以妙智 於恆河沙劫
 咸皆共思量 不能知佛智
 不退諸菩薩 其數如恆沙
 一心共思求 亦復不能知
 又告舍利弗 無漏不思議
 甚深微妙法 我今已具得
 唯我知是相 十方佛亦然
 舍利弗當知 諸佛語無異
 於佛所說法 當生大信力
 世尊法久後 要當說真實
 告諸聲聞衆 及求緣覺乘
 我令脫苦縛 速得涅槃者

佛の實智を思はんと欲すとも 能く少分をも知ること莫けん
 12 新發意の菩薩 無數の佛を供養し
 諸の義趣を了達して 又能善く法を説かんもの
 稻麻竹葦の如くにして 十方の刹に充滿せん
 一心に妙智を以つて 恆河沙劫に於いて
 咸く皆共に思量すとも 佛智を知ること能はじ
 13 不退の 諸の菩薩 其の數恆沙の如くにして
 一心に共に思求すとも 亦復知ること能はじ
 14 又舍利弗に告げたまはく 無漏不思議の
 甚深微妙の法をば 我今已に具へ得たり
 唯我のみ是の相を知れり 十方の佛も亦然なり
 15 舍利弗當に知るべし 諸佛は語異ること無し
 佛の所説の法に於いて 當に大信力を生ずべし
 世尊は法久しくして後 要す當に眞實を説きたまふべし
 16 諸の聲聞衆 及び緣覺乘を求むるものに告ぐ
 我苦縛を脱し 涅槃を速得せしめたることは

佛以方便力 示以三乘教
 衆生處處著 引之令得出

爾時大衆中。有諸聲聞。漏盡阿羅漢。阿
 若橋陳如等。千二百人。及發聲聞。辟支
 佛心。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。
 各作是念。今者世尊。何故慇懃。稱數方
 便。而作是言。佛所得法。甚深難解。有
 所言説。意趣難知。一切聲聞。辟支佛。
 所不能及。佛説一解脫義。我等亦得此法。
 到於涅槃。而今不知。是義所趣。爾時舍
 利弗。知四衆心疑。自亦未了。而白佛言。
 世尊何因何緣。慇懃稱數。諸佛第一方便。
 甚深微妙。難解之法。我自昔來。未曾從
 佛。聞如是説。今者四衆。咸皆有疑。唯
 願世尊。敷演斯事。世尊何故。慇懃稱數。
 甚深微妙。難解之法。爾時舍利弗。欲重

佛方便力を以つて 示すに三乗の教を以つてす
 衆生の處處の著 之を引いて出づることを得しめんとなり
 爾の時に大衆の中に、諸の聲聞、漏盡の阿羅漢、阿若橋陳
 如等の千二百人、及び聲聞、辟支佛の心を發せる比丘、比丘尼、
 優婆塞、優婆夷、各是の念を作さく、今者世尊、何が故ぞ、
 慇懃に方便を稱數して是の言を作したまふ。佛の得たまへる所の
 法は、甚深にして解り難く、言説したまふ所有るは、意趣知り難
 し。一切の聲聞、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。佛、一解
 脫の義を説きたまひしかば、我等亦、此の法を得て涅槃に到れり。
 今、是の義の所趣を知らず。爾の時に舍利弗、四衆の心の疑
 を知り、自らも亦未だ了らず。佛に白して言さく、世尊、何の
 因何の緣ありてか、慇懃に諸佛第一の方便、甚深微妙難解の法を
 稱數したまふ。我自昔より來、未だ曾て、佛に従ひて是の如き
 説を聞きたてまつらず。今者四衆、咸く皆疑有り、唯、願
 はくば世尊、斯の事を敷演したまへ。世尊何が故ぞ、慇懃に甚
 深微妙難解の法を稱數したまふ。爾の時に舍利弗、重ねて此の

宣此義、而說偈言
 慧日大聖尊
 自說得如是
 禪定解脫等
 道場所得法
 我意難可測
 無問而自說
 智慧甚微妙
 無漏諸羅漢
 今皆墮疑網
 其求緣覺者
 諸天龍鬼神
 相視懷猶豫
 是事爲云何
 於諸聲聞衆
 我今自於智

久乃說是法
 力無畏三昧
 不可思議法
 無能發問者
 亦無能問者
 稱歎所行道
 諸佛之所得
 及求涅槃者
 佛何故說是
 比丘比丘尼
 及乾闥婆等
 瞻仰兩足尊
 願佛爲解說
 佛說我第一
 疑惑不能了

義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、
 10 慧日大聖尊 久しくして乃し是の法を説きたまふ
 自らは是の如き 力無畏三昧
 禪定解脫等の 不可思議の法を得たりと説きたまふ
 11 道場所得の法は 能く問を發す者無し
 我が意測るべきこと難し 亦能く問ふ者無し
 12 問ふこと無けれども而も自ら説きて 所行の道を稱歎したまふ
 智慧甚だ微妙にして 諸佛の得たまへる所なり
 13 無漏の 諸の羅漢 及び涅槃を求むる者
 今皆疑網に墮しぬ 佛何が故ぞ是を説きたまふ
 14 其の緣覺を求むる者 比丘比丘尼
 諸の天龍鬼神 及び乾闥婆等
 相視て猶豫を懷き 兩足尊を瞻仰す
 是の事云何なるべき 願はくば佛爲に解説したまへ
 15 諸の聲聞衆に於いて 佛我を第一なりと説きたまふ
 我今自ら智に於いて 疑惑し 了ること能はず

爲是究竟法
 佛口所生子
 願出微妙音
 諸天龍神等
 求佛諸菩薩
 又諸萬億國
 合掌以敬心

爲是所行道
 合掌瞻仰待
 時爲如實説
 其數如恆沙
 大數有八萬
 轉輪聖王至
 欲聞具足道

爾時佛告舍利弗。止。止。不須復説。若説是事。一切世間。諸天及人。皆當驚疑。舍利弗。重白佛言。世尊。唯願説之。唯願説之。所以者何。是會無數。百千萬億。阿僧祇衆。生。曾見諸佛。諸根猛利。智慧明了。聞佛所説。則能敬信。爾時舍利弗。欲重宣此義。而説偈言

法王無上尊
 唯說願勿慮

爲めて是究竟の法なりや 爲めて是所行の道なりや
 16 佛口所生の子 合掌瞻仰して待ちたてまつる
 願はくば微妙の音を出して 時に爲に實の如く説きたまへ
 17 諸の天龍神等 其の數恆沙の如し
 佛を求むる 諸の菩薩 大數八萬有り
 18 又 諸の萬億國の 轉輪聖王の至れる
 合掌して敬心を以つて 具足の道を聞きたてまつらんと欲す
 19 爾の時に佛 舍利弗に告げたまはく、止みなん止みなん復説くべからず。 20 若是の事を説かば、一切世間の諸天及び人、皆當に驚疑すべし。 21 舍利弗、重ねて佛に白して言さく、世尊、唯願はくば之を説きたまへ。 唯願はくば之を説きたまへ。 22 所以は何ん。是の會の無數百千萬億阿僧祇の衆生は、曾諸佛を見たてまつりて、諸根猛利にして智慧明了なり。佛の所説を聞きたてまつらば、則ち能く敬信せん。 23 爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、
 法王無上尊 唯説きたまへ願はくば慮したまふこと勿れ

是會無量衆 有能敬信者
佛復止舍利弗。若說是事。一切世間。天人
阿脩羅。皆當驚疑。增上慢比丘。將墜於大
院。爾時世尊。重說偈言

止止不須說 我法妙難思
諸增上慢者 聞必不敬信

爾時舍利弗。重白佛言。世尊。唯願說之。唯
願說之。今此會中。如我等比。百千萬億。世
世已曾。從佛受化。如此人等。必能敬信。長
夜安穩。多所饒益。爾時舍利弗。欲重宣此
義。而說偈言

無上兩足尊 願說第一法
我爲佛長子 唯垂分別說
是會無量衆 能敬信此法
佛已曾世世 教化如是等

是の會の無量の衆 能く敬信すべき者有り

佛復止みなん舍利弗。若是の事を説かば、一切世間の天、人、
阿脩羅皆當に驚疑すべし。増上慢の比丘は將に大院に墜つべし。
爾の時に世尊、重ねて偈を説きて言はく、

止みなん止みなん説くべからず 我が法は妙にして思ひ難し
諸の増上慢の者は 聞きて必ず敬信せし

爾の時に舍利弗、重ねて佛に白して言さく、世尊、唯願はくば
之を説きたまへ。唯願はくば之を説きたまへ。今、此の會中の
我が如き等比百千萬億なるは、世世に已に曾て佛に従ひて化を受
けたり。此の如き人等、必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益す
る所多からん。爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲し
て、偈を説きて言さく、

無上兩足尊 願はくば第一の法を説きたまへ
我は爲佛の長子 唯分別し説くことを垂れたまへ
是の會の無量衆 能く此の法を敬信せん
佛已に曾て世世に 是の如き等を教化したまへり

皆一心合掌 欲聽受佛語

我等千二百 及餘求佛者

願爲此衆故 唯垂分別說

是等聞此法 則生大歡喜

爾時世尊。告舍利弗。汝已慇懃三請。豈得
不說。汝今諦聽。善思念之。吾當爲汝。分別
解說。說此語時。會中有比丘。比丘尼。優婆
塞。優婆夷。五千人等。即從座起。禮佛而
退。所以者何。此輩罪根深重。及増上慢。未
得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世
尊默然。而不制止。爾時佛。告舍利弗。我今
此衆。無復枝葉。純有貞實。舍利弗。如是増
上慢人。退亦佳矣。汝今善聽。當爲汝說。舍
利弗言。唯然。世尊。願樂欲聞。佛告舍利
弗。如是妙法。諸佛如來。時乃說之。如優曇

皆一心に合掌して 佛語を聽受せんと欲す

我等千二百 及び餘の佛を求むる者あり

願はくば此の衆の爲の故に 唯分別し説くことを垂れたまへ

是等此の法を聞きたてまつらば 則ち大歡喜を生ぜん

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまはく、汝已に慇懃に三たび
請じつ。豈説かざることを得んや。汝今諦かに聽き、善く之
を思念せよ。吾當に汝が爲に分別し解説すべし。此の語を説き
たまふ時、會中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等有り。
即ち座より起りて佛を禮して退きぬ。所以は何ん。此の輩は
罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未
だ證せざるを證せりと謂へり。此の如き失あり。是を以つて住
せず。世尊默然として制止したまはず。爾の時に佛、舍利弗に
告げたまはく、我が今此の衆は復枝葉無し、純ら貞實のみあら
ん。舍利弗、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く
聽け、當に汝が爲に説くべし。舍利弗の言さく、唯然なり。世
尊、願樂はくば聞きたてまつらんと欲す。佛、舍利弗に告げた

鉢華。時一現耳。舍利弗。汝等當信。佛之所說。言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜說法。意趣難解。所以者何。我以無數方便。種種因緣。譬諭言詞。演說諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸佛。乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。諸佛世尊。欲令衆生。開佛知見。使得清淨故。出現於世。欲示衆生。佛知見故。出現於世。欲令衆生。悟佛知見故。出現於世。欲令衆生。入佛知見道故。出現於世。舍利弗。是爲諸佛。唯以一大事因緣故。出現於世。佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作。常爲一事。唯以佛之知見。示悟衆生。舍利弗。如來但以。一佛

まはく、是の如き妙法は、諸佛如來、時に乃し之を説きたまふ。優曇鉢華の時に一たび現するが如きのみ。11 舍利弗、汝等當に佛の所説を信すべし。言虚妄ならず。12 舍利弗、諸佛隨宜の說法は意趣解り難し。所以は何ん。我無數の方便、種種の因緣、譬諭の言詞を以つて諸法を演説す。13 是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸佛のみ有して、乃し能く之を知しめせり。14 所以は何ん、諸佛世尊は、唯一大事の因緣を以つての故に世に出現したまふ。15 舍利弗、云何なるをか諸佛世尊は、唯一大事の因緣を以つての故に世に出現したまふと名くる。16 諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、清淨なるを得しめんと欲すが故に世に出現したまふ。17 衆生に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふ。18 衆生をして、佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。19 衆生をして、佛知見の道に入らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。20 舍利弗、是を諸佛は唯一大事の因緣を以つての故に世に出現したまふと爲く。21 佛、舍利弗に告げたまはく、諸佛如來は但菩薩を教化したまふ。22 諸の所作常に一事の爲な

乗故。爲衆生說法。無有餘乘。若二若三。舍利弗。一切十方諸佛。法亦如是。舍利弗。過去諸佛。以無量無數方便、種種因緣、譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲一佛乘故。是諸衆生。從諸佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。未來諸佛。當出於世。亦以無量。無數方便、種種因緣。譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。現在十方。無量百千萬億。佛土中。諸佛世尊。多所饒益。安樂衆生。是諸佛。亦以無量。無數方便、種種因緣。譬諭言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。是諸佛。但教化菩薩。欲以佛之知見。示

り。唯佛の知見を以つて、衆生に示悟したまはんとなり。23 舍利弗、如來は但一佛乘を以つての故に、衆生の爲に法を説きたまふ。餘乘の若は二、若は三有ること無し。24 舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。25 舍利弗、過去の諸佛も、無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以つて、衆生の爲に諸法を演説したまふ。26 是の法も皆一佛乘の爲の故なり。27 是の諸の衆生の、諸佛に從ひたてまつりて法を聞きしも、究竟して皆一切種智を得たり。28 舍利弗、未來の諸佛の、當に世に出でたまふべきも亦無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以つて、衆生の爲に諸法を演説したまふ。29 是の法も、皆一佛乘の爲の故なり。30 是の諸の衆生の佛に從ひたてまつりて法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得べし。31 舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の、衆生を饒益し安樂せしめたまふ所多き、是の諸佛も、亦無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以つて、衆生の爲に諸法を演説したまふ。32 是の法も、皆一佛乘の爲の故なり。33 是の諸の衆生の、佛に從ひたてまつりて法を聞けるも、究竟して皆一切

衆生故。欲以佛之知見。悟衆生故。欲令衆生。入佛知見道故。舍利弗。我今亦復如是。知諸衆生。有種種欲。深心所著。隨其本性。以種種因緣。譬諭言辭。方便力故。而爲說法。舍利弗。如此皆爲。得一佛乘。一切種智故。舍利弗。十方世界中。尚無二乘。何況有三。舍利弗。諸佛出於五濁惡世。所謂劫濁。煩惱濁。衆生濁。見濁。命濁。如是舍利弗。劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妒。成就諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘。分別說三。舍利弗。若我弟子。自謂阿羅漢。辟支佛者。不聞不知。諸佛如來。但教化菩薩事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支佛。又舍利弗。是諸比丘。比丘尼。自謂

種智を得。舍利弗。是の諸佛は、但菩薩を教化したまふ。佛の知見を以て衆生に示さんと欲すが故に。佛の知見を以て衆生を悟らしめんと欲すが故に。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲すが故なり。舍利弗。我も今亦復是の如し。諸の衆生に、種種の欲、深心の所著有ることを知りて、其の本性に隨ひて種種の因縁、譬諭の言辭、方便力を以つての故に、而も爲に法を説く。舍利弗。此の如きは、皆一佛乘の一切種智を得しめんが爲の故なり。舍利弗。十方世界の中には、尚二乘無し。何に況や三有らんや。舍利弗。諸佛は五濁の惡世に出でたまふ。所謂劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり。是の如し。舍利弗。劫の濁亂の時、衆生垢重く、慳貪嫉妒にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便力を以つて、一佛乘に於いて分別して三と説きたまふ。舍利弗。若我が弟子、自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂はん者、諸佛如來の、但菩薩を教化したまふ事を聞かず知らずんば、此佛弟子に非ず。阿羅漢に非ず。辟支佛に非ず。又舍利弗。是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり。

已得阿羅漢。是最後身。究竟涅槃。便不復志求。阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩。皆是增上慢人。所以者何。若有比丘。實得阿羅漢。若不信此法。無有是處。除佛滅度後。現前無佛。所以者何。佛滅度後。如是等經。受持讀誦。解其義者。是人難得。若遇餘佛。於此法中。便得決了。舍利弗。汝等當一心信解。受持佛語。諸佛如來。言無虛妄。無有餘乘。唯一佛乘。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

是最得身なり。究竟の涅槃なりと謂ひて、便ち復阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし。此の輩は、皆是増上慢の人なり。所以は何ん。若比丘の實に阿羅漢を得たる有りて、若此の法を信ぜずといはん。是の處有ること無けん。佛滅度の後、現前に佛無からんをば除く。所以は何ん。佛滅度の後に是の如き等の經を受持し、讀誦し、其の義を解る者、是の人得難ければなり。若餘佛に遇はば、此の法の中に於いて、便ち決了することを得ん。舍利弗。汝等當に一心に信解して、佛語を受持すべし。諸佛如來は言虛妄無し。餘乘有ること無く、唯一佛乘のみなり。

五 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

比丘比丘尼の 増上慢を懷くこと有る
 優婆塞の我慢なる 優婆夷の不信なる
 是の如き四衆等 其の數五千有り
 自ら其の過を見ず 戒に於いて缺漏有りて

護惜其瑕疵 是小智已出
 衆中之糟糠 佛威德故去
 斯人尠福德 不堪受是法
 此衆無枝葉 唯有諸貞實
 舍利弗善聽 諸佛所得法
 無量方便力 而爲衆生說
 衆生心所念 種種所行道
 若干諸欲性 先世善惡業
 佛悉知是已 以諸緣譬諭
 言辭方便力 令一切歡喜
 或說脩多羅 伽陀及本事
 本生未曾有 亦說於因緣
 譬諭并祇夜 優婆提舍經
 鈍根樂小法 貪著於生死
 於諸無量佛 不行深妙道
 衆苦所惱亂 爲是說涅槃

其の瑕疵を護惜す 是の小智は已に出でぬ
 衆中の糟糠なり 佛の威徳の故に去りぬ
 斯の人は福德尠くして 是の法を受くるに堪へず
 此の衆は枝葉無し 唯諸の貞實のみ有り
 舍利弗善く聽け 諸佛の所得の法は
 無量の方便力をもつて 衆生の爲に説きたまふ
 衆生の心の所念 種種の所行道
 若干の諸の欲性 先世の善惡の業
 佛悉く是を知しめし已りて 諸の緣譬諭
 言辭方便力を以つて 一切をして歡喜せしめたまふ
 或は脩多羅 伽陀及び本事
 本生未曾有を説き 亦因縁を説きたまふ
 譬諭并びに祇夜 優婆提舍經を説きたまふ
 鈍根にして小法を樂ひ 生死に貪著し
 諸の無量の佛に於いて 深妙の道を行ぜずして
 衆苦に惱亂せらる 是が爲に涅槃を説きたまふ

我説是方便 令得入佛慧
 未曾説汝等 當得成佛道
 所以未曾説 說時未至故
 今正是其時 決定説大乘
 我此九部法 隨順衆生説
 入大乘爲本 以故説是經
 有佛子心淨 柔軟亦利根
 無量諸佛所 而行深妙道
 爲此諸佛子 説是大乘經
 我記如是人 來世成佛道
 以深心念佛 修持淨戒故
 此等聞得佛 大喜充遍身
 佛知彼心行 故爲説大乘
 聲聞若菩薩 聞我所説法
 乃至於一偈 皆成佛無疑
 十方佛土中 唯有一乘法

10 我是の方便を設けて 佛慧に入ることを得しむ
 未だ曾て汝等 當に佛道を成ずることを得べしと説かず
 11 未だ會て説かざる所以は 說時未だ至らざるが故なり
 今正しく是れ其の時なり 決定して大乘を説く
 12 我が此の九部の法は 衆生に隨順して説く
 大乘に入るに爲本なり 故を以つて是の經を説く
 13 佛子の心淨く 柔軟に亦利根にして
 無量の諸佛の所にして 深妙の道を行ずる有り
 14 此の諸の佛子の爲に 是の大乘經を説く
 15 我是の如き人 來世に佛道を成ぜんと記す
 深心に佛を念じ 淨戒を修持するを以つての故に
 16 此等佛を得べしと聞きて 大喜身に充遍す
 佛彼の心行を知れり 故に爲に大乘を説く
 17 聲聞若は菩薩 我が所説の法を聞くこと
 乃至一偈に於いてもせば 皆成佛せんこと疑無し
 十方佛土の中には 唯一乗の法のみ有り

無二亦無三
但以假名字
說佛智慧故
唯此一事實
終不以小乘
佛自住大乘
定慧力莊嚴
自證無上道
若以小乘化
我則墮慳貪
若人信歸佛
亦無貪嫉意
故佛於十方
我以相嚴身
無量衆所尊
舍利弗當知

除佛方便說
引導於衆生
諸佛出於世
餘二則非眞
濟度於衆生
如其所得法
以此度衆生
大乘平等法
乃至於一人
此事爲不可
如來不欺誑
斷諸法中惡
而獨無所畏
光明照世間
爲說實相印
我本立誓願

二無く亦三無し 佛の方便の説をば除く
但假の名字を以つて 衆生を引導したまふ
佛の智慧を説かんが故なり 諸佛世に出でたまふには
唯此の一事のみ實なり 餘の二は則ち眞に非ず
終に小乘を以つて 衆生を濟度したまはず
佛は自ら大乘に住したまへり 其の所得の法の如きは
定慧の力莊嚴せり 此を以つて衆生を度したまふ
21 自ら無上道 大乘平等の法を證して
若小乘を以つて化すること 乃至一人に於いてもせば
我則ち慳貪に墮しなん 此の事は爲めて不可なり
22 若人佛に信歸すれば 如來欺誑したまはず
亦貪嫉の意無し 諸法の中の惡を斷じたまへり
故に佛十方に於いて 獨畏るる所無し
23 我相を以つて身を嚴り 光明世間を照す
無量の衆に尊まれて 爲に實相の印を説く
24 舍利弗當に知るべし 我本誓願を立てて

欲令一切衆
如我昔所願
化一切衆生
若我遇衆生
無智者錯亂
我知此衆生
堅著於五欲
以諸欲因緣
輪廻六趣中
受胎之微形
薄德少福人
入邪見稠林
依止此諸見
深著虛妄法
我慢自矜高
於千萬億劫

如我等無異
今者已滿足
皆令入佛道
盡教以佛道
迷惑不受教
未曾修善本
癡愛故生惱
墜墮三惡道
備受諸苦毒
世世常增長
衆苦所逼迫
若有若無等
具足六十二
堅受不可捨
詭曲心不實
不聞佛名字

一切の衆をして 我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき
25 我が昔の所願の如き 今者已に満足しぬ
一切衆生を化して 皆佛道に入らしむ
26 若我衆生に遇へば 盡く教ふるに佛道を以つてす
無智の者は錯亂し 迷惑して教を受けず
27 我知りぬ此の衆生は 未だ曾て善本を修せず
堅く五欲に著して 癡愛の故に惱を生ず
28 諸欲の因縁を以つて 三惡道に墜墮し
六趣の中に輪廻して 備さに諸の苦毒を受く
29 受胎の微形 世世に常に增長し
薄德少福の人として 衆苦に逼迫せらる
30 邪見の稠林 若は有若は無等に入り
此の諸見に依止して 六十二を具足す
31 深く虚妄の法に著して 堅く受けて捨つべからず
我慢にして自ら矜高し 詭曲にして心不實なり
32 千萬億劫に於いて 佛の名字を聞かず

亦不聞正法 如是人難度
 是故舍利弗 我爲設方便
 說諸盡苦道 示之以涅槃
 我雖說涅槃 是亦非眞滅
 諸法從本來 常自寂滅相
 佛子行道已 來世得作佛
 我有方便力 開示三乘法
 一切諸世尊 皆說一乘道
 今此諸大衆 皆應除疑惑
 諸佛語無異 唯一無二乘
 過去無數劫 無量滅度佛
 百千萬億種 其數不可量
 如是諸世尊 種種緣譬諭
 無數方便力 演說諸法相
 是諸世尊等 皆說一乘法
 化無量衆生 令入於佛道

亦正法を聞かず 是の如き人は度し難し
 33 是の故に舍利弗 我爲に方便を設けて
 諸の盡苦の道を説き 之を示すに涅槃を以つてす
 34 我涅槃を説くと雖も 是亦眞の滅に非ず
 諸法は本より來 常に自ら寂滅の相なり
 佛子道を行じ已りて 來世に作佛することを得ん
 35 我方方便力有りて 三乗の法を開示す
 一切の諸の世尊も 皆一乗の道を説きたまふ
 36 今此の諸の大衆 皆應に疑惑を除くべし
 諸佛は語異なること無し 唯一にして二乘無し
 37 過去の無數劫の 無量の滅度の佛
 百千萬億種にして 其の數量るべからず
 38 是の如き諸の世尊も 種種の緣譬諭
 無數の方便力をもつて 諸法の相を演説したまひき
 39 是の諸の世尊等も 皆一乗の法を説きて
 無量の衆生を化して 佛道に入らしめたまひき

又諸大聖主 知一切世間
 天人羣生類 深心之所欲
 更以異方便 助顯第一義
 若有衆生類 值諸過去佛
 若聞法布施 或持戒忍辱
 精進禪智等 種種修福德
 如是諸人等 皆已成佛道
 諸佛滅度已 若人善觀心
 如是諸衆生 皆已成佛道
 諸佛滅度已 供養舍利者
 起萬億種塔 金銀及頗梨
 碑磔與碼碯 玫瑰瑠璃珠
 清淨廣嚴飾 莊校於諸塔
 或有起石廟 栴檀及沈水
 木棊并餘材 甌瓦泥土等
 若於曠野中 積土成佛廟

40 又諸の大聖主 一切世間の
 天人羣生の類の 深心の所欲を知しめして
 更に異の方便を以つて 第一義を助顯したまひき
 41 若衆生の類有りて 諸の過去の佛に値ひたてまつりて
 若は法を聞きて布施し 或は持戒忍辱
 精進禪智等 種種に福德を修せし
 是の如き諸人等 皆已に佛道を成じき
 42 諸佛滅度し已りて 若人善觀の心ありし
 是の如き諸の衆生 皆已に佛道を成じき
 43 諸佛滅度し已りて 舍利を供養する者
 萬億種の塔を起てて 金銀及び頗梨
 碑磔と碼碯と 玫瑰瑠璃珠とをもつて
 清淨に廣く嚴飾し 諸の塔を莊校し
 44 或は石廟を起て 栴檀及び沈水
 木棊並びに餘の材 甌瓦泥土等をもつてせる有り
 45 若は曠野の中に於いて 土を積みて佛廟を成し

乃至童子戲 聚沙爲佛塔
 如是諸人等 皆已成佛道
 若人爲佛故 建立諸形像
 刻彫成衆相 皆已成佛道
 或以七寶成 鑄鉅赤白銅
 白鐵及鉛錫 鐵木及與泥
 或以膠漆布 嚴飾作佛像
 如是諸人等 皆已成佛道
 綵畫作佛像 百福莊嚴相
 自作若使人 皆已成佛道
 乃至童子戲 若草木及筆
 或以指爪甲 而畫作佛像
 如是諸人等 漸漸積功德
 具足大悲心 皆已成佛道
 但化諸菩薩 度脫無量衆
 若人於塔廟 寶像及畫像

乃至童子の戯に 沙を聚めて佛塔を爲せる
 是の如き諸人等 皆已に佛道を成じき
 若人佛の爲の故に 諸の形像を建立し
 刻彫して衆相を成せる 皆已に佛道を成じき
 或は七寶を以つて成し 鑄鉅赤白銅
 白鐵及び鉛錫 鐵木及與び泥
 或は膠漆布を以つて 嚴飾して佛像を作せる
 是の如き諸人等 皆已に佛道を成じき
 綵畫して佛像の 百福莊嚴の相を作すこと
 自らも作し若し人をしてもせる 皆已に佛道を成じき
 乃至童子の戯に 若し草木及び筆
 或は指の爪甲を以つて 畫きて佛像を作せる
 是の如き諸人等 漸漸に功德を積み
 大悲心を具足して 皆已に佛道を成じき
 但諸の菩薩を化し 無量の衆を度脱しき
 若人塔廟 寶像及び畫像に於いて

以華香旛蓋 敬心而供養
 若使人作樂 擊鼓吹角貝
 簫笛琴箏篪 琵琶鏡銅鈸
 如是衆妙音 盡持以供養
 或以歡喜心 歌頌頌佛德
 乃至一小音 皆已成佛道
 若人散亂心 乃至以一華
 供養於畫像 漸見無數佛
 或有人禮拜 或復但合掌
 乃至舉一手 或復小低頭
 以此供養像 漸見無量佛
 自成無上道 廣度無數衆
 入無餘涅槃 如薪盡火滅
 若人散亂心 入於塔廟中
 一稱南無佛 皆已成佛道
 於諸過去佛 現在或滅後

華香旛蓋を以つて 敬心にして供養し
 若し人をして樂を作さしめ 鼓を撃ち角貝を吹き
 簫笛琴箏篪 琵琶鏡銅鈸
 是の如き衆の妙音 盡く持以つて供養し
 或は歡喜の心を以つて 歌頌して佛徳を頌し
 乃至一小音をもつてせし 皆已に佛道を成じき
 若人散亂の心に 乃至一華を以つて
 畫像に供養せし 漸く無數の佛を見たてまつりき
 或は人有りて禮拜し 或は復但合掌し
 乃至一手を挙げ 或は復小しく頭を低れて
 此を以つて像に供養せし 漸く無量の佛を見たてまつりて
 自ら無上道を成じて 廣く無數の衆を度し
 無餘涅槃に入ること 薪盡きて火の滅ゆるが如くありき
 若し入散亂の心に 塔廟の中に入りて
 一たび南無佛と稱せし 皆已に佛道を成じき
 諸の過去の佛の 現在或は滅後に於いて

若有聞是法 皆已成佛道
 未來諸世尊 其數無有量
 是諸如來等 亦方便說法
 一切諸如來 以無量方便
 度脫諸衆生 入佛無漏智
 若有聞法者 無一不成佛
 諸佛本誓願 我所行佛道
 普欲令衆生 亦同得此道
 未來世諸佛 雖說百千億
 無數諸法門 其實爲一乘
 諸佛兩足尊 知法常無性
 佛種從緣起 是故說一乘
 是法住法位 世間相常住
 於道場知已 導師方便說
 天人所供養 現在十方佛
 其數如恆沙 出現於世間

若此の法を聞くこと有りし 皆已に佛道を成じき
 58 未來の諸の世尊 其の數量有ること無けん
 是の諸の如來等も 亦方便して法を説きたまはん
 59 一切の諸の如來 無量の方便を以つて
 諸の衆生を度脱して 佛の無漏智に入れたまはん
 若法を聞くこと有らん者は 一りとして成佛す無けん
 60 諸佛の本誓願は 我が所行の佛道
 普く衆生をして 亦同じく此の道を得しめんと欲す
 61 未來世の諸佛 百千億
 無數の諸の法門を説きたまふと雖も 其實には一乘の爲なり
 62 諸佛兩足尊 法は常に無性なり
 佛種は緣によりて起るを知らしめす 是の故に一乘を説きたまはん
 63 是の法住法位に住して 世間相常住なり
 道場に於いて知しめし已りて 導師は方便して説きたまはん
 64 天人の供養したてまつる所の 現在十方の佛
 其の數恆沙の如く 世間に出現したまふも

安穩衆生故 亦説如是法
 知第一寂滅 以方便力故
 雖示種種道 其實爲佛乘
 知衆生諸行 深心之所念
 過去所習業 欲性精進力
 及諸根利鈍 以種種因緣
 譬諭亦言辭 隨應方便説
 今我亦如是 安穩衆生故
 以種種法門 宣示於佛道
 我以智慧力 知衆生性欲
 方便説諸法 皆令得歡喜
 舍利弗當知 我以佛眼觀
 見六道衆生 貧窮無福慧
 入生死險道 相續苦不斷
 深著於五欲 如犍牛愛尾
 以貪愛自蔽 盲暝無所見

衆生を安穩ならしめんが故に 亦是の如き法を説きたまふ
 65 第一の寂滅を知らしめして 方便力を以つての故に
 種種の道を示すと雖も 其實には佛乘の爲なり
 66 衆生の諸行 深心の所念
 過去所習の業 欲性精進力
 及び諸根の利鈍を知らしめして 種種の因緣
 譬諭亦言辭を以つて 應に隨ひて方便して説きたまふ
 67 今我も亦是の如し 衆生を安穩ならしめんが故に
 種種の法門を以つて 佛道を宣示す
 68 我以智慧力を以つて 衆生の性欲を知りて
 方便して諸法を説きて 皆歡喜することを得しむ
 69 舍利弗當に知るべし 我佛眼を以つて觀じて
 六道の衆生を見るに 貧窮にして福慧無し
 70 生死の險道に入りて 相續して苦斷えず
 深く五欲に著すること 犍牛の尾を愛するが如し
 71 貪愛を以つて自ら蔽ひ 盲暝にして見る所無し

不^レ求^レ大^レ勢^レ佛^レ 及^レ與^レ斷^レ苦^レ法^レ
 深^レ入^レ諸^レ邪^レ見^レ 以^レ苦^レ欲^レ捨^レ苦^レ
 爲^レ是^レ衆^レ生^レ故^レ 而^レ起^レ大^レ悲^レ心^レ
 我^レ始^レ坐^レ道^レ場^レ 觀^レ樹^レ亦^レ經^レ行^レ
 於^レ三^レ七^レ日^レ中^レ 思^レ惟^レ如^レ是^レ事^レ
 我^レ所^レ得^レ智^レ慧^レ 微^レ妙^レ最^レ第^レ一^レ
 衆^レ生^レ諸^レ根^レ鈍^レ 著^レ樂^レ癡^レ所^レ盲^レ
 如^レ斯^レ之^レ等^レ類^レ 云^レ何^レ而^レ可^レ度^レ
 爾^レ時^レ諸^レ梵^レ王^レ 及^レ諸^レ天^レ帝^レ釋^レ
 護^レ世^レ四^レ天^レ王^レ 及^レ大^レ自^レ在^レ天^レ
 并^レ餘^レ諸^レ天^レ衆^レ 眷^レ屬^レ百^レ千^レ萬^レ
 恭^レ敬^レ合^レ掌^レ禮^レ 請^レ我^レ轉^レ法^レ輪^レ
 我^レ即^レ自^レ思^レ惟^レ 若^レ但^レ讚^レ佛^レ乘^レ
 衆^レ生^レ沒^レ在^レ苦^レ 不^レ能^レ信^レ是^レ法^レ
 破^レ法^レ不^レ信^レ故^レ 墜^レ於^レ三^レ惡^レ道^レ
 我^レ寧^レ不^レ說^レ法^レ 疾^レ入^レ於^レ涅^レ槃^レ

大勢の佛 及與斷苦の法を求めず
 深く諸の邪見に入りて 苦を以つて苦を捨てんと欲す
 是の衆生の爲の故に 而も大悲心を起しき
 我始め道場に坐して 觀樹し亦經行して
 三七日の中に於いて 是の如き事を思惟しき
 我が所得の智慧は 微妙にして最も第一なり
 衆生の諸根鈍にして 樂に著し癡に盲ひられたり
 斯の如きの等類 云何がして度す可きと
 爾の時に諸の梵王 及び諸の天帝釋
 護世四天王 及び大自在天
 并びに餘の諸の天衆 眷屬百千萬
 恭敬合掌し禮して 我に轉法輪を請す
 我即ち自ら思惟すらく 若但佛乘を讚めば
 衆生苦に沒在し 是の法を信すること能はじ
 法を破し 信ぜざるが故に 三惡道に墮ちなん
 我寧ろ法を説かずとも 疾く涅槃にや入りなまし

尋^レ念^レ過^レ去^レ佛^レ 所^レ行^レ方^レ便^レ力^レ
 我^レ今^レ所^レ得^レ道^レ 亦^レ應^レ說^レ三^レ乘^レ
 作^レ是^レ思^レ惟^レ時^レ 十^レ方^レ佛^レ皆^レ現^レ
 梵^レ音^レ慰^レ諭^レ我^レ 善^レ哉^レ釋^レ迦^レ文^レ
 第^レ一^レ之^レ導^レ師^レ 得^レ是^レ無^レ上^レ法^レ
 隨^レ諸^レ一^レ切^レ佛^レ 而^レ用^レ方^レ便^レ力^レ
 我^レ等^レ亦^レ皆^レ得^レ 最^レ妙^レ第^レ一^レ法^レ
 爲^レ諸^レ衆^レ生^レ類^レ 分^レ別^レ說^レ三^レ乘^レ
 少^レ智^レ樂^レ小^レ法^レ 不^レ自^レ信^レ作^レ佛^レ
 是^レ故^レ以^レ方^レ便^レ 分^レ別^レ說^レ諸^レ果^レ
 雖^レ復^レ說^レ三^レ乘^レ 但^レ爲^レ教^レ菩^レ薩^レ
 舍^レ利^レ弗^レ當^レ知^レ 我^レ聖^レ師^レ子^レ
 深^レ淨^レ微^レ妙^レ音^レ 喜^レ稱^レ南^レ無^レ佛^レ
 復^レ作^レ如^レ是^レ念^レ 我^レ出^レ濁^レ惡^レ世^レ
 如^レ諸^レ佛^レ所^レ說^レ 我^レ亦^レ隨^レ順^レ行^レ
 思^レ惟^レ是^レ事^レ已^レ 即^レ趣^レ波^レ羅^レ奈^レ

77 尋いで過去の佛の 所行の方便力を念ふに
 我が今得る所の道も 亦應に三乗と説くべし
 78 是の思惟を作す時 十方の佛皆現じて
 梵音をもつて我を慰諭したまふ。79 喜い哉釋迦文
 第一の導師 是の無上の法を得たまへども
 諸の一切の佛に隨ひて 方便力を用ひたまふ
 我等も亦皆 最妙第一の法を得れども
 80 諸の衆生類の爲に 分別して三乗と説く
 81 少智は小法を樂ひて 自ら作佛せんことを信ぜず
 是の故に方便を以つて 分別して諸果を説く
 82 復三乗を説くと雖も 但菩薩を教へんが爲なりと
 舍利弗當に知るべし 我聖師子の
 83 深淨微妙の音を聞きて 喜びて南無佛と稱す
 復是の如き念を作す 我濁惡世に出でたり
 84 諸佛の所説の如く 我も亦隨順して行せんと
 是の事を思惟し已りて 即ち波羅奈に趣く

諸法寂滅相 不可以言宣
 以方便力故 爲五比丘說
 是名轉法輪 便有涅槃音
 及以阿羅漢 法僧差別名
 從久遠劫來 讚示涅槃法
 生死苦永盡 我常如是說
 舍利弗當知 我見佛子等
 志求佛道者 無量千萬億
 咸以恭敬心 皆來至佛所
 會從諸佛聞 方便所說法
 我即作是念 如來所以出
 爲說佛慧故 今正是其時
 舍利弗當知 鈍根小智人
 著相憍慢者 不能信是法
 今我喜無畏 於諸菩薩中
 正直捨方便 但說無上道

85 諸法寂滅の相は 言を以つて宣ふべからず
 方便力を以つての故に 五比丘の爲に説く
 是を轉法輪と名く 86 便ち涅槃の音
 及び阿羅漢 法僧差別の名有り
 87 久遠劫より來 涅槃の法を讚示して
 生死の苦永く盡すと 我常には是の如く説き
 88 舍利弗當に知るべし 我佛子等を見るに
 佛道を志求する者 無量千萬億
 咸く恭敬の心を以つて 皆佛所に來至せり
 會つて諸佛に從ひて 方便所説の法を聞けり
 89 われすは是の念を作さく 如來出でたる所以は
 佛慧を説かんが爲の故なり 今正しく是其の時なり
 90 舍利弗當に知るべし 鈍根小智の人
 著相憍慢の者は 是の法を信すること能はじ
 91 今我喜びて畏無し 諸の菩薩の中に於いて
 正直に方便を捨てて 但無上道を説く

菩薩聞是法 疑網皆已除
 千二百羅漢 悉亦當作佛
 如三世諸佛 說法之儀式
 我今亦如是 說無分別法
 諸佛興出世 懸遠值遇難
 正使出于世 說是法復難
 無量無數劫 聞是法亦難
 能聽是法者 斯人亦復難
 譬如優曇華 一切皆愛樂
 天人所希有 一時乃一出
 聞法歡喜讚 乃至發一言
 則爲已供養 一切三世佛
 是人甚希有 過於優曇華
 汝等勿有疑 我爲諸法王
 普告諸大衆 但以一乘道
 教化諸菩薩 無聲聞弟子

92 菩薩是の法を聞きて 疑網皆已に除く
 千二百の羅漢 悉く亦當作佛すべし
 93 三世の諸佛の 説法の儀式の如く
 我も今亦是の如く 無分別の法を説く
 94 諸佛世に興出したまふこと 懸遠にして値遇すること難し
 正使世に出でたまふとも 是の法を説きたまふこと復難し
 95 無量無數劫にも 是の法を聞くこと亦難し
 能く是の法を聽く者 斯の人亦復難し
 96 譬へば優曇華の 一切皆愛樂し
 天人の希有にする所にして 時に乃し一たび出づるが如し
 97 法を聞きて歡喜し讚めて 乃至一言を發すは
 則ち爲已に 一切の三世の佛を供養するなり
 98 是人甚だ希有なること 優曇華に過ぎたり
 汝等 疑有ること勿れ 我は爲諸法の王
 99 普く諸の大衆に告ぐ 但以一乘の道を以つて
 諸の菩薩を教化して 聲聞の弟子無し

汝等舍利弗 聲聞及菩薩
當知是妙法 諸佛之祕要
以五濁惡世 但樂著諸欲
如是等衆生 終不求佛道
當來世惡人 聞佛說一乘
迷惑不信受 破法墮惡道
有慙愧清淨 志求佛道者
當爲如是等 廣讚一乘道
舍利弗當知 諸佛法如是
以萬億方便 隨宜而說法
其不習學者 不能曉了此
汝等既已知 諸佛世之師
隨宜方便事 無復諸疑惑
心生大歡喜 自知當作佛

妙法蓮華經卷第一

99 汝等舍利弗 聲聞及菩薩
當に知るべし是の妙法は 諸佛の祕要なり
100 五濁の惡世には 但諸欲に樂著するを以つて
是の如き等の衆生 終に佛道を求めず
101 當來世の惡人は 佛說の一乘を聞きて
迷惑して信受せず 法を破して惡道に墮せん
102 慙愧清淨にして 佛道を志求する者有らば
當に是の如き等の爲に 廣く一乘の道を讚むべし
103 舍利弗當に知るべし 諸佛の法是の如く
萬億の方便を以つて 宜しきに隨ひて法を説きたまふ
其の習學せざる者は 此を曉了すること能はじ
104 汝等既に已に 諸佛世の師の
隨宜方便の事を知れり 復諸の疑惑無く
心に大歡喜を生じて 自ら當に作佛すべしと知れ

妙法蓮華經卷第一

妙法蓮華經譬諭品第三

爾時舍利弗。踊躍歡喜。即起合掌。瞻仰
尊顏。而白佛言。今從世尊。聞此法音。
心懷踊躍。得未曾有。所以者何。我昔從
佛。聞如是法。見諸菩薩。受記作佛。而
我等不預斯事。甚自感傷。失於如來。無
量知見。世尊我常獨處。山林樹下。若坐
若行。每作是念。我等同入法性。云何如
來。以小乘法。而見濟度。是我等咎。非
世尊也。所以者何。若我等待說所因。成
就阿耨多羅三藐三菩提者。必以大乘。而
得度脫。然我等不解方便。隨宜所說。初
聞佛法。遇便信受。思惟取證。世尊我從

妙法蓮華經譬諭品第三

爾の時に舍利弗、踊躍歡喜して、即ち起ちて合掌し、尊顏を
瞻仰して佛に白して言さく、今世尊に從ひたてまつりて此の法
音を聞きて、心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり。所以
は何ん。我昔、佛に從ひて是の如き法を聞き、諸の菩薩の受記作
佛を見しかども、而も我等は斯の事に預らず。甚だ自ら、如來の
無量の知見を失へるを感傷しき。世尊、我常に獨山林樹下に處
して、若は坐し若は行じて、毎に是の念を作しき。我等も同じ
く法性に入れり。云何ぞ如來、小乘の法を以つて濟度せらるると。
是我等が咎なり。世尊には非ず。所以は何ん。若我等、所因
の、阿耨多羅三藐三菩提を成就することを説きたまふを待たまし
かば、必ず大乘を以つて度脫することを得てまし。然るに我等、
方便隨宜の所説を解らずして、初佛法を聞きて、遇便ち信受
し、思惟して證を取れり。世尊、我昔より來、終日竟夜毎に

昔來終日竟夜。每自刻責。而今從佛。聞所未聞。未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然。快得安穩。今日乃知。真是佛子。從佛口生。從法化生。得佛法分。爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言。

我聞是法音 得所未曾有
心懷大歡喜 疑網皆已除
昔來蒙佛教 不失於大乘
佛音甚希有 能除衆生惱
我已得漏盡 聞亦除憂惱
我處於山谷 或在林樹下
若坐若經行 常思惟是事
嗚呼深自責 云何而自欺
我等亦佛子 同入無漏法
不能於未來 演說無上道

自來刻責しき 而るに今、佛に従ひたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞きて、諸の疑悔を斷じ、身意泰然として、快く安穩なることを得たり。今日乃ち知りぬ。眞に佛子なり。佛口より生じ、法化より生じて、佛法の分を得たりと。

爾の時に舍利弗、重て此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

我是の法音を聞きて 未曾有なる所を得て
心に大歡喜を懷き 疑網皆已に除こりぬ
昔より來 佛教を蒙りて 大乘を失はず
佛の音は甚だ希有にして 能く衆生の惱を除きたまふ
我已に漏盡を得れども 聞きて亦憂惱を除けり
我山谷に處し 或は林樹の下に在りて
若し坐し若し經行して 常に是の事を思惟し
嗚呼して深く自ら責めぬ 云何ぞ自ら欺ける
我等も亦佛子にして 同しく無漏の法に入れども
未來に於いて 無上道を演説すること能はず

金色三十二 十力諸解脫
同共一法中 而不得此事
八十種妙好 十八不共法
如是等功德 而我皆已失
我獨經行時 見佛在大衆
名聞滿十方 廣饒益衆生
自惟失此利 我爲自欺誑
我常於日夜 每思惟是事
欲以問世尊 爲失爲不失
我常見世尊 稱讚諸菩薩
以是於日夜 籌量如此事
今聞佛音聲 隨宜而說法
無漏難思議 令衆至道場
我本著邪見 爲諸梵志師
世尊知我心 拔邪說涅槃
我悉除邪見 於空法得證

金色三十二 十力諸の解脫
同じく共に一法の中にして 而も此の事を得ず
八十種の妙好 十八不共の法
是の如き等の功德 而も我皆已に失へり
我獨經行せし時 佛大衆に在して
名聞十方に滿ち 廣く衆生を饒益したまふを見て
自ら惟はく此の利を失へり 我爲自ら欺誑せりと
我常に日夜に於いて 毎に是の事を思惟して
以て世尊に問ひたてまつらん欲す 爲め失へりや爲め失はずやと
我常に世尊を見たてまつるに 諸の菩薩を稱讚したまふ
是を以てて日夜に 是の如きの事を籌量しき
今佛の音聲を聞きたてまつるに 宜しき隨ひて法を説きたまへり
無漏は思議し難し 衆をして道場に至らしむ
我本邪見に著して 諸の梵志の師と爲りき
世尊我が心を知しめして 邪を抜き涅槃を説きたまひしかば
我悉く邪見を除きて 空法に於いて證を得たり

爾時心自謂 而今乃自覺 若得作佛時 天人夜叉衆 是時乃可謂 佛於大衆中 聞如是法音 初聞佛所說 將非魔作佛 佛以種種緣 其心安如海 佛說過去世 安住方便中 現在未來佛 亦以諸方便 如今者世尊

得至於滅度 非是實滅度 具三十二相 龍神等恭敬 永盡滅無餘 說我當作佛 疑悔悉已除 心中大驚疑 惱亂我心耶 譬諭巧言說 我聞疑網斷 無量滅度佛 亦皆說是法 其數無有量 演說如是法 從生及出家

13 爾の時に心に自ら謂ひき 滅度に至ることを得たりと
 14 而るに今乃ち自ら覺りぬ 是實の滅度に非ず
 15 若作佛することを得ん時は 三十二相を具し
 16 天人夜叉衆 龍神等恭敬せん
 17 是の時乃ち謂ふべし 永く盡滅して餘無しと
 18 佛大衆の中に於いて 我當に作佛すべしと説きたまふ
 19 是の如きの法音を聞きて 疑悔 悉く已に除こりぬ
 20 初め佛の所説を聞きて 心中大いに驚疑しき
 21 將に魔の佛と作りて 我が心を惱亂するに非ずやと
 22 佛種種の緣 譬諭を以つて巧みに言説したまふ
 23 其の心安きこと海の如し 我聞きて疑網斷じぬ
 24 佛説きたまはく過去世の 無量の滅度の佛
 25 方便の中に安住して 亦皆是の法を説きたまへり
 26 現在未來の佛 其の數量有ること無きも
 27 亦諸の方便を以つて 是の如き法を演説したまふ
 28 今者の世尊の如きも 生じたまひしより及び出家し

得道轉法輪 世尊說實道 以是我定知 我墮疑網故 聞佛柔輒音 演暢清淨法 疑悔永已盡 我定當作佛 轉無上法輪

爾時佛告舍利弗。吾今於天人沙門。婆羅門等。大衆中說。我昔曾於二萬億佛所。爲無上道故。常教化汝。汝亦長夜。隨我受學。我以方便。引導汝故。生我法中。舍利弗。我昔教汝。志願佛道。汝今悉忘。而便自謂。已得滅度。我今還欲令汝憶念。本願所行道故。爲諸聲聞。說

得道し法輪を轉じたまふまで 亦方便を以て説きたまふと
 21 世尊は實道を説きたまふ 波旬は此の事無し
 22 是を以つて我定めて知りぬ 是魔の佛と作るには非ず
 23 我疑網に墮するが故に 是魔の所爲と謂へり
 24 佛の柔輒の音 深遠に甚だ微妙にして
 25 清淨の法を演暢したまふを聞きて 我が心大いに歡喜し
 26 疑悔永く已に盡きて 實智の中に安住す
 27 我定めて當に作佛して 天人に敬はるることを爲
 28 無上の法輪を轉じて 諸の菩薩を教化すべし

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、吾今、天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於いて説く。我昔、二萬億の佛の所に於いて、無上道の爲の故に、常に汝を教化す。汝亦、長夜に我に隨ひて受學しき。我方便を以つて、汝を引導せしが故に、我が法の中に生れたり。舍利弗、我昔、汝をして佛道を志願せしめき。汝今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂へり。我今還りて、汝をして、本願所行の道を憶念せしめんと欲す

是大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。

舍利弗。汝於未來世。過無量無邊。不可思議劫。供養若干千萬億佛。奉持正法。具足菩薩。所行之道。當得作佛。號曰華光如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。國名離垢。其土平正。清淨嚴飾。安穩豐樂。天人熾盛。瑠璃為地。有八交道。黃金為繩。以界其側。其傍各有七寶行樹。常有華果。華光如來。亦以三乘。教化衆生。舍利弗。彼佛出時。雖非惡世。以本願故。說三乘法。其劫名大寶莊嚴。何故名曰。大寶莊嚴。其國中。以菩薩。為大寶故。彼諸菩薩。無量無邊。不可思議。算數譬論。所不能及。非佛智

るが故に、諸の聲聞の爲に、是の大乗經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説く。

四 舍利弗、汝未來世に於いて、無量無邊不可思議劫を過ぎて、若干の千萬億の佛を供養し、正法を奉持し、菩薩所行之道を具足して、當に作佛することを得べし。號をば華光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ひ、國をば離垢と名けん。其の土平正にして、清淨嚴飾、安穩豐樂にして、天人熾盛ならん。瑠璃を地と爲して八つの交道有り、黄金を繩と爲して、以つて其の側を界ひ、其の傍に各七寶の行樹有りて、常に華果有らん。華光如來、亦三乘を以つて衆生を教化せん。舍利弗、彼の佛出でたまはん時は、惡世に非ずと雖も、本願を以つての故に、三乘の法を説きたまはん。其の劫をば大寶莊嚴と名けん。何が故ぞ、名けて大寶莊嚴と曰ふ。其の國の中には、菩薩を以つて大寶と爲くるが故なり。彼の諸の菩薩、無量無邊不可思議にして、算數譬論も及ぶこと能はざる所ならん。佛の智力に非ずんば、能く知る者無け

力。無能知者。若欲行時。寶華承足。此諸菩薩。非初發意。皆久植德本。於無量百千萬億佛所。淨修梵行。恆爲諸佛。之所稱歎。常修佛慧。具大神通。善知一切。諸法之門。質直無偽。志念堅固。如是菩薩。充滿其國。舍利弗。華光佛壽。十二小劫。除爲王子。未作佛時。其國人民。壽八小劫。華光如來。過十二小劫。授堅滿菩薩。阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘。是堅滿菩薩。次當作佛。號曰華足安行。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。其佛國土。亦復如是。舍利弗。是華光佛。滅度之後。正法住世。三十二小劫。像法住世。亦三十二小劫。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

舍利弗來世 成佛普智尊

五 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
舍利弗來世に 佛普智尊と成り

號名曰華光 當度無量衆
 供養無數佛 具足菩薩行
 十力等功德 證於無上道
 過無量劫已 劫名大寶嚴
 世界名離垢 清淨無瑕穢
 以瑠璃爲地 金繩界其道
 七寶雜色樹 常有華果實
 彼國諸菩薩 志念常堅固
 神通波羅蜜 皆已悉具足
 於無數佛所 善學菩薩道
 如是等大士 華光佛所化
 佛爲王子時 棄國捨世榮
 於最末後身 出家成佛道
 華光佛住世 壽十二小劫
 其國人民衆 壽命八小劫
 佛滅度之後 正法住於世

號をば名けて華光と曰はん 當に無量の衆を度すべし
 無数の佛を供養し 菩薩の行
 十力等の功德を具足して 無上道を證せん
 無量劫を過ぎ已りて 劫をば大寶嚴と名け
 世界をば離垢と名けん 清淨にして瑕穢無く
 瑠璃を以つて地と爲し 金繩其の道を界し
 七寶雜色の樹に 常に華果實有らん
 彼の國の諸菩薩は 志念常に堅固にして
 神通波羅蜜 皆已に悉く具足し
 無數の佛の所に於いて 善く菩薩の道を學せん
 是の如き等の大士 華光佛の所化ならん
 佛王子爲らん時 國を棄て世の榮を捨てて
 最末後の身に於いて 出家して佛道を成ぜん
 華光佛は世に住する 壽十二小劫
 其の國の人民衆は 壽命八小劫ならん
 佛滅度の後 正法世に住すること

三十二小劫 廣度諸衆生
 正法滅盡已 像法三十二
 舍利廣流布 天人普供養
 華光佛所爲 其事皆如是
 其兩足聖尊 最勝無倫匹
 彼即是汝身 宜應自欣慶
 爾時四部衆 比丘比丘尼、優婆塞、優
 婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、
 迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等衆。見舍
 利弗。於佛前受阿耨多羅三藐三菩提記。
 心大歡喜。踊躍無量。各各脫身。所著上
 衣。以供養佛。釋提桓因、梵天王等。
 與無數天子。亦以天妙衣。天曼陀羅華。
 摩訶曼陀羅華等。供養於佛。所散天衣。
 住虛空中。而自廻轉。諸天伎樂。百千萬
 種。於虛空中。一時俱作。雨衆天華。而

三十二小劫 廣く諸の衆生を度せん
 正法滅盡し已りて 像法三十二ならん
 舍利廣く流布して 天人普く供養せん
 華光佛の所爲 其事皆是の如し
 其の兩足聖尊 最勝にして倫匹無けん
 彼即ち是汝が身なり 宜しく應に自ら欣慶すべし
 爾の時に四部の衆の、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、
 龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の大衆、
 舍利弗の佛前に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て
 心大いに歡喜して、踊躍すること無量なり。各各に、身に著け
 たる所の上衣を脱ぎて、以つて佛に供養す。釋提桓因、梵天
 王等、無數の天子と、亦天の妙衣、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華
 等を以つて佛に供養す。所散の天衣、虛空の中に住して 自ら廻
 轉す。諸天の伎樂百千萬種、虛空の中に於いて一時に俱に作し、
 衆の天華を雨す。而して是の言を作さく、佛昔、波羅奈に於
 いて、初めて法輪を轉じ、今乃ち復、無上最大の法輪を轉じたま

作是言。佛昔於波羅奈。初轉法輪。今乃復轉。無上最大法輪。

爾時諸天子。欲重宣此義。而說偈言。

昔於波羅奈 轉四諦法輪
分別說諸法 五衆之生滅
今復轉最妙 無上大法輪
是法甚深奧 少有能信者
我等從昔來 數聞世尊說
未曾聞如是 深妙之上法
世尊說是法 我等皆隨喜
大智舍利弗 今得受尊記
我等亦如是 必當得作佛
於一切世間 最尊無有上
佛道回思議 方便隨宜說
我所有福業 今世若過世
及見佛功德 盡廻向佛道

ふ。

爾の時に諸天子、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

昔波羅奈に於いて 四諦の法輪を轉じ
分別して諸法 五衆の生滅を説きたまひき
今復最妙 無上の大法輪を轉じたまふ
是の法は甚だ深奥にして 能く信する者有ること少なり
我等昔より來 數 世尊の説を聞きたてまつるに
未だ曾て是の如き 深妙の上法を聞かず
世尊是の法を説きたまふに 我等皆隨喜す
大智舍利弗 今尊記を受くることを得たり
我等亦是の如く 必ず當に作佛して
一切世間に於いて 最尊にして上有ること無きことを得べし
佛道は思議し回し 方便して宜しきに隨ひて説きたまふ
我が所有の福業 今世若は過世
及び見佛の功德 盡く佛道に廻向す

爾時舍利弗。白佛言世尊。我今無復疑悔。親於佛前。得受阿耨多羅三藐三菩提記。是諸千二百。心自在者。昔住學地。佛常教化言。我法能離。生老病死。究竟涅槃。是學無學人。亦各自以離我見。及有無見等。謂得涅槃。而今於世尊前。聞所未聞。皆墮疑惑。善哉世尊。願爲四衆。說其因緣。令離疑悔。爾時佛告舍利弗。我先不言。諸佛世尊。以種種因緣。譬諭言詞。方便說法。皆爲阿耨多羅三藐三菩提耶。是諸所說。皆爲化菩薩故。然舍利弗。今當復以譬諭。更明此義。諸有智者。以譬諭得解。舍利弗。若國邑聚落。有大長者。其年衰邁。財富無量。多有田宅。及諸僮僕。其家廣大。唯一門。多諸人衆。一百二百。乃至五百人。此住其中。堂閣朽

爾の時に舍利弗、佛に白して言さく、世尊我今復疑悔無し。親り佛前に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。是の諸の千二百の心自在なる者、昔學地に住せしに、佛常に教化して言はく、我が法は、能く生老病死を離れて、涅槃を究竟すと。是學無學の人、亦各自ら我見、及び有無の見等を離れたるを以つて、涅槃を得たりと謂へり。而るに今、世尊の前に於いて、未だ聞かざる所を聞きて、皆惑疑に墮しぬ。善い哉世尊、願はくば四衆の爲に、其の因縁を説き、疑悔を離れしめたまへ。爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、我先に諸佛世尊、種種の因縁、譬諭の言詞を以つて、方便して法を説きたまふは、皆、阿耨多羅三藐三菩提の爲なりと言はずや。是の諸の所説は、皆、菩薩を化せんが爲の故に、然も舍利弗、今當に復譬諭を以つて、更に此の義を明すべし。諸の智有らん者、譬諭を以つて解ることを得ん。舍利弗、若國邑聚落到大長者有らん。其の年衰邁して財富無量なり。多く田宅及び諸の僮僕有り。其の家廣大にして、唯一門有り。諸の人衆多くして、一百二百、

故。牆壁墮落。柱根腐敗。梁棟傾危。周市俱時。歟然火起。焚燒舍宅。長者諸子。若十。二十。或至三十。在此宅中。長者見是大火。從四面起。即大驚怖。而作是念。我雖能於此。所燒之門。安穩得出。而諸子等。於火宅內。樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。苦痛切已。心不厭患。無求出意。舍利弗。是長者。作是思惟。我身手有力。當以衣被。若以几案。從舍出之。復更思惟。是舍唯有一門。而復狹小。諸子幼稚。未有所識。戀著戲處。或當墮落。為火所燒。我當為說。怖畏之事。此舍已燒。宜事疾出。無令為火之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言誘諭。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不畏。了無出心。亦

乃至五百人、其の中に止住せり。11 堂閣朽ち故り、牆壁墮れ落ち。柱根腐ち敗れ、梁棟傾き危し。12 周市して俱時に、歟然に火起りて舍宅を焚燒す。13 長者の諸子、若し十、二十、或は三十に至るまで、此の宅中に在り。14 長者是の大火の四面より起るを見て、即ち大いに驚怖して、是の念を作さく、15 我能く此の所燒の門より、安穩に出づることを得たりと雖も、而も諸子等、火宅の内に於いて嬉戲に樂著して、覺らず、知らず、驚かず、怖ぢず。火來りて身を逼め、苦痛已を切むれども、心厭患せず。出でんと求むる意無し。16 舍利弗、是の長者、是の思惟を作さく、我身手に力有り。當に衣被を以つてや、若は几案を以つてや、舍より之を出すべき。17 復更に思惟すらく、是の舍唯一門有り。而も復狹小なり。18 諸子幼稚にして未だ識る所有らず。戲處に戀著せり。或は當に墮落して火に燒かるべし。19 我當に爲に怖畏の事を説くべし。此の舍已に燒く。宜しく時に疾く出でて、火に燒害せられしむること無かれ。20 是の念を作し已りて、思惟する所の如く、具に諸子に告ぐ、汝等速かに出でよと。21 父憐愍して、善言をもつ

復不知。何者是火。何者為舍。云何為失。但東西走戲。視父而已。爾時長者。即作是念。此舍已為大火所燒。我及諸子。若不時出。必為所焚。我今當設方便。令諸子等。得免斯害。父知諸子。先心各有所好。種種珍玩。奇異之物。情必樂著。而告之言。汝等所可玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如此種種。羊車。鹿車。牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出來。隨汝所欲。皆當與汝。爾時諸子。聞父所說。珍玩之物。適其願故。心各勇銳。互相排排。競共馳走。爭出火宅。是時長者。見諸子等。安穩得出。皆於四衢道中。露地而坐。無復障礙。其心泰然。歡喜踴躍。時諸子等。各自白言。父先所許。玩好之具。羊車。鹿車。牛車。願時

て誘諭すと雖も、而も諸子等、嬉戲に樂著し、背て信受せず、驚かず、畏れず。了に出づる心無し。22 亦復知らず。何者か是火、何者か為舍、云何なるをか失ふと名くると。23 但東西に走り戲れて、父を視て已みぬ。24 爾の時に長者、即ち是の念を作さく、此の舍已に大火に燒かる。我及び諸子、若しに出でずんば必ず焚かれん。25 我今當に方便を設けて、諸子等をして、斯の害を免るることを得しむべし。26 父、諸子先心に、各好む所有る種種の珍玩、奇異の物には、情必ず樂著せんと知りて、之に告げて言はく、汝等が玩好すべき所は希有にして得難し。汝若取らずんば後に必ず憂悔せん。27 此の如き種種の羊車、鹿車、牛車、今門外に在り。以つて遊戲すべし。28 汝等此の火宅より、宜しく速かに出で來るべし。汝が所欲に隨ひて、皆當に汝に與ふべし。29 爾の時に諸子、父の所說の珍玩の物を聞くに、其の願に適へるが故に、心各勇銳して、互ひに相排排し、競ひて共に馳走し、争ひて火宅を出づ。30 是の時に長者、諸子等の安穩に出づることを得て、皆四衢道の中の露地に於いて、坐して復障礙無きを見て、其の心泰

賜與。舍利弗。爾時長者。各賜諸子。等一大車。其車高廣。衆寶莊校。周匝欄楯。四面懸鈴。又於其上。張設幡蓋。亦以珍奇雜寶。而嚴飾之。寶繩絞絡。垂諸華環。重敷純緹。安置丹枕。駕以白牛。膚色充潔。形體殊好。有大筋力。行步平正。其疾如風。又多僕從。而侍衛之。所以者何。是大長者。財富無量。種種庫藏。悉皆充溢。而作是念。我財物無極。不應以下劣小車。與諸子等。今此幼童。皆是吾子。愛無偏黨。我有如是。七寶大車。其數無量。應當等心。各各與之。不宜差別。所以者何。以我此物。周給一國。猶尚不置。何況諸子。是時諸子。各乘大車。得未曾有。非本所望。舍利弗。於汝意云何。是長者。等與諸子。珍寶大車。寧有虛妄不。舍利弗言。

然として歡喜踊躍す。30 時に諸子等、各父に白して言さく、父、先に許したまふ所の玩好の具の、羊車、鹿車、牛車、願はくば時に賜與したまへ。31 舍利弗、爾の時に長者、各諸子に等一の大車を賜ふ。其の車、高廣にして衆寶莊校せり。周匝して欄楯あり。四面に鈴を懸けたり。32 又、其の上に於いて幡蓋を張り設く。亦、珍奇の雜寶を以つて之を嚴飾せり。33 寶繩絞絡して、諸の華環を垂れ、純緹を重ね敷き、丹枕を安置し、駕するに白牛を以つてす。膚色充潔に、形體殊好にして大筋力有り。行歩平正にして、其の疾きこと風の如し。34 又、僕從多く之を侍衛せり。35 所以は何ん。是の大長者、財富無量にして、種種の庫藏に悉く皆充溢せり。36 而も是の念を作さく、我、財物極り無し。應に下劣の小車を以つて諸子等に與ふべからず。今此の幼童は、皆是吾が子なり。愛するに偏黨無し。37 我、是の如き七寶の大車有り。其の數無量なり。應當に等心にして、各各に之を與ふべし。宜しく差別すべからず。38 所以は何ん。我が此の物を以つて、周く一國に給すと、猶尚置しからじ。何に況や諸子をや。39 是の時に諸子、各

不也。世尊。是長者。但令諸子。得免火難。全其軀命。非爲虛妄。何以故。若令全身命。便爲已得。玩好之具。況復方便。於彼火宅。而拔濟之。世尊。若是長者。乃至不與。最小一車。猶不虛妄。何以故。是長者。先作是意。我以方便。令子得出。以是因緣。無虛妄也。何況長者。自知財富無量。欲饒益諸子。等與大車。佛告舍利弗。善哉善哉。如汝所言。舍利弗。如來亦復如是。則爲一切。世間之父。於諸怖畏。衰惱憂患。無明暗蔽。永盡無餘。而悉成就。無量知見。力。無所畏。有大神力。及智慧力。具足方便。智慧波羅蜜。大慈大悲。常無懈倦。恆求善事。利益一切。而生三界。朽故火宅。爲度衆生。生老病死。憂悲苦惱。愚癡暗蔽。三毒之火。教化令得。

大車に乗りて、未曾會なることを得て、本の所望に非ざるが若し。舍利弗、汝が意に於いて云何。是の長者、等しく諸子に珍寶の大車を與ふ。寧ろ虛妄有りや否や。40 舍利弗の言さく、不なり。世尊、是の長者、但諸子をして火難を免れ、其の軀命を全うすることを得しむとも、爲虛妄に非ず。41 何を以つての故に。若身命を全うすれば、便ち爲已に玩好の具を得たるなり。況や復、方便して、彼の火宅に於いて、而も之を拔濟せんをや。42 世尊、若是の長者、乃至最小の一車を與へずとも、猶虛妄ならじ。43 何を以つての故に、是の長者先に是の意を作さく、我、方便を以つて、子をして出づることを得しめんと。是の因緣を以つて虛妄無し。44 何に況や長者、自ら財富無量なりと知りて、諸子を饒益せんと欲して、等しく大車を與ふるをや。45 佛、舍利弗に告げたまはく、善い哉善い哉、汝が所言の如し。46 舍利弗、如來も亦復是の如し。則ち爲一切世間の父なり。47 諸の怖畏、衰惱、憂患、無明、闇蔽に於いて、永く盡して餘無し。48 悉く無量の知見、力、無所畏を成就し、大神力及び智慧力有りて、方便智慧波羅蜜を具足せり。

阿耨多羅三藐三菩提。見諸衆生。爲生老病死。憂悲苦惱。之所燒煮。亦以五欲財利故。受種種苦。又以貪著追求故。現受衆苦。後受地獄。畜生餓鬼之苦。若生天上。及在人間。貧窮困苦。愛別離苦。怨憎會苦。如是等種種諸苦。衆生沒在其中。歡喜遊戲。不覺不知。不驚不怖。亦不生厭。不求解脫。於此三界火宅。東西馳走。雖遭大苦。不以爲患。舍利弗。佛見此已。便作是念。我爲衆生之父。應拔其苦難。與無量無邊。佛智慧樂。令其遊戲。舍利弗。如來復作是念。若我以神力。及智慧力。捨於方便。爲諸衆生。讚如來知見力。無所畏者。衆生不能。以是得度。所以者何。是諸衆生。未免生老病死。憂悲苦惱。而爲三界火宅所燒。何由能解。

大慈大悲常に懈倦無し。恆に善事を求めて一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずること、衆生の生老病死、憂悲苦惱、愚癡暗蔽、三毒の火を度して、教化して阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが爲なり。諸の衆生を見るに、生老病死、憂悲苦惱に燒煮せらる。亦、五欲財利を以つての故に、種種の苦を受く。又、貪著追求を以つての故に、現には衆苦を受け、後には地獄、畜生、餓鬼の苦を受け、若は天上に生れ、及び人間に在りては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に没在して、歡喜し遊戲して、覺えず、知らず、驚かず、怖れず、亦、厭ふことを生さず。解脫を求めず。此の三界の火宅に於いて、東西に馳走して大苦に遭ふと雖も、以つて患と爲さず。舍利弗、佛此を見已りて、便ち是の念を作さく、我は爲衆生の父なり。應に其の苦難を抜き、無量無邊の佛智慧の樂を與へて、其をして遊戲せしむべし。舍利弗、如來復是の念を作さく、若我、但神力及び智慧力を以つて、方便を捨てて諸の衆生の爲に、如來の知見力、無所畏を讚めば、衆生是を以つ

佛之智慧。舍利弗。如彼長者。雖復身手有力。而不用之。但以慇懃方便。勉濟諸子。火宅之難。然後各與。珍寶大車。如來亦復如是。雖有力無所畏。而不用之。但以智慧方便。於三界火宅。拔濟衆生。爲說三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。而作是言。汝等莫得樂住。二界火宅。勿貪羶弊。色聲香味觸也。若貪著生愛。則爲所燒。汝等速出三界。當得三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。我今爲汝。保任此事。終不虛也。汝等但當。勤修精進。如來以是方便。誘進衆生。復作是言。汝等當知。此三乘法。皆是聖所稱歎。自在無繫。無所依求。乘是三乘。以無漏根。力。覺。道。禪定。解脫。三昧等。而自娛樂。便得無量。安穩快樂。舍利弗。若有衆生。內有智性。從佛

て得度すること能はじ。所以は何ん。是の諸の衆生、未だ生老病死、憂悲苦惱を免れず。而も三界の火宅に燒かる。何に由りてか能く佛の智慧を解らん。舍利弗、彼の長者、復身手に力有りと雖も、而も之を用ひず。但慇懃の方便を以つて、諸子の火宅の難を勉濟して、然して後に、各珍寶の大車を與ふるが如く、如來も亦復是の如し。力、無所畏有りと雖も、而も之を用ひず。但智慧方便を以つて、三界の火宅に於いて、衆生を拔濟せんとして爲に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を説く。而して是の言を作さく、汝等樂つて、三界の火宅に住することを得ること莫れ。羶弊の色聲香味觸を貪ること勿れ。若貪著して愛を生ぜば、則ち燒かれん。汝速かに三界を出でて、當に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を得べし。我今汝が爲に此の事を保任す。終に虚しからず、汝等、但當に勤修精進すべし。如來、是の方便を以つて衆生を誘進す。復是の言を作さく、汝等當に知るべし。此の三乗の法は、皆是聖の稱歎したまふ所なり。自在無繫にして、依求する所無し。是の三乘に乗じ、無漏の根、力、覺、道、禪定、解脫、三昧等

世尊。聞法信受。殷勤精進。欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子。爲求羊車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。殷勤精進。求自然慧。樂獨善寂。深知諸法因緣。是名辟支佛乘。如彼諸子。爲求鹿車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。勤修精進。求一切智。佛智。自然智。無師智。如來知見。力無所畏。愍念安樂。無量衆生。利益天人。度脫一切。是名大乘。菩薩求此乘故。名爲摩訶薩。如彼諸子。爲求牛車。出於火宅。舍利弗。如彼長者。見諸子等。安穩待出火宅。到無畏處。自惟財富無量。等以大車。而賜諸子。如來亦復如是。爲一切衆生之父。若見無量億千衆生。以佛教門。出三界苦。怖畏險道。得涅槃樂。如來

を以つて、自ら娛樂して、便ち無量の安穩快樂を得ん。66 舍利弗、若衆生有りて、内に智性有りて、佛世尊に從ひて法を聞き、信受して殷勤に精進し、速かに三界を出でんと欲して自ら涅槃を求むる。是を聲聞乘と名く。彼の諸子の羊車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。67 若衆生有りて、佛世尊に從ひて法を聞き、信受し、殷勤に精進して自然慧を求め、獨善寂を樂ひ、深く諸法の因縁を知る。是を辟支佛乘と名く。彼の諸子の、鹿車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。68 若衆生有りて、佛世尊に從ひて法を聞き、信受し、勤修精進して、一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見、力、無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し、天人を利益し、一切を度脱す。是を大乘と名く。69 菩薩此の乘を求むるが故に、名けて摩訶薩と爲す。彼の諸子の、牛車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。70 舍利弗、彼の長者、諸子等の安穩に火宅を出づることを得て、無畏の處に到るを見て、自ら財富無量なることを惟ひて、等しく大車を以つて諸子に賜ふが如し。71 如來も亦復是の如し。爲一切衆生の父なり。72 若無量億千の衆生、佛

爾時。便作是念。我有無量無邊智慧。力。無畏等。諸佛法藏。是諸衆生。皆是我子。等與大乘。不令有人。獨得滅度。皆以如來滅度。而滅度之。是諸衆生。脫三界者。悉與諸佛。禪定解脫等。娛樂之具。皆是一相一種。聖所稱歎。能生淨妙。第一之樂。舍利弗。如彼長者。初以三車。誘引諸子。然後但與大車。寶物莊嚴。安穩第一。然彼長者。無虛妄之咎。如來亦復如是。無有虛妄。初說三乘。引導衆生。然後但以大乘。而度脫之。何以故。如來。有無量智慧。力。無所畏。諸法之藏。能與一切衆生。大乘之法。但不盡能受。舍利弗。以是因緣。當知諸佛。方便力故。於一乘佛。分別說三。

教の門を以つて、三界の苦、怖畏險道を出でて、涅槃の樂を得たるを見て、如來爾の時に、便ち是の念を作さく、73 我に無量無邊の智慧、力、無畏等の諸佛の法藏有り。是の諸の衆生は皆是我が子なり。等しく大乘を與ふべし。人として獨滅度を得ること有らしめじ。皆如來の滅度を以つて之を滅度せん。74 是の諸の衆生の三界を脱れたる者には、悉く諸佛の禪定、解脫等の娛樂の具を與ふ。皆是一相一種にして、聖の稱歎したまふ所なり。能く淨妙第一の樂を生ず。75 舍利弗、彼の長者、初め三車を以つて諸子を誘引し、然して後に、但大車の寶物をもつて莊嚴し、安穩第一なるを與ふるに、然も彼の長者虛妄の咎無きが如く、如來も亦復是の如し。虛妄有ること無し。76 初め三乘を説きて衆生を引導し、然して後に、但大乘を以つて之を度脱す。77 何を以つての故に、如來無量の智慧、力、無所畏、諸法の藏有りて、能く一切衆生に大乘の法を與ふ。但盡して能く受けず。78 舍利弗、此の因縁を以つて當に知るべし。諸佛方便力の故に、一佛乘に於いて、分別して三と説きたまふを。

佛欲重宣此義。而說偈言。

警如長者	有一大宅	而復頓弊	柱根摧朽	基陛頽毀	泥塗褻落	椽相差脫	雜穢充徧	止住其中	烏鴉鳩鴿	蜈蚣蚰蜒	鼯狸鼯鼠	交橫馳走	不淨流溢	而集其上	咀嚼踐踏	狐狼野干	蟻蝮諸蟲	屎尿臭處	諸惡蟲輩	守宮百足	蛇虺蝮蠍	鴟梟鷂鷂	有五百人	周障屈曲	覆苦亂墜	牆壁圯圻	梁棟傾斜	堂舍高危	其宅久故	警如長者
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

九 佛、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

2 警へば長者 一の大宅有らん
 其の宅久しく故りて 復頓弊し
 堂舍高く危く 柱根摧け朽ち
 梁棟傾き斜み 基陛頽れ毀たれ
 牆壁圯圻け 泥塗褻け落ち
 覆苦亂れ墜ち 椽相差ひ脱け
 周障屈曲して 雜穢充徧せり
 3 五百人有りて 其の中に止住す
 4 鴟梟鷂鷂 烏鴉鳩鴿
 5 蜈蚣蚰蜒 鼯狸鼯鼠
 6 守宮百足 交橫馳走す
 7 諸の惡蟲の輩 不淨流溢ち
 8 屎尿の臭き處 而集其上り
 9 蟻蝮の諸蟲 其の上に集れり
 10 狐狼野干 咀嚼し踐踏し

齧齧死屍	骨肉狼藉	競來搏撮	處處求食	吠齧嗥吠	變狀如是	魍魅魍魎	食噉人肉	諸惡禽獸	各自藏護	爭取食之	惡心轉熾	甚可怖畏	躡踞土埤	一尺二尺	縱逸嬉戲	撲令失聲	捉狗兩足	往返遊行	或時離地	鳩槃荼鬼	鬪諍之聲	食之既飽	夜叉競來	孕乳產生	毒蟲之屬	夜叉惡鬼	處處皆有	其舍恐怖	鬪諍搏擊	飢羸悻惶	由是羣狗	齧齧死屍
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

齧齧して死屍の 骨肉狼藉せり
 7 是に由りて羣狗 競ひ來りて搏撮し
 飢羸悻惶して 處處に食を求む
 鬪諍搏撃し 吠齧嗥吠す
 8 其の舍の恐怖 變する狀是の如し
 9 處處に皆 魍魅魍魎有り
 10 夜叉惡鬼 人肉を食噉す
 11 毒蟲の類 諸の惡禽獸
 12 孕乳產生して 各自藏し護る
 13 夜叉競ひ來りて 爭取りて之を食す
 14 之を食して既に飽きぬれば 惡心轉た熾にして
 15 鬪諍の聲 甚だ怖畏すべし
 16 鳩槃荼鬼 土埤に躡踞せり
 17 或時は地を離るること 一尺二尺
 18 往返遊行し 縱逸嬉戲す
 19 狗の兩足を捉つて 撲ちて聲を失はしめ

以脚加頸 怖狗自樂
 復有諸鬼 其身長大
 羸形黑瘦 常住其中
 發大惡聲 叫呼求食
 復有諸鬼 其咽如鍼
 復有諸鬼 首如牛頭
 或食人肉 或復噉狗
 頭髮蓬亂 殘害兇險
 飢渴所逼 叫喚馳走
 夜叉餓鬼 諸惡鳥獸
 飢急四向 闕看窻牖
 如是諸難 恐畏無量
 是朽故宅 屬于一人
 其人近出 未久之間
 於後宅舍 忽然火起
 四面一時 其焰俱熾

脚を以つて頸に加へて 狗を怖して自ら樂む
 13 復諸鬼有り 其の身長大
 羸形黑瘦にして 常に其の中に住せり
 大惡聲を發して 叫呼して食を求む
 14 復諸鬼有り 其の咽鍼の如し
 15 復諸鬼有り 首牛頭の如し
 或は人肉を食ひ 或は復狗を噉ふ
 頭髮蓬亂して 殘害兇險なり
 飢渴に逼められて 叫喚馳走す
 16 夜叉餓鬼 諸の惡鳥獸
 飢急にして四向し 窻牖を闕ひ看る
 是の如き諸難 恐畏無量なり
 17 是の朽ち故りたる宅は 一人に屬せり
 其の人近く出で 未だ久しからざる間に
 後に宅に 忽然に火起る
 四面一時に 其の焰俱に熾なり

棟梁椽柱 爆聲震裂
 摧折墮落 牆壁崩倒
 諸鬼神等 揚聲大叫
 鷓鴣諸鳥 鳩槃荼等
 周樟惶怖 不能自出
 惡獸毒蟲 藏窟孔穴
 毗舍闍鬼 亦住其中
 薄福德故 爲火所逼
 共相殘害 飲血噉肉
 野干之屬 竝已前死
 諸大惡獸 競來食噉
 臭煙蓬焔 四面充塞
 蜈蚣蚰蜒 毒蛇之類
 爲火所燒 爭走出穴
 鳩槃荼鬼 隨取而食
 又諸餓鬼 頭上火然

棟梁椽柱 爆聲震裂し
 摧折墮落し 牆壁崩倒す
 18 諸の鬼神等 聲を揚げて大いに叫ぶ
 鷓鴣の諸鳥 鳩槃荼等
 周樟惶怖し 自ら出づること能はず
 19 惡獸毒蟲 孔穴に藏窟し
 毗舍闍鬼 亦其の中に住せり
 薄福徳きが故に 火に逼められ
 共に相殘害して 血を飲み肉を噉ふ
 20 野干の屬 竝びに已に前に死す
 諸の大惡獸 競ひ來りて食噉す
 臭煙蓬焔して 四面に充塞す
 21 蜈蚣蚰蜒 毒蛇の類
 火に燒かれて 爭ひ走りて穴を出づ
 鳩槃荼鬼 隨ひ取りて食ふ
 22 又諸の餓鬼 頭上に火然ゆ

飢渴熱惱 周障悶走
 其宅如是 甚可怖畏
 毒害火災 衆難非一
 是時宅主 在門外立
 聞有人言 汝諸子等
 先因遊戲 來入此宅
 穢小無知 歡娛樂著
 長者聞已 驚入火宅
 方宜救濟 令無燒害
 告喻諸子 說衆患難
 惡鬼毒蟲 災火蔓延
 衆苦次第 相續不絕
 毒蛇虻蟻 及諸夜叉
 鳩槃荼鬼 野干狐狗
 鸚鷯鴟梟 百足之屬
 飢渴惱急 甚可怖畏

飢渴熱惱して 周障悶走す
 23 其の宅是の如し 甚だ怖畏すべし
 毒害火災 衆難一に非ず
 24 是の時に宅主 門外に在りて立ちて
 有る人の言ふを聞く 汝が諸子等
 先に遊戯せしに因りて 此の宅に來入し
 穢小無知にして 歡娛樂著せり
 26 長者聞き已りて 驚きて火宅に入る
 27 方に宜しく救濟して 燒害無からしむべし
 諸子に告喻して 衆の患難を説く
 28 惡鬼毒蟲ありて 災火蔓延なり
 衆苦次第に 相續して絶えず
 29 毒蛇虻蟻 及び諸の夜叉
 鳩槃荼鬼 野干狐狗
 鸚鷯鴟梟 百足の屬
 飢渴の惱急にして 甚だ怖畏すべし

此苦難處 況復大火
 諸子無知 雖聞父誨
 猶故樂著 嬉戲不已
 是時長者 而作是念
 諸子如此 益我愁惱
 今此舍宅 無一可樂
 而諸子等 枕酒嬉戲
 不受我教 將爲火害
 即便思惟 設諸方便
 告諸子等 我有種種
 珍玩之具 妙寶好車
 羊車鹿車 大牛之車
 今在門外 汝等出來
 吾爲汝等 造作此車
 隨意所樂 可以遊戲
 諸子聞說 如此諸車

此の苦すら處し難し 況や復大火をや
 20 諸子知ること無ければ 父の誨を聞くと雖も
 猶故樂著して 嬉戲すること已まず
 31 是の時に長者 而も是の念を作さく
 諸子此の如く 我が愁惱を益す
 今此の舍宅は 一として樂むべき無し
 而るに諸子等 枕酒に嬉戲して
 我が教を受けず 將に火に害せられんとす
 32 即便思惟して 諸の方便を設けて
 諸子等に告ぐ 我に種種の
 珍玩の具の 妙寶の好車有り
 羊車鹿車 大牛の車なり
 33 今門外に在り 汝等出來て來れ
 吾汝等が爲に 此の車を造作せり
 意の所樂に隨ひて 以つて遊戯すべし
 24 諸子 此の如き諸の車を説くを聞きて

即時奔競 馳走而出
 到於空地 離諸苦難
 長者見子 得出火宅
 住於四衢 坐師子座
 而自慶言 我今快樂
 此諸子等 生育甚難
 愚小無知 而入險宅
 多諸毒蟲 魍魅可畏
 大火猛焰 四面俱起
 而此諸子 貪樂嬉戲
 我已救之 令得脫難
 是故諸人 我今快樂
 爾時諸子 知父安坐
 皆詣父所 而白父言
 願賜我等 三種寶車
 如前所許 諸子以來

即時に奔競して 馳走して出で
 空地に到りて 諸の苦難を離る
 長者子の 火宅を出づることを得て
 四衢に住するを見て 師子の座に坐せり
 而して自ら慶びて言はく 我今快樂なり
 此の諸子等 生育すること甚だ難し
 愚小無知にして 險宅に入れり
 諸の毒蟲多く 魍魅畏るべし
 大火猛焰 四面に俱に起れり
 而るに此の諸子 嬉戲に貪樂せり
 我已に之を救ひて 難を脱るることを得しめつ
 是の故に諸人 我今快樂なり
 爾の時に諸子 父の安坐せるを知りて
 皆父の所に詣でて 父に白して言さく
 願はくば我等に 三種の寶車を賜へ
 前に許したまふ所の如きは 諸子出で來れ

當以三車 隨汝所欲
 今正是時 唯垂給與
 長者大富 庫藏衆多
 金銀瑠璃 碑磔碼瑙
 以衆寶物 造諸大車
 莊校嚴飾 周巾欄楯
 四面懸鈴 金繩絞絡
 眞珠羅網 張施其上
 金華諸纓 處處垂下
 衆綵雜飾 周巾圍繞
 柔軟繒纈 以爲茵蓐
 上妙細氈 價直千億
 鮮白淨潔 以覆其上
 有大白牛 肥壯多力
 形體姝好 以駕寶車
 多諸僮從 而侍衛之

當に三車を以つて 汝が所欲に隨ふべしと
 今正是時なり 唯給與を垂れたまへ
 長者大いに富みて 庫藏衆多なり
 金銀瑠璃 碑磔碼瑙あり
 衆の寶物を以つて 諸の大車を造れり
 莊校嚴飾にして 周巾して欄楯あり
 四面に鈴を懸け 金繩絞絡せり
 眞珠の羅網 其の上に張り施し
 金華の諸纓 處處に垂下せり
 衆綵雜飾し 周巾圍繞せり
 柔軟の繒纈 以つて茵蓐と爲し
 上妙の細氈 價直千億にして
 鮮白淨潔なる 以つて其の上に覆へり
 大白牛有り 肥壯多力にして
 形體姝好なり 以つて寶車を駕せり
 多の諸の僮從多くして 之を侍衛せり

以是妙車 等賜諸子
 諸子是時 歡喜踊躍
 乘是寶車 遊於四方
 嬉戲快樂 自在無礙
 告舍利弗 我亦如是
 衆聖中尊 世間之父
 一切衆生 皆是吾子
 深著世樂 無有慧心
 三界無安 猶如火宅
 衆苦充滿 甚可怖畏
 常有生老 病死憂患
 如是等火 熾然不息
 如來已離 三界火宅
 寂然閑居 安處林野
 今此三界 皆是我有
 其中衆生 悉是吾子

47 是の妙車を以つて 等しく諸子に賜ふ
 諸子はの時 歡喜踊躍して
 是の寶車に乗りて 四方に遊び
 嬉戲快樂して 自在無礙ならんが如し
 48 舍利弗に告ぐ 我も亦是の如し
 衆聖の中の尊 世間の父なり
 49 一切衆生は 皆是吾が子なり
 深く世樂に著して 慧心有ること無し
 50 三界は安きこと無し 猶火宅の如し
 衆苦充滿して 甚だ怖畏すべし
 51 常に生老 病死の憂患有り
 是の如き等の火 熾然として息まず
 52 如來は已に 三界の火宅を離れて
 寂然として閑居し 林野に安處せり
 53 今此の三界は 皆是我が有なり
 其の中の衆生は 悉く是吾が子なり

而今此處 多諸患難
 唯我一人 能爲救護
 雖復教詔 而不信受
 於諸欲染 貪著深故
 是以方便 爲說三乘
 令諸衆生 知三界苦
 開示演說 出世間道
 是諸子等 若心決定
 具足三明 及六神通
 有得緣覺 不退菩薩
 汝舍利弗 我爲衆生
 以此譬諭 說一佛乘
 汝等若能 信受是語
 一切皆當 得成佛道
 是乘微妙 清淨第一
 於諸世間 爲無有上

54 而も今此の處は 諸の患難多し
 唯我一人のみ 能く救護を爲す
 55 復教詔すと雖も 而も信受せず
 諸の欲染に於いて 貪著深きが故に
 56 是を以つて方便して 爲に三乘を説きて
 諸の衆生をして 三界の苦を知らしめ
 出世間の道を 開示演説す
 57 是の諸子等 若心決定しぬれば
 三明 及び六神通を具足し
 緣覺 不退の菩薩を得ること有り
 58 汝舍利弗 我衆生の爲に
 此の譬諭を以つて 一佛乘を説く
 59 汝等若能く 是の語を信受せば
 一切皆當に 佛道を成ずることを得べし
 60 是の乘は微妙にして 清淨第一なり
 諸の世間に於いて 爲めて上有ること無し

佛所悅可 一切衆生
 所應稱讚 供養禮拜
 無量億千 諸力解脫
 禪定智慧 及佛餘法
 得如是乘 令諸子等
 日夜劫數 常得遊戲
 與諸菩薩 及聲聞衆
 乘此寶乘 直至道場
 以是因緣 十方諦求
 更無餘乘 除佛方便
 告舍利弗 汝諸人等
 皆是吾子 我則是父
 汝等累劫 衆苦所燒
 我皆濟拔 令出三界
 我雖先說 汝等滅度
 但盡生死 而實不滅

佛の悦可したまふ所 一切衆生
 應に稱讚し 供養し禮拜すべき所なり
 61 無量億千の 諸力解脫
 禪定智慧 及び佛の餘の法あり
 62 是の多き乘を得しめて 諸子等をして
 日夜劫數に 常に遊戯することを得
 諸の菩薩 及び聲聞衆と
 此の寶乘に乗じて 直ちに道場に至らしむ
 63 是の因縁を以つて 十方に諦かに求むるに
 更に餘乘無し 佛の方便をば除く
 64 舍利弗に告ぐ 汝諸人等は
 皆是吾が子なり 我は則ち是父なり
 65 汝等累劫に 衆苦に燒かる
 我皆濟拔して 三界を出でしむ
 66 我先に 汝等滅度すと説くと雖も
 但生死を盡して 而も實には滅せず

今所應作 唯佛智慧
 若有菩薩 於是衆中
 能一心聽 諸佛實法
 諸佛世尊 雖以方便
 所化衆生 皆是菩薩
 若人小智 深著愛欲
 爲此等故 說於苦諦
 衆生心喜 得未曾有
 佛說苦諦 眞實無異
 若有衆生 不知苦本
 深著苦因 不能暫捨
 爲是等故 方便說道
 諸苦所因 貪欲爲本
 若滅貪欲 無所依止
 滅盡諸苦 名第三諦
 爲滅諦故 修行於道

今應に作すべき所は 唯佛の智慧なり
 67 若菩薩有らば 是の衆の中に於いて
 能く一心に 諸佛の實法を聽け
 68 諸佛世尊は 方便を以つてしたまふと雖も
 所化の衆生は 皆是菩薩なり
 69 若人小智にして 深く愛欲に著せる
 此等を爲つての故に 苦諦を説きたまふ
 衆生心に喜びて 未曾有なることを得
 佛の説きたまふ苦諦は 眞實にして異なること無し
 70 若衆生有りて 苦の本を知らず
 深く苦の因に著し 暫くも捨つること能はず
 是等を爲つての故に 方便して道を説きたまふ
 71 諸苦の所因は 貪欲爲本なり
 若貪欲を滅すれば 依止する所無し
 諸苦を滅盡するを 第三の諦と名く
 72 滅諦の爲の故に 道を修行す

離諸苦縛 名得解脫
 是人於何 而得解脫
 但離虛妄 名為解脫
 其實未得 一切解脫
 佛說是人 未實滅度
 斯人未得 無上道故
 我意不欲 令至滅度
 我為法王 於法自在
 安穩衆生 故現於世
 汝舍利弗 我此法印
 爲欲利益 世間故說
 在所遊方 勿妄宣傳
 若有聞者 隨喜頂受
 當知是人 阿鞞跋致
 若有信受 此經法者
 是人已曾 見過去佛

諸の苦縛を離るるを 解脫を得と名く
 73 是人の何に於いてか 而も解脫を得る
 但虚妄を離るるを 名けて解脫と爲す
 74 其實には未だ 一切の解脫を得ず
 佛は是人は 未だ實に滅度せずと説きたまふ
 75 斯の人未だ 無上道を得ざるが故に
 我が意にも 滅度に至らしめたりと欲はず
 76 我は爲法王 法に於いて自在なり
 衆生を安穩ならしめんが故に 世に現す
 77 汝舍利弗 我が此の法印は
 世間を利益せんと 欲するが爲の故に説く
 所遊の方に在りて 妄りに宣傳すること勿れ
 78 若聞くこと有らん者 隨喜し頂受せば
 當に知るべし是の人は 阿鞞跋致なり
 79 若此の經法を 信受すること有らん者は
 是の人は已に曾て 過去の佛を見たてまつりて

恭敬供養 亦聞是法
 若人有能 信汝所説
 則爲見我 亦見於汝
 及比丘僧 并諸菩薩
 斯法華經 爲深智説
 淺識聞之 迷惑不解
 一切聲聞 及辟支佛
 於此經中 力所不及
 汝舍利弗 尙於此經
 以信得入 況餘聲聞
 其餘聲聞 信佛語故
 隨順此經 非已智分
 又舍利弗 橋慢懈怠
 計我見者 莫説此經
 凡夫淺識 深著五欲
 聞不能解 亦勿爲説

恭敬供養し 亦是の法を聞けるなり
 80 若人能く 汝が所説を信すること有らば
 則ち爲我を見 亦汝
 及び比丘僧 並びに 諸の菩薩を見るなり
 81 斯の法華經は 深智の爲に説く
 淺識は之を聞きて 迷惑して解らず
 82 一切の聲聞 及び辟支佛は
 此の經の中に於いて 力及ばざる所なり
 83 汝舍利弗すら 尙此の經に於いては
 信を以つて入ることを得たり 況や餘の聲聞をや
 84 其餘の聲聞も 佛語を信するが故に
 此の經に隨順す 己が智分に非ず
 85 又舍利弗 橋慢懈怠
 我見を計する者には 此の經を説くこと莫れ
 86 凡夫の淺識 深く五欲に著せるは
 聞くと解ること能はじ 亦爲に説くこと勿れ

若人不信 毀謗此經
 則斷一切 世間佛種
 或復墮墮 而懷疑惑
 汝當聽說 此人罪報
 若佛在世 若滅度後
 其有誹謗 如斯經典
 見有誹誦 書持經者
 輕賤憎嫉 而懷結恨
 此人罪報 汝今復聽
 其人命終 入阿鼻獄
 具足一劫 劫盡更生
 如是展轉 至無數劫
 從地獄出 當墮畜生
 若狗野干 其形頹瘦
 鬻黠疥癩 人所觸燒
 又復為人 之所惡賤

87 若人信ぜずして 此の經を毀謗せば
 則ち一切 世間の佛種を斷ぜん
 88 或は復墮墮して 疑惑を懷かん
 汝當に 此の人の罪報を説かんを聽くべし
 89 若は佛在世 若は滅度の後に
 其斯の如き經典を 誹謗すること有らん
 90 經を誹誦し書持すること 有らん者を見て
 輕賤憎嫉して 結恨を懷かん
 此の人の罪報を 汝今復聽け
 91 其の人命終して 阿鼻獄に入らん
 一劫を具足して 劫盡きなば更生れん
 是の如く展轉して 無數劫に至らん
 92 地獄より出でては 當に畜生に墮つべし
 若狗野干としては 其の形頹瘦し
 鬻黠 疥癩にして 人に觸 燒せられ
 又復人に 惡み賤まれん

常困飢渴 骨肉枯竭
 生受楚毒 死被瓦石
 斷佛種故 受斯罪報
 若作野干 或生驢中
 身常負重 加諸杖捶
 但念水草 餘無所知
 謗斯經故 獲罪如是
 有作野干 來人聚落
 身體疥癩 又無一目
 爲諸童子 之所打擲
 受諸苦痛 或時致死
 於此死已 更受驢身
 其形長大 五百由旬
 驛駘無足 跪轉腹行
 爲諸小蟲 之所啖食
 晝夜受苦 無有休息

83 常に飢渴に困みて 骨肉枯竭せん
 生きては楚毒を受け 死して瓦石を被らん
 佛種を斷ずるが故に 斯の罪報を受けん
 94 若は野干と作り 或は驢の中に生れて
 身に常に重きを負ひ 諸の杖捶を加へられんに
 但水草のみ念ひて 餘は知る所無けん
 95 斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
 有は野干と作りて 聚落に入れば
 96 身體疥癩ありて 又一目無からんに
 諸の童子に 打擲せられ
 諸の苦痛を受けて 或時は死を致さん
 97 此に於いて死し已りて 更に驢身を受けん
 其の形長大にして 五百由旬ならん
 98 驛駘無足にして 跪轉腹行し
 諸の小蟲に 啖食せられん
 晝夜苦を受くるに 休息有ること無けん

謗斯經故 獲罪如是 諸根暗鈍
 若得爲人 盲聾背僂 人不信受
 婬陋癡慧 鬼魅所著 爲人所使
 有所言說 口氣常臭 貧窮下賤
 多病瘡瘦 雖親附人 若有所得
 若修醫道 更增佗疾 若自有病
 設服良藥 若佗反逆 如是等罪
 如斯罪人 永不見佛

斯の經を謗するが故に 罪を獲ることは是の如し
 98 若人と爲ることを得ては 諸根暗鈍にして
 婬 陋 癡 慧 盲 聾 背 僂 ならん
 99 言説する所有らんに 人不信受せじ
 口の氣常に臭く 鬼魅に著せられん
 100 貧窮下賤にして 人に使はれ
 多病瘡瘦にして 依怙する所無く
 人に親附すと雖も 人意に在かじ
 若所得有らば 尋いで復忘失せん
 101 若醫道を修め 方に順じて病を治せば
 更に佗の病を増し 或は復死を致さん
 102 若自ら病有らば 人の救療すること無く
 設ひ良藥を服すとも 而も又増劇せん
 103 若は佗の反逆し 抄劫し竊盜せん
 是の如き等の罪 横まに其の殃に罹らん
 104 斯の如き罪人は 永く佛

衆聖之王 說法教化 說生難處
 如斯罪人 常生難處 永不聞法
 狂聾心亂 如恆河沙 諸根不具
 於無數劫 如遊園觀 如己舍宅
 在餘惡道 是其行處 獲罪如是
 駝驢豬狗 是行處 聲盲瘡癩
 若得爲人 以自莊嚴 疥癩癰疽
 貧窮諸衰 以爲衣服 垢穢不淨
 水腫乾瘡 如益等病 增益瞋恚
 如是等病 身常臭處 不擇禽獸
 深著我見 姪欲熾盛

衆聖の王の 說法教化したまふを見たてまつらじ
 105 斯の如き罪人は 常に難處に生ぜん
 狂聾心亂にして 永く法を聞かじ
 106 無數劫の 恆河沙の如きに於いて
 生れては輒ち聲瘡にして 諸根不具ならん
 107 常に地獄に處すること 園觀に遊ぶが如く
 餘の惡道に在ること 己が舍宅の如く
 駝驢豬狗 是其の行處ならん
 斯の經を謗するが故に 罪を得ること是の如し
 108 若人と爲ることを得ては 聲盲瘡癩にして
 貧窮諸衰 以つて自ら莊嚴し
 水腫乾瘡 疥癩癰疽
 是の如き等の病 以つて衣服と爲ん
 109 身常に臭きに處して 垢穢不淨に
 深く我見に著して 瞋恚を増益し
 姪欲熾盛にして 禽獸を擇ばじ

謗斯經故 獲罪如是
 告舍利弗 謗斯經者
 若說其罪 窮劫不盡
 以是因緣 我故語汝
 無智人中 莫說此經
 若有利根 智慧明了
 多聞強識 求佛道者
 如是之人 乃可爲說
 若人曾見 億百千佛
 植諸善本 深心堅固
 如是之人 乃可爲說
 若人精進 常修慈心
 不惜身命 乃可爲說
 若人恭敬 無有異心
 離諸凡愚 獨處山澤
 如是之人 乃可爲說

斯の經を謗するが故に 罪を獲ること是の如し
 110 舍利弗に告ぐ 斯の經を謗せん者
 若其罪を説かんに 劫を窮むとも盡せじ
 111 是の因縁を以つて 我故らに汝に語る
 無智の人の中にして 此の經を説くこと莫れ
 112 若利根にして 智慧明了に
 多聞強識にして 佛道を求むる者有らん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 113 若人曾て 億百千の佛を見たてまつりて
 諸の善本を植ゑ 深心堅固ならん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 114 若人精進して 常に慈心を修し
 身命を惜まざらん 乃ち爲に説くべし
 115 若人恭敬して 異心有ること無く
 諸の凡愚を離れて 獨山澤に處せん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし

又舍利弗 捨惡知識
 如是之人 若見佛子
 如淨明珠 如淨明珠
 如是之人 若見佛子
 若人無瞋 常愍一切
 如是之人 復有佛子
 以清淨心 警諭言辭
 如是之人 若有比丘
 四方求法 但樂受持
 若見有人 親近善友
 乃可爲說 持戒清潔
 求大乘經 乃可爲說
 質直柔軟 恭敬諸佛
 乃可爲說 於大衆中
 種種因緣 說法無礙
 乃可爲說 爲一切智
 合掌頂受 大乘經典

116 又舍利弗 若人有りて
 惡知識を捨てて 善友に親近するを見ん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 117 若佛子の 持戒清潔にして
 淨明珠の如くにして 大乘經を求むるを見ん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 118 若人瞋無く 質直柔軟にして
 常に一切を愍み 諸佛を恭敬せん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 119 復佛子の 大衆の中に於いて
 清淨の心を以つて 種種の因縁
 警諭の言辭をもつて 說法すること無礙なる有らん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 120 若比丘の 一切智の爲に
 四方に法を求めて 合掌し頂受し
 但樂ひて 大乘經典を受持して

乃至不受 餘經一偈
 如是之人 乃可爲說
 如人至心 求佛舍利
 如是求經 得已頂受
 其人復 志求餘經
 亦未曾念 外道典籍
 如是之人 乃可爲說
 告舍利弗 我說是相
 求佛道者 竊劫不盡
 如是等人 則能信解
 汝當爲說 妙法華經

乃至 餘經の一偈をも受けざる有らん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 121 人の至心に 佛舍利を求むるが如く
 是の如く經を求め 得已りて頂受せん
 其の人復 餘經を志求せず
 亦未だ曾て 外道の典籍を念ぜざらん
 是の如きの人に 乃ち爲に説くべし
 122 舍利弗に告ぐ 我是の相にして
 佛道を求むる者を説かんに 劫を竊むとも盡せじ
 是の如き等の人は 則ち能く信解せん
 汝當に爲に 妙法華經を説くべし

妙法蓮華經信解品第四

爾時慧命須菩提。摩訶迦旃延。摩訶迦葉。摩訶目犍連。從佛所聞。未曾有法。世尊授舍利弗。阿耨多羅三藐三菩提記。發希有心。歡喜踊躍。即從座起。整衣服。偏袒右肩。右膝著地。一心合掌。曲躬恭敬。瞻仰尊顏。而白佛言。我等居僧之首。年竝朽邁。自謂已得涅槃。無所堪任。不復進求。阿耨多羅三藐三菩提。世尊往昔。說法既久。我時在座。身體疲懈。但念空。無相無作。於菩薩法。遊戲神通。淨佛國土。成就衆生。心不喜樂。所以者何。世尊令我等。出於三界。得涅槃證。又今我等。年已朽邁。於佛教化菩薩。阿耨多羅三藐三菩提。不生一念。好

妙法蓮華經信解品第四

爾の時に慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連、佛に従ひたてまつりて、聞ける所の未曾有の法と、世尊の舍利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふとに、希有の心を發し歡喜踊躍す。即ち座より起ちて衣服を整へ、偏に右の肩を袒し、右の膝を地に著け、一心に合掌し、曲躬恭敬し、尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく、我等僧の首に居して、年竝びに朽邁せり。自ら已に涅槃を得て、堪任する所無しと謂ひて、復阿耨多羅三藐三菩提を進み求めず。世尊往昔の說法既に久し。我時に座に在りて、身體疲懈し、但、空、無相、無作を念じて、菩薩の法の神通に遊戲し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於いて、心喜樂せざりき。所以は何ん。世尊、我等をして三界を出でて、涅槃の證を得しめたまへり。又今我等、年已に朽邁して、佛の菩薩を教化したまふ阿耨多羅三藐三菩提に於いて、一念好樂の心を生ぜざり

樂之心。我等今於佛前。聞授聲聞。阿耨多羅三藐三菩提記。心深歡喜。得未曾有。不謂於今。忽然得聞。希有之法。深自慶幸。獲大善利。無量珍寶。不求自得。世尊我等今者。樂說譬諭。以明斯義。譬若有人。年既幼稚。捨父逃逝。久住佗國。或十。或二十。至五十歲。年既長大。加復窮困。馳騁四方。以求衣食。漸漸遊行。遇向本國。其父先來。求子不得。中止一城。其家大富。財寶無量。金銀。瑠璃。珊瑚。琥珀。頗梨珠等。其諸倉庫。悉皆盈溢。多有僮僕。臣佐吏民。象馬車乘。牛羊無數。出入息利。乃徧佗國。商估賈客。亦甚衆多。時貧窮子。遊諸聚落。經歷國邑。遂到其父。所止之城。父每念子。與子離別。五十餘年。而未曾向人。說如此事。但自思惟。心懷悔恨。自念老朽。多有財物。金銀

き。我等今佛前に於いて、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞きて、心甚だ歡喜し、未曾有なることを得たり。謂はざりき、於今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。無量の珍寶求めざるに自ら得たり。世尊、我等今者樂はくば譬諭を説きて、以て斯義を明さん。譬へば人有りて、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく佗國に住して、或は十、二十より五十歳に至る。年既に長大して、加す復窮困し、四方に馳騁して、以つて衣食を求む。漸漸に遊行して、偶本國に向ひぬ。其の父先より來、子を求むるに得ず。一の城に中止す。其の家大いに富みて、財寶無量なり。金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、頗梨珠等、其の諸の倉庫に、悉く皆盈溢せり。多く僮僕、臣佐、吏民有りて、象馬、車乘、牛羊無數なり。出入息利するところ、乃ち佗國に徧し。商估賈客亦甚だ衆多なり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、國邑を經歷して、遂に其の父の所止の城に到りぬ、父毎に子を念ふ。子と離別して五十餘年、而未だ曾て、人に向ひて此の如き事を説かず。但自ら思惟して、心に悔恨を懷く。

珍寶。倉庫盈溢。無有子息。一旦終沒。財物散失。無所委付。是以慙慙。每憶其子。復作是念。我若得子。委付財物。坦然快樂。無復憂慮。世尊。爾時窮子。備賃展轉。遇到父舍。住立門側。遙見其父。踞師子牀。寶几承足。諸婆羅門。刹利。居士。皆恭敬圍繞。以眞珠瓔珞。價直千萬。莊嚴其身。吏民僮僕。手執白拂。侍立左右。覆以寶帳。垂諸華旛。香水灑地。散衆名華。羅列寶物。出內取與。有如是等。種種嚴飾。威德特尊。窮子見父。有大力勢。即懷恐怖。悔來至此。竊作是念。此或是王。或是王等。非我傭力。得物之處。不如往至貧里。肆力有地。衣食易得。若久住此。或見逼迫。強

自ら念はく、老朽して多く財物有り。金銀、珍寶、倉庫に盈溢すれども、子息あると無し。一旦に終沒しなば、財物散失して委付する所無けん。是を以つて、慙慙に毎に其の子を憶ふ。復是の念を作さく、我若子を得て、財物を委付せば、坦然快樂にして、復憂慮無けん。世尊、爾の時に、窮子備賃展轉して、遇父の舍に到りぬ。門側に住立して、遙かに其の父を見れば、師子の牀に踞して、寶几足を承け、諸の婆羅門、刹利、居士、皆恭敬し圍繞せり。眞珠の瓔珞、價直千萬なるを以つて其の身を莊嚴し、吏民、僮僕手に白拂を執りて左右に侍立せり。覆ふに寶帳を以つてし、諸の華旛を垂れ、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、寶物を羅列して、出内取與す。是の如き等の種種の嚴飾有りて威德特尊なり。窮子父の大力勢有るを見て、即ち恐怖を懷きて此に來至せるとを悔ゆ。竊かに是の念を作さく、此或は是王か、或は是王と等しきか、我が傭力して物を得べき處に非じ。如かじ、貧里に往至して肆力地有りて、衣食得易からんには。若久しく此に住せば、或は逼迫せられん。強ひて我をして作さしめんかと。是の念を作し

使我作。作是念已。疾走而去。時富長者。於師子座。見子便識。心大歡喜。即作是念。我財物庫藏。今有所付。我常思念此子。無由見之。而忽自來。甚適我願。我雖年朽。猶故貪惜。即遣傍人。急追將還。爾時使者。疾走往捉。窺子驚愕。稱怨大喚。我不相犯。何爲見捉。使者執之愈急。強牽將還。于時窺子。自念無罪。而被囚執。此必定死。轉更惶怖。悶絕躡地。父遙見之。而語使言。不須此人。勿強將來。以冷水灑面。令得醒悟。莫復與語。所以者何。父知其子。志意下劣。自知豪貴。爲子所難。審知是子。而以方便。不語他人。云是我子。使者語之。我今放汝。隨意所趣。窺子歡喜。得未曾有。從地

已りて、疾く走りて去りぬ。29 時に富める長者、師子の座に於いて、子を見て便ち識りぬ。30 心大いに歡喜して、即ち是の念を作さく、我が財物、庫藏、今付する所有り。我常に此の子を思念すれども、之を見るに由無し。而るを忽ちにして自ら來れり。甚だ我が願に適へり。我年朽ちたりと雖も猶故貪惜す。31 即ち傍人を遣して、急に追うて將るて還らしむ。32 爾の時に使者、疾く走り往いて捉ふ。窺子驚愕して、怨なりと稱して大いに喚ばふ。我相犯さず、何ぞ捉へらるることを爲る。33 使者之を執ふること愈急にして、強ひて率將るて還る。34 時に窺子自ら念はく、罪無くして囚執へらる此必定して死せん。轉た更に惶怖し悶絶して地に躡る。35 父遙かに之を見て、使に語りて言はく、此の人を須ひじ。強ひて將るて來ると勿れ。冷水を以つて面に灑ぎて、醒悟するを得しめよ。復與し語ると莫れ。36 所以は何ん。父其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして、爲子の難る所なりと知りて、審かに是子なりと知れども、方便を以つて他人に語りて、是我が子なりと云はず。37 使者之に語り、我今汝を放す。意の所趣に隨へ。38 窺子歡

而起。往至貧里。以求衣食。爾時長者。將欲誘引其子。而設方便。密遣二人。形色憔悴。無威德者。汝可詣彼。徐語窺子。此有作處。倍與汝直。窺子若許。將來使作。若言欲何所作。便可語之。雇汝除糞。我等二人。亦共汝作。時二人。即求窺子。既已得之。具陳上事。爾時窺子。先取其價。尋與除糞。其父見子。愍而怪之。又以他日。於窻牖中。遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵空。汗穢不淨。即脫瓔珞。細軟上服。嚴飾之具。更著麤弊。垢膩之衣。塵土空身。右手執持。除糞之器。狀有所畏。語諸作人。汝等動作。勿得懈怠。以方便故。得近其子。後復告言。咄男子。汝常此作。勿復餘去。當加汝價。諸有所

喜して未曾有なることを得て、地より起ちて貧里に往至して、以つて衣食を求む。39 爾の時に長者、將に其の子を誘引せんと欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して、威徳無き者を遣す。40 汝彼に詣いて、徐く窺子に語るべし。此に作處有り、倍して汝に直を與へん。41 窺子若許さば、將る來りて作さしめよ。若何の所作をか欲すると言はば、便ち之に語るべし。汝を雇ふことは、糞を除はしめんとなり。我等二人、亦汝と共に作さん」と。42 時に二人の使人、即ち窺子を求むるに、既已に之を得て具さに上の事を陳ぶ。43 爾の時に窺子、先其の價を取りて、尋いで與に糞を除ふ。其の父子を見て、愍みて之を怪む。44 又他日を以つて、窻牖の中より遙かに子の身を見れば、羸瘦憔悴して、糞土塵空汗穢不淨なり。45 即ち瓔珞細軟の上服、嚴飾の具を脱ぎて、更に麤弊垢膩の衣を着、塵土に身を空し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所有るに狀れり。46 諸の作人に語り、汝等動作して、懈怠することを得ること勿れと。47 方便を以つての故に、其の子に近くことを得つ。48 後に復告けて言はく、咄や男子、汝常に此にして作せ、

須。甕器米麵、鹽醋之屬。莫自疑難。亦有老
 弊使人。須者相給。好自安意。我如汝父。勿
 復憂慮。所以者何。我年老大。而汝小壯。
 汝常作時。無有欺怠。嗔恨怨言。都不見汝。
 有此諸惡。如餘作人。自今已後。如所生子。
 即時長者。更與作字。名之爲兒。爾時窟子。
 雖欣此遇。猶故自謂。客作賤人。由是之故。
 於二十年中。常令除糞。過是已後。心相
 體信。入出無難。然其所止。猶在本處。世尊
 爾時長者。有疾。自知將死不久。語窟子言。
 我今多有。金銀珍寶。倉庫盈溢。其中多少。
 所應取與。汝悉知之。我心如是。當體此意。
 所以者何。今我與汝。便爲不異。宜加用心。
 無令漏失。爾時窟子。即受教勅。領知衆

復餘に去ること勿れ。當に汝に價を加ふべし。諸の所須有る器、米麵、鹽醋の屬あり。自ら疑ひ難ること莫れ。亦老弊の使人有り、須ひば相給せん。好く自ら意を安くせよ。我は汝が父の如し。復憂慮すること勿れ。所以は何ん。我年老大にして、汝少壯なり。汝常に作さん時、欺怠、嗔恨、怨言有ること無かれ。都て汝が此の諸惡有らんを、餘の作人の如くに見じ。今より已後、所生の子の如くせん。即時に長者、更に與に字を作り、之を名けて兒と爲す。爾の時に窟子、此の遇するを欣ぶと雖も、猶故自ら客作の賤人と謂へり。是に由るが故に、二十年中に於て常に糞を除はしむ。是を過ぎて已後、心相體信して入出に難く無し。然も其の所止は猶本處に在り。世尊爾の時に長者疾有りて、自ら將に死せんと久しからじと知りて、窟子に語りて言はく、我今多く、金銀、珍寶有りて倉庫に盈溢せり。其の中の多少、應に取與すべき所、汝悉く之を知れ、我が心是の如し。當に此の意を體るべし。所以は何ん。今我汝と便ち爲異らず。宜しく用心を加へて漏失せしむると無かるべし。爾の時に窟子、即ち教勅を受け

物。金銀珍寶。及諸庫藏。而無怖取。一餐之意。然後所止。故在本處。下劣之心。亦未能捨。復經少時。父知子意。漸已通泰。成就大志。自鄙先心。臨欲終時。而命其子。并會親族。國王大臣。利利居士。皆悉已集。即自宣言。諸君當知。此是我子。我之所生。於某城中。捨吾逃走。伶僇辛苦。五十餘年。其本字某。我名某甲。昔在本城。懷憂推覓。忽於此間。遇會得之。此實我子。我實其父。今吾所有。一切財物。皆是子有。先所出內。是子所知。世尊是時窟子。聞父此言。即大歡喜。得未曾有。而作是念。我本無心。有所怖求。今此寶藏。自然而至。世尊。大富長者。則是如來。我等皆似佛子。

て、衆物の金銀珍寶、及び諸の庫藏を領知すれども、而も一餐を怖取するの意無し。然も其の所止は、故本處に在り。下劣の心、亦未だ捨つると能はず。復少時を経て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を成就し、自ら先の心を鄙んずと知りて、終らんと欲する時に臨みて、其の子に命じ、并びに親族、國王、大臣、利利、居士を會むるに、皆悉く已に集りぬ。即ち自ら宣べて言はく、諸君當に知るべし。此は是我が子なり。我が所生なり。某の城中に於いて、吾を捨てて逃走して、伶僇辛苦すること五十餘年。其の本の字は某。我が名は某甲。昔本城に在りて、憂を懷いて推ね覓めき。忽ちに此の間に於いて、遇會して之を得たり。此實に我が子なり。我實に其の父なり。今吾が所有の一切の財物は、皆是子の有なり。先に出内する所は、是子の所知なり。世尊、是の時に窟子、父の此の言を聞きて、即ち大いに歡喜して、未曾有なることを得て、是の念を作さく、我本心に、怖求する所有ること無かりき。今此の寶藏、自然にして至りぬといはんが若し。世尊、大富長者は則ち是如來なり。我等は皆佛子に似たり。如來常に、我等は爲子

如來常說。我等爲子。世尊我等。以三苦故。於生死中。受諸熱惱。迷惑無知。樂著小法。今日世尊。令我等思惟。蠲除諸法。戲論之糞。我等於中。勤加精進。得至涅槃。一日之價。既得此已。心大歡喜。自以爲足。便自謂言。於佛法中。勤精進故。所得弘多。然世尊。先知我等。心著弊欲。樂於小法。便見縱捨。不爲分別。汝等當有。如來知見。寶藏之分。世尊以方便力。說如來智慧。我等從佛。得涅槃一日之價。以爲大得。於此大乘。無有志求。我等又因。如來智慧。爲諸菩薩。開示演說。而自於此。無有志願。所以者何。佛知我等。心樂小法。以方便力。隨我等說。而我等不知。眞是佛子。今我等

なりと説きたまへり。世尊、我等三苦を以つての故に、生死の中に於いて諸の熱惱を受け、迷惑無知にして小法に樂著せり。今日世尊、我等をして思惟して、諸法戲論の糞を蠲除せしむ。我等中に於いて、勤加精進して涅槃に至り、一日の價を得たり。既に此を得已りて、心大いに歡喜して、自ら以て足れりと爲す。便ち自ら謂ひて言はく、佛法の中に於て、勤めて精進するが故に、所得弘多なりと。然も世尊、先に我等が心弊欲に著し、小法を樂ふを知しめして、便ち縱捨せられて、爲に汝等當に如來の知見、寶藏の分有るべしと分別したまはず。世尊、方便力を以つて、如來の智慧を説きたまふ。我等佛に従ひて涅槃一日の價を得て、以つて大いに得たりと爲して、此の大乘に於いて、志求有ること無かりき。我等又、如來の智慧に因りて、諸の菩薩の爲に、開示演說せしかども、而も自ら此に於いて、志願有る無し。所以は何ん。佛我等が心に小法を樂ふを知しめして、方便力を以つて、我等に隨ひて説きたまふ。而も我等、眞に佛子なりと知らず。今我等方に知りぬ。世尊は佛の智慧に於いて、惛惛したまふ所無し。所以は何

方知。世尊於佛智慧。無所吝惜。所以者何。我等昔來。眞是佛子。而但樂小法。若我等有。樂大之心。佛則爲我。說大乘法。今此經中。唯說一乘。而昔於菩薩前。毀譽聲聞。樂小法者。然佛實以。大乘教化。是故我等。說本無心。有所怖求。今法王大寶。自然而至。如佛子。所應得者。皆已得之。爾時摩訶迦葉。欲重宣此義。而說偈言

我等今日 聞佛音教
歡喜踊躍 得未曾有
佛說聲聞 當得作佛
無上寶聚 不求自得
譬如童子 幼稚無識
捨父逃逝 遠到佗土
周流諸國 五十餘年

ん。我等昔より來、眞に佛子なれども、而も但小法を樂ふ。若我等、大を樂ふの心有らましかば、佛則ち我が爲に、大乘の法を説きたまはまし。今此の經の中に於いて、唯一乘を説きたまふ。而も昔、菩薩の前に於いて、聲聞の小法を樂ふ者を毀譽したまへども、然も佛實には大乘を以つて教化したまへり。是の故に我等説く、本心に怖求する所有ると無かりしかども、今、法王の大寶自然にして至れり。佛子の應に得べき所の如きは皆已に之を得たり。爾の時に摩訶迦葉、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

我等今日 佛の音教を聞き
歡喜踊躍して 未曾有なることを得たり
佛聲聞 當に作佛することを得べしと説きたまふ
無上の寶聚 求めざるに自ら得たり
譬へば童子 幼稚無識にして
父を捨てて逃逝して 遠く佗土に到りぬ
諸國に周流すること 五十餘年

其父憂念 四方推求
 求之既疲 頓止一城
 造立舍宅 五欲自娛
 其家巨富 多諸金銀
 碑礫碼礪 眞珠瑠璃
 象馬牛羊 輦輿車乘
 田業僮僕 人民衆多
 出入息利 乃徧佗國
 商估賈人 無處不有
 千萬億衆 圍繞恭敬
 常爲王者 之所愛念
 羣臣豪族 皆共宗重
 以諸緣故 往來者衆
 豪富如是 有大力勢
 而年朽邁 益憂念子
 夙夜惟念 死時將至

其の父憂念して 四方に推求す
 之を求むるに既に疲れて 一城に頓止し
 舍宅を造立して 五欲に自ら娛む
 其の家巨いに富みて 諸の金銀
 碑礫碼礪 眞珠瑠璃多く
 象馬牛羊 輦輿車乘
 田業僮僕 人民衆多なり
 出入息利すること 乃ち佗國に徧し
 商估賈人 處として有らざること無し
 千萬億の衆 圍繞し恭敬し
 常に王者に 愛念せらるることを爲
 羣臣豪族 皆共に宗 重し
 諸の縁を以つての故に 往來する者衆し
 豪富なることは是の如くにして 大力勢有り
 而も年朽邁して 益子を憂念す
 夙夜に惟念すらく 死の時將に至らんとす

癡子捨我 五十餘年
 庫藏諸物 當如之何
 爾時窮子 求索衣食
 從邑至邑 從國至國
 或有所得 或無所得
 飢餓羸瘦 體生瘡癬
 漸次經歷 到父住城
 傭賃展轉 遂至父舍
 爾時長者 於其門內
 施大寶帳 處師子座
 眷屬圍繞 諸人侍衛
 或有計算 金銀寶物
 出內財產 注記券疏
 窮子見父 豪貴尊嚴
 謂是國王 若是王等
 驚怖自怪 何故至此

癡子我を捨てて 五十餘年
 庫藏の諸物 當に之を如何かすべき
 爾の時に窮子 衣食を求索して
 邑より邑に至り 國より國に至る
 或は得る所有り 或は得る所無し
 飢餓羸瘦して 體に瘡癬を生ぜり
 漸次に經歷して 父の住せる城に到りぬ
 傭賃展轉して 遂に父の舍に至る
 爾の時に長者 其の門の内に於いて
 大寶帳を施して 師子の座に處し
 眷屬圍繞し 諸人侍衛せり
 或は金銀寶物を 計算し
 財産を出内し 注記券疏する有り
 窮子父の 豪貴尊嚴なるを見て
 謂はく是國王か 若は是王と等しきかと
 驚怖して自ら怪む 何が故ぞ此に至れる

覆自念言 或見逼迫 思惟是已 借問貧里 長者是時 遙見其子 即勅使者 窮子驚喚 是人執我 何用衣食 長者知子 不信我言 即以方便 眇目矧陋 汝可語之 除諸糞穢

我若久住 強驅使作 馳走而去 欲往傭作 在師子座 默而識之 追捉將來 迷悶躑地 必當見殺 使我至此 愚癡狹劣 不信是父 更遣餘人 無威德者 云當相雇 倍與汝價

18 覆かに自ら念言すらく 我若久しく住せば
或は逼迫せられ 強ひて驅つて作さしめん
19 是を思惟し已りて 馳走して去りぬ
貧里を借問して 往いて傭作せんと欲す
20 長者是の時に 師子の座に在りて
遙かに其の子を見て 默して之を識る
21 即ち使者に勅して 追捉して將る來らしむ
窮子驚き喚びて 迷悶して地に躑る
22 是の人我を執ふ 必ず當に殺さるべし
何ぞ衣食を用つて 我をして此に至らしむる
23 長者子の 愚癡狹劣にして
我が言を信ぜず 是父なりと信ぜざらんを知りて
即ち方便を以つて 更に餘人の
眇目矧陋にして 威徳無き者を遣す
24 汝之に語りて云ふべし 當に相雇ひて
諸の糞穢を除はしむべし 倍して汝に價を與へんと

窮子聞之 爲除糞穢 長者於牖 念子愚劣 於是長者 執除糞器 方便附近 既益汝價 飲食充足 如是苦言 父以輒語 長者有智 經二十年 示其金銀 諸物出人 猶處門外

歡喜隨來 淨諸房舍 常見其子 樂爲鄙事 著弊垢衣 往到子所 語令勤作 并塗足油 薦席厚暖 汝當勤作 若如我子 漸令入出 執作家事 眞珠頗梨 皆使令知 止宿草菴

25 窮子之を聞きて 歡喜し隨ひ來りて
爲に糞穢を除ひ 諸の房舍を淨む
26 長者於より 常に其の子を見て
子の愚劣にして 樂つて鄙事を爲すを念ふ
27 是に於いて長者 弊垢の衣を著
除糞の器を執りて 子の所に往き到りぬ
28 方便して附近し 語らひて勤作せしむ
既に汝が價を益し 并びに足に油を塗り
飲食充足し 薦席厚暖ならしめん
29 是の如く苦言すらく 汝當に勤作すべし
又以つて輒語すらく 若我が子の如くせん
30 長者智有りて 漸く入出せしめ
二十年を経て 家事を執作せしむ
31 其に金銀 眞珠頗梨
諸物の出入を示して 皆知らしむれども
猶門外に處し 草菴に止宿して

自念貧事 我無此物
 父知子心 漸已曠大
 欲與財物 卽聚親族
 國王大臣 刹利居士
 於此大衆 說是我子
 捨我佗行 經五十歲
 自見子來 已二十年
 昔於某城 而失是子
 周行求索 遂來至此
 凡我所有 舍宅人民
 悉以付之 恣其所用
 子念昔貧 志意下劣
 今於父所 大獲珍寶
 井及舍宅 一切財物
 甚大歡喜 得未曾有
 佛亦如是 知我樂小

自ら貧事を念ふ 我に此の物無しと
 父子の心 漸く已に曠大なることを知りて
 財物を與へんと欲して 卽ち親族
 國王大臣 刹利居士を聚めて
 此の大衆に於いて 説く是我が子なり
 我を捨てて佗行して 五十歳を経たり
 子を見てより來 已に二十年
 昔某の城に於いて 是の子を失ひき
 周行し求索して 遂に此に來至せり
 凡そ我が所有の 舍宅人民
 悉く以つて之に付す 其の所用を恣にすべしと
 子念はく昔は貧しくして 志意下劣なりき
 今は父の所に於いて 大いに珍寶
 井及に舍宅 一切の財物を獲たりと
 甚だ大いに歡喜して 未曾有なることを得るが若し
 佛も亦是の如し 我が小を樂ふを知しめして

未曾説言 汝等作佛
 而說我等 得諸無漏
 成就小乘 聲聞弟子
 佛勸我等 說最上道
 修習此者 當得成佛
 我承佛教 爲大菩薩
 以諸因緣 種種譬諭
 若干言辭 說無上道
 諸佛子等 從我聞法
 日夜思惟 精勤修習
 是時諸佛 卽授其記
 汝於來世 當得作佛
 一切諸佛 祕藏之法
 但爲菩薩 演其實事
 而不爲我 說斯眞要
 如彼窳子 得近其父

未だ曾て説きて 汝等作佛すべしと言はず
 而も我等 諸の無漏を得て
 小乘を成就する 聲聞の弟子なりと説きたまふ
 佛我等に勸したまはく 最上の道
 此を修習する者は 當に成佛することを得べしと説けと
 我佛の教を承けて 大菩薩の爲に
 諸の因緣 種種の譬諭
 若干の言辭を以つて 無上道を説く
 諸の佛子等 我に従ひて法を聞きて
 日夜に思惟し 精勤修習す
 是の時に諸佛 卽ち其に記を授けたまふ
 汝來世に於いて 當に作佛することを得べしと
 一切の諸佛の 祕藏の法をば
 但菩薩の爲に 其の實事を演べて
 我が爲に 斯の眞要を説かざりき
 彼の窳子の 其の父に近くことを得て

雖知諸物 心不怖取
 我等雖說 佛法寶藏
 自無志願 亦復如是
 我等內滅 自謂爲足
 唯了此事 更無餘事
 我等若聞 淨佛國土
 教化衆生 都無欣樂
 所以者何 一切諸法
 皆悉空寂 無生無滅
 無大無小 無漏無爲
 如是思惟 不生喜樂
 我等長夜 於佛智慧
 無貪無著 無復志願
 而自於法 謂是究竟
 我等長夜 修習空法
 得脫三界 苦惱之患

諸物を知ると雖も 心に怖取せざるが如く
 我等佛法の 寶藏を説くと雖も
 自ら志願無きこと 亦復是の如し
 我等内の滅を 自ら足んぬることを爲たりと謂ひて
 唯此の事を了りて 更に餘事無し
 我等若し 佛の國土を淨め
 衆生を教化するを聞きて 都て欣樂無かりき
 所以は何ん 一切の諸法は
 皆悉く空寂にして 無生無滅
 無大無小 無漏無爲なり
 是の如く思惟して 喜樂を生ぜず
 我等長夜に 佛の智慧に於いて
 貪無く著無く 復志願無し
 而も自ら法に於いて 是究竟なりと謂ひき
 我等長夜に 空法を修習して
 三界の 苦惱の患を脱るることを得

住最後身 有餘涅槃
 佛所教化 得道不虛
 則爲已得 報佛之恩
 我等雖爲 諸佛子等
 說菩薩法 以求佛道
 而於是法 永無願樂
 導師見捨 觀我心故
 初不勸進 說有實利
 如富長者 知子志劣
 以方便力 柔伏其心
 然後乃付 一切財寶
 佛亦如是 現希有事
 知樂小者 以方便力
 調伏其心 乃教大智
 我等今日 得未曾有
 非先所望 而今自得

最後身 有餘涅槃に住せり
 佛の教化したまふ所は 得道虚しからず
 則ち已に 佛の恩を報ずることを得たりと爲す
 我等 諸の佛子等の爲に
 菩薩の法を説きて 以つて佛道を求めしむと雖も
 而も是の法に於いて 永く願樂無かりき
 導師捨てられたることは 我が心を觀じたまふが故に
 初め勸進して 實の利有りと説きたまはず
 51 富める長者の 子の志劣なるを知りて
 方便力を以つて 其の心を柔伏して
 然して後に乃し 一切の財寶を付するが如く
 佛も亦是の如し 希有の事を現じたまふ
 52 小を樂ふ者なりと知しめして 方便力を以つて
 其の心を調伏して 乃し大智を教へたまふ
 53 我等今日 未曾有なることを得たり
 先の所望に非ざるを 而も今自ら得ること

如彼窮子 得無量寶
 世尊我今 得道得果
 於無漏法 得清淨眼
 我等長夜 持佛淨戒
 始於今日 得其果報
 法王法中 久修梵行
 今得無漏 無上大果
 我等今者 眞是聲聞
 以佛道聲 令一切聞
 我等今者 眞阿羅漢
 於諸世間 天人魔梵
 普於其中 應受供養
 世尊大恩 以希有事
 憐愍教化 利益我等
 無量億劫 誰能報者
 手足供給 頭頂禮敬

彼の窮子の 無量の寶を得るが如し
 54 世尊我今 道を得果を得
 無漏の法に於いて 清淨の眼を得たり
 55 我等長夜に 佛の淨戒を持ちて
 始めて今日に於いて 其の果報を得
 56 法王の法の中に 久しく梵行を修して
 今無漏 無上の大果を得
 57 我等今者 眞に聲聞なり
 佛道の聲を以つて 一切をして聞かしむべし
 58 我等今者 眞に阿羅漢なり
 諸の世間 天人魔梵に於いて
 普く其の中に於いて 應に供養を受くべし
 59 世尊は大恩まします 希有の事を以つて
 憐愍教化して 我等を利益したまふ
 無量億劫にも 誰か能く報ずる者あらん
 60 手足をもつて供給し 頭頂をもつて禮敬し

一切供養 皆不能報
 若以頂戴 兩肩荷負
 於恆沙劫 盡心恭敬
 又以美膳 無量寶衣
 及諸臥具 種種湯藥
 牛頭栴檀 及諸珍寶
 以起塔廟 寶衣布地
 如斯等事 以用供養
 於恆沙劫 亦不能報
 諸佛希有 無量無邊
 不可思議 大神通力
 無漏無爲 諸法之王
 能爲下劣 忍于斯事
 取相凡夫 隨宜爲說
 諸佛於法 得最自在
 知諸衆生 種種欲樂

一切をもつて供養すとも 皆報すること能はじ
 61 若は以つて頂戴し 兩肩に荷負して
 恆沙劫に於いて 心を盡して恭敬し
 62 又美膳 無量の寶衣
 及び諸の臥具 種種の湯藥
 牛頭栴檀 及び諸の珍寶を以つて
 以つて塔廟を起て 寶衣を地に布く
 63 斯の如き等の事 以つて供養すること
 恆沙劫に於いてすとも 亦報すること能はじ
 64 諸佛は希有にして 無量無邊
 不可思議の 大神通力まします
 無漏無爲にして 諸法の王なり
 能く下劣の爲に 斯の事を忍びたまふ
 取相の凡夫に 宜しきに隨ひて爲に説きたまふ
 65 諸佛は法に於いて 最も自在を得たまへり
 諸の衆生の 種種の欲樂

及其志力及其志力 隨所堪任隨所堪任
 以無量論以無量論 而爲說法而爲說法
 隨諸衆生隨諸衆生 宿世善根宿世善根
 又知成熟又知成熟 未成熟者未成熟者
 種種籌量種種籌量 分別知己分別知己
 於一乘道於一乘道 隨宜說三隨宜說三

妙法蓮華經卷第二

及び其の志力を知しめして 堪任する所に隨ひて
 無量の論を以つて 爲に法を説きたまふ
 諸の衆生の 宿世の善根に隨ひ
 又成熟 未成熟の者を知しめし
 種種に籌量し 分別し知しめし已りて
 一乘の道に於いて 宜しきに隨ひて三と説きたまふ

妙法蓮華經卷第二

妙法蓮華經藥草諭品第五

爾時世尊告摩訶迦葉及諸大弟子善哉善哉迦葉善哉善哉如來眞實功德誠如所言如來復有無量無邊阿僧祇功德汝等若於無量億劫說不能盡迦葉當知如來是諸法之王若有所說皆不虛也於一切法以智方便而演說之其所說法皆悉到於一切智地如來觀知一切諸法之所歸趣亦知一切衆生深心所行通達無礙又於諸法究盡明了示諸衆生一切智慧迦葉譬如三千大千世界山川谿谷土地所生卉木叢林及諸藥草種類若干名色各異密雲彌布徧覆三千大千世界一時等澍其澤普洽卉木叢林及諸藥草

妙法蓮華經藥草諭品第五

爾の時に世尊、摩訶迦葉、及び諸の大弟子に告げたまはく、善い哉善い哉、迦葉善く如來眞實の功德を説く。誠に所言の如し。如來復、無量無邊阿僧祇の功德有り。汝等若無量億劫に於いて説くとも、盡すこと能はじ。迦葉、當に知るべし。如來は是、諸法の王なり。若所説有るは、皆虚しからず。一切の法に於いて、智の方便を以つて之を演説す。其の所説の法は、皆悉く一切智地に到らしむ。如來は一切諸法の歸趣する所を觀知し、亦一切衆生の深心の所行を知りて、通達無礙なり。又諸法に於いて、究盡明了にして、諸の衆生に、一切の智慧を示す。迦葉、譬へば、三千大千世界の山川、谿谷、土地に生ひたる所の卉木、叢林、及び諸の藥草、種類若干にして、名色各異なり。密雲彌布して、徧く三千大千世界に覆ひ、一時に等しく澍ぐ。其の澤、普く卉木、叢林、及び諸の藥草の小根、小莖、小枝、小葉、中根、中莖、中枝、中葉、

小根小莖。小枝小葉。中根中莖。中枝中葉。大根大莖。大枝大葉。諸樹大小。隨上中下。各有所受。一雲所雨。稱其種性。而得生長。華果敷實。雖一地所生。一雨所潤。而諸草木。各有差別。迦葉當知。如來亦復如是。出現於世。如大雲起。以大音聲。普徧世界。天人阿脩羅。如彼大雲。徧覆三千大千國土。於大眾中。而唱是言。我是如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。未度者令度。未解者令解。未安者令安。未涅槃者。令得涅槃。今世後世。如實知之。我是一切知者。一切見者。知道者。開道者。說道者。汝等天人。阿脩羅衆。皆應到此。爲聽法故。爾時無數。千萬億種種衆生。來至佛所。而聽法。如來于時。觀是衆生。諸根利鈍。

大根、大莖、大枝、大葉に洽ふ。諸樹の大小、上中下に隨ひて、各受くる所有り。一雲の雨す所、其の種性に稱ひて、而も生長することを得て、華果敷け實る。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し。迦葉、當に知るべし。如來も亦復是の如し。世に出現すること、大雲の起るが如く、大音聲を以つて、世界の天人、阿脩羅に普徧せること、彼の大雲の徧く三千大千國土に覆ふが如し。11 大眾の中に於いて、是の言を唱ふ。我は是如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。未だ度せざる者をば度せしめ、未だ解せざる者をば解せしめ、未だ安んぜざる者をば安んぜしめ、未だ涅槃せざる者をば涅槃を得しむ。14 今世後世、實の如く之を知れり。我はは一切知者、一切見者、知道者、開道者、說道者なり。15 汝等天人、阿脩羅衆、皆應に此に到るべし。法を聽かんが爲の故に。16 爾の時に、無數千萬億種の衆生、佛の所に來至して法を聽く。17 如來、時に是の衆生の諸根の利鈍、精進、懈怠を觀じて、其の堪ふる所に隨ひて、爲に法を説くと種種無量にして、皆歡喜し快

精進懈怠。隨其所堪。而爲說法。種種無量。皆令歡喜。快得善利。是諸衆生。聞是法已。現世安穩。後生善處。以道受樂。亦得聞法。既聞法已。離諸障礙。於諸法中。任力所能。漸得入道。如彼大雲。雨於一切。卉木叢林。及諸藥草。如其種性。具足蒙潤。各得生長。如來說法。一相一味。所謂解脫相。離相滅相。究竟至於一切種智。其有衆生。聞如來法。若持讀誦。如說修行。所得功德。不自覺知。所以者何。唯有如來。知此衆生。種相體性。念何事。思何事。修何事。云何念。云何思。云何修。以何法念。以何法思。以何法修。以何法得何法。衆生住於種種之地。唯有如來。如實見之。明了無礙。如彼卉木叢林。諸藥草等。而不自知。上中下性。如來知是。一相一味之法。所謂解脫相。離

く善利を得しむ。18 是の諸の衆生、是の法を聞き已りて、現世安穩にして後に善處に生じ、道を以つて樂を受け、亦法を聞くことを得。19 既に法を聞き已りて、諸の障礙を離れ、諸法の中に於いて、力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。20 彼の大雲の、一切の卉木叢林、及び諸の藥草に雨るに、其の種性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。21 如來の說法は一相一味、所謂解脫相、離相、滅相なり。究竟して一切種智に至る。22 其衆生有りて、如來の法を聞きて、若は持し、讀誦し、説の如く修行するに、得る所の功德自ら覺知せず。23 所以は何ん。唯如來のみ有りて、此の衆生の種、相、體、性、何の事を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、云何に思し、云何に修し、何の法を以つて念じ、何の法を以つて思し、何の法を以つて修し、何の法を以つて何の法を得といふことを知れり。24 衆生の種種の地に住せるを、唯如來のみ有りて、如實に之を見て明了無礙なり。25 彼の卉木叢林、諸の藥草等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。26 如來はは一相一味の法なりと知しめせり。所謂解脫相、離相、滅

相滅相。究竟涅槃。常寂滅相。終歸於空。佛知是已。觀衆生心欲。而將護之。是故不即爲說。一切種智。汝等迦葉。甚爲希有。能知如來。隨宜說法。能信能受。所以者何。諸佛世尊。隨宜說法。難解難知。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

破有法王 出現世間
 隨衆生欲 種種說法
 如來尊重 智慧深遠
 久默斯要 不務速說
 有智若聞 則能信解
 無智疑悔 則爲永失
 是故迦葉 隨力爲說
 以種種緣 令得正見
 迦葉當知 譬如大雲

相、究竟涅槃、常寂滅相にして、終に空に歸す。佛是を知り已れども、衆生の心欲を觀じて之を將護す。是の故に、即ち爲に一切種智を説かず。汝等迦葉、甚だ爲希有なり。能く如來の隨宜の説法を知りて、能く信じ能く受く。所以は何ん。諸佛世尊の隨宜の説法は、解り難く知り難ければなり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

有を破する法王 世間に出現して
 衆生の欲に隨ひて 種種に法を説く
 如來は尊重にして 智慧深遠なり
 久しく斯の要を默して 務きて速かに説かず
 有るは若聞きて 則ち能く信解す
 智無きは疑悔して 則ち永く失ふ爲し
 是の故に迦葉 力に隨ひて爲に説きて
 種種の縁を以つて 正見を得しむ
 迦葉當に知るべし 譬如大雲の

起於世間 徧覆一切
 慧雲含潤 電光晃曜
 雷聲遠震 令衆悅豫
 日光掩蔽 地上清涼
 雲垂布 如可承攬
 其雨普等 四方俱下
 流澍無量 率土充洽
 山川險谷 幽邃所生
 卉木藥草 大小諸樹
 百穀苗稼 甘蔗蒲萄
 雨之所潤 無不豐足
 乾地普洽 藥木竝茂
 其雲所出 一味之水
 草木叢林 隨分受潤
 一切諸樹 上中下等
 稱其大小 各得生長

世間に起りて 徧く一切を覆ふに
 慧雲潤を含み 電光晃曜し
 雷聲遠く震ひて 衆をして悦豫せしめ
 日光掩蔽して 地の上は清涼に
 雲垂布して 承攬すべきが如し
 其の雨普等にして 四方に俱に下り
 流澍すること無量にして 率土充洽す
 山川險谷の 幽邃に生ひたる所の
 卉木藥草 大小の諸樹
 百穀苗稼 甘蔗蒲萄
 雨の潤す所 豊足せずといふこと無し
 乾地普く洽ひ 藥木竝び茂り
 其の雲より出づる所の 一味の水に
 草木叢林 分に隨ひて 潤を受く
 一切の諸樹 上中下等しく
 其の大小に稱ひて 各生長することを得

根莖枝葉 華果光色 皆得鮮澤 性分大小 而各滋茂 出現於世 普覆一切 爲諸衆生 諸法之實 於諸天人 而宣是言 兩足之尊 猶如大雲 枯槁衆生 得安穩樂 及涅槃樂 一心善聽 諸天人衆

根莖枝葉 華果光色 一雨の及す所 皆鮮澤することを得 11 其の體相 性の大小に分れたるが如く 潤す所は一なれども 而も各滋茂するが如し 12 佛も亦是の如し 世に出現すること 譬へば大雲の 普く一切を覆ふが如し 13 既に世に出でぬれば 諸の衆生の爲に 諸法の實を 分別し演説す 14 大聖世尊 諸の天人 一切衆の中に於いて 而も是の言を宣ふ 15 我は爲如來 兩足の尊なり 世間に出づること 猶大雲の如し 16 一切の 枯槁の衆生を充潤して 皆苦を離れ 安穩の樂 世間の樂 及び涅槃の樂を得しむ 17 諸の天人衆 一心に善く聽け

皆應到此 觀無上尊 無能及者 故現於世 甘露淨法 解脫涅槃 演暢斯義 而作因緣 普皆平等 愛憎之心 亦無限礙 平等說法 衆多亦然 會無佗事 終不疲厭 如雨普潤 持戒毀戒 貴賤上下

皆應に此に到りて 無上尊を觀るべし 18 我は爲世尊なり 能く及ぶ者無し 衆生を安穩ならしめんが故に 世に現じて 大衆の爲に 甘露の淨法を説く 19 其の法一味にして 解脫涅槃なり 一の妙音を以つて 斯の義を演暢す 常に大乘の爲に 而も因緣を作す 20 我一切を觀すること 普く皆平等なり 彼此 愛憎の心有ること無し 21 我貪著無く 亦無限礙無し 恆に一切の爲に 平等に法を説く 22 一人の爲にするが如く 衆多も亦然なり 常に法を演説して 會て佗事無し 23 去來坐立に 終に疲厭せず 世間に充足すること 雨の普く潤すが如し 24 貴賤上下 持戒毀戒

威儀具足 及不具足
 正見邪見 利根鈍根
 等雨法雨 而無懈倦
 一切衆生 聞我法者
 隨力所受 住於諸地
 或處人天 轉輪聖王
 釋梵諸王 是小藥草
 知無漏法 能得涅槃
 起六神通 及得三昧
 獨處山林 常行禪定
 得緣覺證 是中藥草
 求世尊處 我當作佛
 行精進定 是上藥草
 又諸佛子 專心佛道
 常行慈悲 自知作佛
 決定無疑 是名小樹

威儀具足せる 及び具足せざる
 正見邪見 利根鈍根に
 等しく法雨を雨して 而も懈倦無し
 一切衆生の 我が法を聞く者
 力の受くる所に隨ひて 諸の地に住す
 或は人天の 轉輪聖王
 釋梵諸王に處する 是の小の藥草なり
 無漏の法を知りて 能く涅槃を得
 六神通を起し 及び三昧を得
 獨山林に處し 常に禪定を行じて
 緣覺の證を得る 是中の藥草なり
 世尊の處を求めて 我當に作佛すべしと
 精進定を行ずる 是上の藥草なり
 又諸の佛子 心を佛道に專らにして
 常に慈悲を行じ 自ら作佛せんこと
 決定して 疑無しと知る 是を小樹と名く

安住神通 轉不退輪
 度無量億 百千衆生
 如是菩薩 名爲大樹
 佛平等說 如一味雨
 隨衆生性 所受不同
 如彼草木 所稟各異
 佛以此論 方便開示
 種種言辭 演說一法
 於佛智慧 如海一滴
 我雨法雨 充滿世間
 一味之法 隨力修行
 如彼叢林 藥草諸樹
 隨其大小 漸增茂好
 諸佛之法 常以一味
 令諸世間 普得具足
 漸次修行 皆得道果

30 神通に安住して 不退の輪を轉じ
 無量億 百千の衆生を度する
 是の如きの菩薩を 名けて大樹と爲す
 31 佛の平等の説は 一味の雨の如し
 衆生の性に隨ひて 受くる所不同なり
 彼の草木の 稟くる所 各 異なるが如し
 32 佛此の論を以つて 方便して開示し
 種種の言辭をもつて 一法を演說すれども
 佛の智慧に於いては 海の一滴の如し
 33 我法雨を雨して 世間に充滿す
 一味の法を 力に隨ひて修行すること
 彼の叢林 藥草諸樹
 其の大小に隨ひて 漸く茂 好を増すが如し
 34 諸佛の法は 常に一味を以つて
 諸の世間をして 普く具足することを得しめたまふ
 漸次に修行して 皆道果を得

聲聞緣覺 處於山林
 住最後身 聞法得果
 是名藥草 各得增長
 若諸菩薩 智慧堅固
 了達三界 求最上乘
 是名小樹 而得增長
 復有住禪 得神通力
 聞諸法空 心大歡喜
 放無數光 度諸衆生
 是名大樹 而得增長
 如是迦葉 佛所說法
 譬如大雲 以一味雨
 潤於人華 各得成實
 迦葉當知 以諸因緣
 種種譬諭 開示佛道
 是我方便 諸佛亦然

³⁵ 聲聞緣覺の 山林に處し
 最後身に住して 法を聞き得果する
 是を藥草 各增長することを得と名く
³⁶ 若諸の菩薩 智慧堅固にして
 三界を了達し 最上乘を求むる
 是を小樹の 而も增長することを得と名く
³⁷ 復禪に住して 神通力を得
 諸法の空を聞きて 心大いに歡喜し
 無數の光を放ちて 諸の衆生を度すること有る
 是を大樹の 而も增長することを得と名く
³⁸ 是の如く迦葉 佛の所説の法は
 譬へば大雲の 一味の雨を以つて
 人華を潤して 各實を成ずることを得しむるが如し
³⁹ 迦葉當に知るべし 諸の因緣
 種種の譬諭を以つて 佛道を開示す
 是我が方便なり 諸佛も亦然なり

今爲汝等 說最實事
 諸聲聞衆 皆非滅度
 汝等所行 是菩薩道
 漸漸修學 悉當成佛

⁴⁰ 今汝等が爲に 最實事を説く
 諸の聲聞衆は 皆滅度せるに非ず
 汝等が所行は 是菩薩道なり
 漸漸に修學して 悉く當に成佛すべし

妙法蓮華經授記品第六

爾時世尊。說是偈已。告諸大眾。唱如是言。我此弟子。摩訶迦葉。於未來世。當得奉覲。三百萬億。諸佛世尊。供養恭敬。尊重讚歎。廣宣諸佛。無量大法。於最後身。得成爲佛。名曰光明如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。國名光德。劫名大莊嚴。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。國界嚴飾。無諸穢惡。瓦礫荆棘。便利不淨。其土平正。無有高下。坑坎堆阜。瑠璃爲地。寶樹行列。黃金爲繩。以界道側。散諸寶華。周徧清淨。其國菩薩。無量千億。諸聲聞衆。亦復無數。無有

妙法蓮華經授記品第六

爾の時に世尊、是の偈を説き已りて、諸の大眾に告げて、是の如き言を唱へたまはく、我が此の弟子摩訶迦葉は、未來世に於いて、當に三百萬億の諸佛世尊を奉覲して、供養恭敬し、尊重讚歎して、廣く諸佛無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於いて、佛に成爲ることを得ん。名をば光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。國をば光德と名け、劫をば大莊嚴と名けん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。國界嚴飾して、諸の穢惡、瓦礫、荆棘、便利の不淨無く、其の土平正にして、高下、坑坎、堆阜有ること無けん。瑠璃を地と爲して、寶樹行列し、黄金を繩と爲して、以つて道の側を界ひ、諸の寶華を散じて、周徧して清淨ならん。其の國の菩薩、無量千億にして、諸の聲聞衆亦復無數ならん。魔事有ること無けん。

魔事。雖有魔及魔民。皆護佛法。爾時世尊欲重宣此義而說偈言

告諸比丘 我以佛眼
見是迦葉 於未來世
過無數劫 當得作佛
而於來世 供養奉覲
三百萬億 諸佛世尊
爲佛智慧 淨修梵行
供養最上 二足尊已
修習一切 無上之慧
於最後身 得成爲佛
其土清淨 瑠璃爲地
多諸寶樹 行列道側
金繩界道 見者歡喜
常出好香 散衆名華

魔及び魔民有りと雖も、皆佛法を護らん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘に告ぐ 我佛眼を以つて
是の迦葉を見るに 未來世に於いて
無數劫を過ぎて 當に作佛することを得べし
而も來世に於いて 三百萬億の
諸佛世尊を 供養し奉覲して
佛の智慧を爲つて 淨く梵行を修し
最上 二足尊を供養し已りて
一切の 無上の慧を修習し
最後身に於いて 佛に成爲ることを得ん
其の土清淨にして 瑠璃を地と爲し
諸の寶樹多くして 道側に行列し
金繩道を界ひて 見る者歡喜せん
常に好香を出し 衆の名華を散じて

種種奇妙 以爲莊嚴
其地平正 無有丘坑
諸菩薩衆 不可稱計
其心調柔 速大神通
奉持諸佛 大乘經典
諸聲聞衆 無漏後身
法王之子 亦不可計
乃以天眼 不能數知
其佛當壽 十二小劫
正法住世 二十小劫
像法亦住 二十小劫
光明世尊 其事如是
爾時大目犍連。須菩提。摩訶迦旃延等。皆悉悚慄。一心合掌。瞻仰世尊。目不暫捨。即共同聲。而說偈言
大雄猛世尊 諸釋之法王

種種の奇妙なる 以つて莊嚴と爲し
其の地平正にして 丘坑有ること無けん
諸の菩薩衆 稱計すべからず
其の心調柔にして 大神通に速り
諸佛の 大乘經典を奉持せん
7 諸の聲聞衆の 無漏の後身にして
法王の子なる 亦計るべからず
乃ち天眼を以つても 數へ知ること能はじ
其の佛は當に壽 十二小劫なるべし
正法世に住すること 二十小劫
像法亦住すること 二十小劫ならん
光明世尊 其の事はの如し
3 爾の時に大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延等、皆悉く悚慄して、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、目暫くも捨てず。即ち共に聲を同じうして 偈を説きて言さく、
大雄猛世尊 諸釋之法王

哀愍我等故 而賜佛音聲
 若知我深心 見爲授記者
 如以甘露灑 除熱得清涼
 如從飢國來 忽遇大王饌
 心猶懷疑懼 未敢即便食
 若復得王教 然後乃敢食
 我等亦如是 每惟小乘過
 不知當云何 得佛無上慧
 雖聞佛音聲 言我等作佛
 心尙懷憂懼 如未敢便食
 若蒙佛授記 爾久快安樂
 大雄猛世尊 常欲安世間
 願賜我等記 如飢須教食

爾時世尊。知諸大弟子。心之所念。告諸比丘。是須菩提。於當來世。奉觀三百萬億。那由他佛。供養恭敬。尊重讚歎。常修梵行。

我等を哀愍したまふが故に 而も佛の音聲を賜へ
 若我が深心を知しめして 授記することを爲らるれば
 甘露を以つて灑ぐに 熱を除いて清涼を得るが如くならん
 飢ゑたる國より來りて 忽ちに大王の饌に遇へらんが如く
 心猶疑懼を懷きて 未だ敢へて即便食せず
 若復王の教を得ては 然して後に乃ち敢へて食せんが如く
 我等も亦是の如し 毎に小乗の過を惟ひて
 當に云何して 佛の無上慧を得べきかを知らず
 佛の音聲の 我等作佛せんと云ふことを聞くと雖も
 心尙憂懼を懷くこと 未だ敢へて便ち食せざるが如し
 若佛の授記を蒙りなば 爾乃快く安樂ならん
 大雄猛世尊 常に世間を安んぜんを欲す
 願はくば我等に記を賜へ 飢に教を須つて食するが如くならん

四 爾の時に世尊、諸の大弟子の、心之所念を知しめして、諸の比丘に告げたまはく。是の須菩提は、當來世に於いて、三百萬億那由他佛を奉觀して、供養恭敬し、尊重讚歎し、常に梵行を

具菩薩道。於最後身。得成爲佛。號曰名相如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。劫名有寶。國名寶生。其土平正。頗梨爲地。寶樹莊嚴。無諸丘坑。沙磧荆棘。便利之穢。寶華覆地。周徧清淨。其土人民。皆處寶臺。珍妙樓閣。聲聞弟子。無量無邊。算數譬論。所不能知。諸菩薩衆。無數千萬億。那由他。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。其佛常處虛空。爲衆說法。度脫。無量菩薩。及聲聞衆。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

諸比丘衆 今告汝等
 皆當一心 聽我所說
 我大弟子 須菩提者

修し、菩薩の道を具して、最後身に於いて、佛と成爲ることを得ん。號をば名相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫を有寶と名け、國をば寶生と名けん。其の土平正にして、頗梨を地と爲し、寶樹莊嚴して、諸の丘坑、沙磧、荆棘、便利の穢無く、寶華地に覆ひ、周徧して清淨ならん。其の土の人民、皆寶臺、珍妙の樓閣に處せん。聲聞の弟子、無量無邊にして、算數譬論の知ること能はざる所ならん。諸の菩薩衆、無數千萬億那由他ならん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。其の佛常に虚空に處して、衆の爲に法を説きて、無量の菩薩、及び聲聞衆を度脱せん。

五 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘衆 今汝等に告ぐ
 皆當に一心に 我が所説を聽くべし
 我が大弟子 須菩提は

當得作佛	號曰名相
當供無數	萬億諸佛
隨佛所行	漸具大道
最後身得	三十二相
端正殊妙	猶如寶山
其佛國土	嚴淨第一
衆生見者	無不愛樂
佛於其中	度無量衆
其佛法中	多諸菩薩
皆悉利根	轉不退輪
彼國常以	菩薩莊嚴
諸聲聞衆	不可稱數
皆得三明	具六神通
住八解脫	有大威德
其佛說法	現於無量
神通變化	不可思議

當に作佛することを得べし 號をば名相と曰はん
 當に無數 萬億の諸佛を供して
 佛の所行に隨ひて 漸く大道を具すべし
 最後身に 三十二相を得て
 端正殊妙なること 猶寶山の如くならん
 其の佛の國土 嚴淨第一にして
 衆生の見ん者 愛樂せずといふこと無けん
 佛其の中に於いて 無量の衆を度せん
 其の佛の法の中には 諸の菩薩多く
 皆悉く利根にして 不退輪を轉せん
 彼の國は常に 菩薩を以つて莊嚴せり
 諸の聲聞衆も 稱數すべからず
 皆三明を得 六神通を具し
 八解脫に住して 大威徳有らん
 其の佛の說法には 無量の神通
 變化を現すること 不可思議ならん

諸天人民 數如恆沙
 皆共合掌 聽受佛語
 其佛當壽 十二小劫
 正法住世 二十小劫
 像法亦住 二十小劫
 爾時世尊復告諸比丘衆。我今語汝。是大迦旃延。於當來世。以諸供具。供養奉事。八千億佛。恭敬尊重。諸佛滅後。各起塔廟。高千由旬。縱廣正等。五百由旬。以金銀。瑠璃。磔磔。碼碯。眞珠。玫瑰。七寶合成。衆華瓔珞。塗香。抹香。燒香。繪蓋。幢幡。供養塔廟。過是已後。當復供養。二萬億佛。亦復如是。供養是諸佛已。具菩薩道。當得作佛。號曰閻浮那提金光如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其土平正。頗黎爲地。寶

諸天人民 數恒沙の如く
 皆共に合掌して 佛語を聽受せん
 其の佛は當に壽 十二小劫なるべし
 正法世に住すること 二十小劫
 像法亦住すること 二十小劫ならん
 爾の時に世尊復 諸の比丘衆に告げたまはく。我今汝に語る。是の大迦旃延は、當來世に於いて、諸の供具を以つて八千億の佛に供養奉事して、恭敬尊重せん。諸佛の滅後に、各塔廟を起てん。高さ千由旬、縱廣正等にして、五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、磔磔、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶を以つて合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繪蓋、幢幡を塔廟に供養せん。是を過ぎて已後、當に復二萬億の佛を供養すること、亦復是の如くすべし。是の諸佛を供養し已りて、菩薩道を具して、當に作佛することを得べし。號をば閻浮那提金光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴し、黄金を繩と爲して、以つて道の側

樹莊嚴。黃金爲繩。以界道側。妙華覆地。周徧清淨。見者歡喜。無四惡道。地獄。餓鬼。畜生。阿脩羅道。多有天人。諸聲聞衆。及諸菩薩。無量萬億。莊嚴其國。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

諸比丘衆 皆一心聽
如我所說 眞實無異
是迦旃延 當以種種
妙好供具 供養諸佛
諸佛滅後 起七寶塔
亦以華香 供養舍利
其最後身 得佛智慧
成等正覺 國土清淨
度脫無量 萬億衆生

を界ひ、妙華地に覆ひ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。四惡道の地獄、餓鬼、畜生、阿脩羅道無く、多く天人有らん。諸聲聞衆、及び諸の菩薩、無量萬億にして、其の國を莊嚴せん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘衆 皆一心に聽け
我が所説の如きは 眞實にして異なること無し
是の迦旃延は 當に種種の
妙好の供具を以つて 諸佛を供養すべし
諸佛の滅後に 七寶の塔を起て
亦華香を以つて 舍利を供養し
其の最後身に 佛の智慧を得て
等正覺を成じ 國土清淨にして
無量 萬億の衆生を度脱し

皆爲十方 之所供養
佛之光明 無能勝者
其佛號曰 閻浮金光
菩薩聲聞 斷一切有
無量無數 莊嚴其國
爾時世尊。復告大衆。我今語汝。是大目犍連。當以種種供具。供養八千諸佛。恭敬尊重。諸佛滅後。各起塔廟。高千由旬。縱廣正等。五百由旬。以金。銀。瑠璃。磤磈。碼磤。眞珠。玫瑰。七寶合成。衆華瓔珞。塗香。抹香。燒香。繪蓋幢幡。以用供養。過是已後。當復供養。二百萬億諸佛。亦復如是。當得成佛。號曰多摩羅跋栴檀香如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。劫名喜滿。國名意樂。其土平正。頗黎爲地。寶樹莊

皆十方に 供養せらるることを爲ん
佛の光明 能く勝る者無けん
其の佛の號をば 閻浮金光と曰はん
菩薩聲聞 一切の有を斷ぜり
無量無數にして 其の國を莊嚴せん
爾の時に世尊、復大衆に告げたまはく。我今汝に語る、是の大目犍連は、當に種種の供具を以つて、八千の諸佛を供養し、恭敬尊重したてまつるべし。諸佛の滅後、各塔廟を起て、高千由旬、縱廣正等にして、五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、磤磈、碼磤、眞珠、玫瑰の七寶を以つて合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繪蓋、幢幡を以用つて供養せん。是を過ぎて已後、當に復、二百萬億の諸佛を供養すること、亦復是の如くすべし。當に成佛することを得べし。號をば多摩羅跋栴檀香如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫をば喜滿と名け、國をば意樂と名けん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴し、眞珠華を

嚴。散眞珠華。周徧清淨。見者歡喜。多諸天人。菩薩聲聞。其數無量。佛壽二十四小劫。正法住世。四十小劫。像法亦住。四十小劫。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

我此弟子 大目犍連
捨是身已 得見八千
二百萬億 諸佛世尊
爲佛道故 供養恭敬
於諸佛所 常修梵行
於無量劫 奉持佛法
諸佛滅後 起七寶塔
長表舍利 華香伎樂
而以供養 諸佛塔廟
漸漸具足 菩薩道已
於意樂國 而得作佛

散じ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。諸の天人、人、菩薩、聲聞、其の數無量ならん。佛の壽は二十四小劫、正法世に住すること四十小劫、像法亦住すること四十小劫ならん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我が此の弟子 大目犍連は
是の身を捨て已りて 八千
二百萬億の 諸佛世尊を見たてまつることを得て
佛道の爲の故に 供養恭敬し
諸佛の所に於いて 常に梵行を修し
無量劫に於いて 佛法を奉持せん
諸佛の滅後に 七寶の塔を起して
長く舍利を表し 華香伎樂をもつて
而も以つて 諸佛の塔廟に供養す
漸漸に 菩薩の道を具足し已りて
意樂國に於いて 作佛することを得て

號多摩羅 栴檀之香
其佛壽命 二十四劫
常爲天人 演說佛道
聲聞無量 如恆河沙
三明六通 有大威德
菩薩無數 志固精進
於佛智慧 皆不退轉
佛滅度後 正法當住
四十小劫 像法亦爾
我諸弟子 威德具足
其數五百 皆當授記
於未來世 咸得成佛
我及汝等 宿世因緣
吾今當說 汝等善聽

多摩羅 栴檀の香と號けん
其の佛の壽命は 二十四劫ならん
常に天人の爲に 佛道を演說せん
聲聞無量にして 恆河沙の如く
三明六通ありて 大威徳有らん
菩薩無數にして 志固く精進し
佛の智慧に於いて 皆退轉せじ
佛滅度の後 正法當に住すること
四十小劫なるべし 像法亦爾なり
我が 諸の弟子の 威徳具足せる
其の數五百なるも 皆當に授記すべし
未來世に於いて 咸く成佛することを得ん
我及び汝等が 宿世の因縁
吾今當に説くべし 汝等善く聽け

妙法蓮華經化城諭品第七

佛告諸比丘。乃往過去。無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。爾時有佛。名大通智勝如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。其國名好成。劫名大相。諸比丘。彼佛滅度已來。甚大久遠。譬如三千大千世界。所有地種。假使有人。磨以爲墨。過於東方千國土。乃下一點。大如微塵。又過千國土。復下一點。如是展轉。盡地種墨。於汝等意云何。是諸國土。若算師。若算師弟子。能得邊際。知其數不。不也。世尊。諸比丘。是人所經國土。若點不點。盡抹爲塵。一塵一劫。彼佛滅度已來。復

妙法蓮華經化城諭品第七

佛。諸の比丘に告げたまはく、乃往過去、無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾の時に佛有しき。大通智勝如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名く。其の國をば好成と名け、劫をば大相と名けき。諸の比丘、彼の佛の滅度より已來、甚だ大いに久遠なり。譬へば三千大千世界の所有の地種、假使人有りて、磨りて以つて墨と爲し、東方千の國土を過ぎて、乃ち一點を下さん。大いさ微塵の如し。又千の國土を過ぎて、復一點を下さん。是の如く展轉して地種の墨を盡さんが如き、汝等が意に於いて云何。是の諸の國土をば、若し算師、若し算師の弟子、能く邊際を得て、其の數を知らんや不や。不なり、世尊。諸の比丘、是の人の經る所の國土の、若し點せると點せざるとを、盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫とせん。彼の佛の滅度より已來、復是の數に過ぎたること、無量無邊百千萬億阿僧祇劫

過是數。無量無邊。百千萬億。阿僧祇劫。我以如來。知見力故。觀彼久遠。猶如今日。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世	無量無邊劫
有佛兩足尊	名大通智勝
如人以力磨	三千大千土
盡此諸地種	皆悉以爲墨
過於千國土	乃下一塵點
如是展轉點	盡此諸塵墨
如是諸國土	點與不點等
復盡抹爲塵	一塵爲一劫
此諸微塵數	其劫復過是
彼佛滅度來	如是無量劫
如來無礙智	知彼佛滅度
及聲聞菩薩	如見今滅度

なり。我如來の知見力を以つての故に、彼の久遠を観ること、猶今日の若し。

爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我過去世の 無量無邊劫を念ふに
 佛兩足尊有しき 大通智勝と名く
 如人力を以つて 三千大千の土を磨りて
 此の諸の地種を盡し 皆悉く以つて墨と爲して
 千の國土を過ぎて 乃ち一の塵點を下さん
 是の如く展轉し點して 此の諸の塵墨を盡さん
 是の如きの諸の國土の 點せると點せざると等を
 復盡く抹して塵と爲して 一塵を一劫と爲ん
 此の諸の微塵の數に 其の劫復是に過ぎたり
 彼の佛の滅度より來 是の如く無量劫なり
 如來の無礙智 彼の佛の滅度
 及び聲聞菩薩を知る事 今の滅度を見るが如し

諸比丘當知 佛智淨微妙

無漏無所礙 通達無量劫

佛告諸比丘。大通智勝佛。壽五百四十萬億。那由他劫。其佛本坐道場。破魔軍已。垂得阿耨多羅三藐三菩提。而諸佛法。不現在前。如是一小劫。乃至十小劫。結跏趺坐。身心不動。而諸佛法。猶不在前。爾時初利諸天。先爲彼佛。於菩提樹下。敷師子座。高一由旬。佛於此座。當得阿耨多羅三藐三菩提。適坐此座。時諸梵天王。雨衆天華。面百由旬。香風時來。吹去萎華。更雨新者。如是不絕。滿十小劫。供養於佛。乃至滅度。常雨此華。四王諸天。爲供養佛。常擊天鼓。其餘諸天。作天伎樂。滿十小劫。至于滅度。亦復如是。諸比丘。大通智勝佛。過十小劫。諸佛之法。乃現在前。成阿耨多羅三藐三菩提。

諸の比丘當に知るべし 佛智は淨くして微妙に 無漏無所礙にして 無量劫を通達す

佛、諸の比丘に告げたまはく、大通智勝佛は、壽五百四十萬億那由他劫なり。其の佛本、道場に坐して、魔軍を破し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまはんするに、而も諸佛の法、現在前せず。是の如く一小劫、乃至十小劫、結跏趺坐して、身心動じたまはず。而も諸佛の法、猶在前せざりき。爾の時に初利の諸天、先より彼の佛の爲に、菩提樹下に於いて、師子の座を敷けり。高さ一由旬。佛此の座に於いて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべしと。適めて此の座に坐したまふ。時に諸の梵天王、衆の天華を雨すこと、面ごとに百由旬なり。香しき風、時に來りて萎華を吹き去りて、更に新しき者を雨す。是の如く絶えず。十小劫を満てて佛を供養す。乃至滅度まで、常に此の華を雨しき。四王の諸天、佛を供養せんが爲、常に天鼓を撃つ。其餘の諸天、天の伎樂を作すこと、十小劫を満つ。滅度に至るまで、亦復是の如し。諸の比丘、大通智勝佛、十小劫を過ぎて、諸佛の法乃し現在前

其佛未出家時。有十六子。其第一者。名曰智積。諸子各有種種珍異。玩好之具。聞父得成。阿耨多羅三藐三菩提。皆捨所珍。往詣佛所。諸母涕泣。而隨送之。其祖轉輪聖王。與一百大臣。及餘百千萬億人民。皆共圍繞。隨至道場。咸欲親近。大通智勝如來。供養恭敬。尊重讚歎。到已頭面禮足。繞佛畢已。一心合掌。瞻仰世尊。以偈頌曰

大威德世尊 爲度衆生故
於無量億歲 爾乃得成佛
諸願已具足 善哉吉無上
世尊甚希有 一坐十小劫
身體及手足 靜然安不動
其心常憺怕 未曾有散亂
究竟永寂滅 安住無漏法

して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひき。其の佛、未だ出家したまはざりし時に、十六の子有り。其の第一をば名を智積と曰ふ。諸子、各種種の珍異玩好の具有り。11父、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまふと聞きて、皆所珍を捨てて佛所に往詣す。諸母、涕泣して、隨ひて之を送る。12其の祖轉輪聖王、一百の大臣、及び餘の百千萬億の人民と、皆共に圍繞して、隨ひて道場にいたり、咸く大通智勝如來に親近して、供養恭敬、尊重、讚歎したてまつらんと欲す。13到り已りて、頭面に足を禮し、佛を繞り畢りて、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、偈を以つて頌して曰さく、

大威德世尊 衆生を度せんが爲の故に
無量億歲に於いて 爾して乃し成佛することを得
諸願已に具足したまへり 善い哉吉無上なり
世尊は甚だ希有なり 一たび坐して十小劫
身體及び手足 靜然として安んじて動ぜず
其の心常に憺怕にして 未だ曾て散亂有らず
究竟して永く寂滅し 無漏の法に安住したまへり

今者見世尊 安穩成佛道
我等得善利 稱慶大歡喜
衆生常苦惱 盲冥無導師
不識苦盡道 不知求解脫
長夜增惡趣 滅損諸天衆
從冥入於冥 永不聞佛名
今佛得最上 安穩無漏法
我等及天人 爲得最大利
是故咸稽首 歸命無上尊

爾時十六王子。偈讚佛已。勸請世尊。轉於法輪。咸作是言。世尊說法。多所安穩。憐愍愍益。諸天人民。重說偈言

世雄無等倫 百福自莊嚴
得無上智慧 願爲世間說
度脫於我等 及諸衆生類

17今者世尊の 安穩に佛道を成じたまふを見て
我等善利を得 稱慶して大いに歡喜す
18衆生は常に苦惱し 盲冥にして導師無し
苦盡の道を識らず 解脫を求むることを知らずして
長夜に惡趣を増し 諸の天衆を滅損す
冥きより冥きに入りて 永く佛の名を聞かず
19今佛最上 安穩無漏の法を得たまへり
我等及び天人 爲最大利を得たり
是の故に咸く稽首して 無上尊を歸命したてまつる
20爾の時に十六の王子、偈をもつて佛を讚め已りて、世尊に法輪を轉じたまへと勸請しき。咸く是の言を作さく、世尊、法を説きたまへ。安穩ならしむる所多からん。諸天人民を憐愍し、憐愍したまへ
22重ねて偈を説きて言さく、
世雄は等倫無し 百福をもつて自ら莊嚴し
無上の智慧を得たまへり 願はくば世間の爲に説きて
我等 及び諸の衆生の類を度脱し

爲分別顯示 令得是智慧
 若我等得佛 衆生亦復然
 世尊知衆生 深心之所念
 亦知所行道 又知智慧力
 欲樂及修福 宿命所行業
 世尊悉知已 當轉無上輪
 佛告諸比丘。大通智勝佛。得阿耨多羅三藐三菩提時。十方各五百萬億。諸佛世界。六種震動。其國中。幽冥之處。日月威光。所不能照。而皆大明。其中衆生。各得相見。咸作是言。此中云何。忽生衆生。又其國界。諸天宮殿。乃至梵宮。六種震動。大光普照。徧滿世界。勝諸天光。爾時東方。五百萬億。諸國土中。梵天宮殿。光明照曜。倍於常明。諸梵天王。各作是念。今者宮殿光明。昔所未有。以何因緣。而現此相。

爲に分別顯示して 是の智慧を得しめたまへ
 若我等佛を得ば 衆生も亦復然ならん
 世尊は衆生の 深心の所念を知り
 亦所行の道を知り 又智慧力を知しめせり
 欲樂及び修福 宿命所行業
 世尊悉く知しめし已れり 當に無上輪を轉じたまふべし
 佛、諸の比丘に告ぐたまはく、大通智勝佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひし時、十方各五百萬億の諸佛の世界、六種に震動し、其の國の中、幽冥の處、日月の威光も照すこと能はざる所、皆大いに明かなり。其の中の衆生、各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中云何ぞ、忽ちに衆生を生ぜる。又其の國界の諸天の、宮殿、乃至梵宮まで六種に震動し、大光普く照して世界に徧滿し、諸天の光に勝れり。爾の時に、東方五百萬億の、諸の國土の中の梵天の宮殿、光明照曜して、常の明に倍れり。諸の梵天王、各是の念を作さく、今者宮殿の光明、昔より未だ有らざる所なり。何の因緣を以つて、此の相を現する。

是時諸梵天王。即各相詣。共議此事。而彼衆中。有一大梵天王。名救一切。爲諸梵衆。而說偈言

我等諸宮殿 光明昔未有
 此是何因緣 宜各共求之
 爲大德天生 爲佛出世間
 而此大光明 徧照於十方

爾時。五百萬億國土。諸梵天王。與宮殿俱。各以衣祴。盛諸天華。共詣西方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。即時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝。即以天華。而散佛上。其所散華。如須彌山。并以供養。佛菩提樹。其菩提樹。高十由旬。華供養已。各以宮殿。奉上彼佛。

6 是の時に諸の梵天王、即ち各相詣いて、共に此の事を議す。
 7 而して彼の衆の中に、一りの大梵天王有り。救一切と名く。
 8 諸の梵衆の爲に、而も偈を説きて言はん。
 9 我等が諸の宮殿 光明昔より未だ有らす
 10 此は何の因緣ぞ 宜しく各共に之を求むべし
 11 爲大徳の天の生ぜるや 爲佛の世間に出でたまへるや
 12 而も此の大光明 徧く十方を照す
 13 爾の時に五百萬億の、國土の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴を以つて、諸の天華を盛りて、共に西方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬し圍繞せるを見、及び十六王子の、佛に轉法輪を請するを見る。
 14 即時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千匝して、即ち天華を以つて、佛の上に散す。其所散の華、須彌山の如し。
 15 並びに以つて、佛の菩提樹に供養す。其の菩提樹、高さ十由旬なり。
 16 華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して、

而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納處。時諸梵天王。即於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

世尊甚希有 難可得值遇
具無量功德 能救護一切
天人之大師 哀愍於世間
十方諸衆生 普皆蒙饒益
我等所從來 五百萬億國
捨深禪定樂 爲供養佛故
我等先世福 宮殿甚嚴飾
今以奉世尊 唯願哀納受
爾時。諸梵天王。偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。轉於法輪。度脫衆生。開涅槃道。時諸梵天王。一心同聲。而說偈言。

世雄兩足尊 唯願演說法

是の言を作さく。唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。14 時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく、
15 世尊は甚だ希有にして、値遇するを得べきこと難し
無量の功德を具して、能く一切を救護し
天人の大師として、世間を哀愍したまふ
16 十分の諸の衆生、普く皆饒益を蒙る
我等が從來せる所は、五百萬億の國なり
深禪定の樂を捨てたることは、佛を供養せんが爲の故なり
17 我等先世の福ありて、宮殿甚だ嚴飾せり
今以つて世尊に奉る、唯願はくば哀みて納受したまへ
18 爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各是の言を作さく。唯願はくば世尊、法輪を轉じて衆生を度脱し、涅槃の道を開きたまへ。19 時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を説きて言さく。
世雄兩足尊 唯願はくば法を演説し

以大慈悲力 度苦惱衆生

爾時大通智勝如來。默然許之。文諸比丘。東南方。五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照耀。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。即各相詣。共議此事。時彼衆中。有一大梵天王。名曰大悲。爲諸梵衆。而說偈言。

是事何因緣 而現如此相
我等諸宮殿 光明昔未有
爲大德天生 爲佛出世間
未曾見此相 當共一心求
過千萬億土 尋光共推之
多是佛出世 度脫苦衆生
爾時。五百萬億。諸梵天王。與宮殿俱。各以衣祴。盛諸天華。共詣西北方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師

大慈悲の力を以つて、苦惱の衆生を度したまへ
20 爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したまふ。21 又諸の比丘、東南方の五百萬億の國土の、諸の大梵王、各自ら、宮殿の光明照耀して、昔より未だ有らざる所なるを見て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣いて、共に此の事を議す。
22 時に彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名けて大悲と曰ふ。
23 諸の梵衆の爲に、偈を説きて言はく、
是の事何の因緣ぞ、此の如き相を現する
我等が諸の宮殿の、光明昔より未だ有らず
24 爲大德の天の生ぜるや、爲佛の世間に出でたまへるや
未だ曾て此の相を見ず、當に共に一心に求むべし
25 千萬億の土を過ぐとも、光を尋ねて共に之を推せん
多くは是佛の世に出でて、苦の衆生を度脱したまふならん
26 爾の時に、五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴を以つて、諸の天華を盛りて、共に西北方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、

子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千帀。即以天華。而散佛上。所散之華。如須彌山。并以供養。佛菩提樹。華供養已。各以宮殿。奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納處。爾時諸梵天王。即於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

聖主天中天 迦陵頻伽聲
 哀愍衆生者 我等今敬禮
 世尊甚希有 久遠乃一現
 一百八十劫 空過無有佛
 三惡道充滿 諸天衆減少
 今佛出於世 爲衆生作眼
 世間所歸趣 救護於一切
 爲衆生之父 哀愍饒益者

諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬、圍繞せるを見、及び十六王子の、佛に轉法輪を請するを見る。27 時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千帀して、即ち天華を以つて、佛の上に散す。所散の華、須彌山の如し。并びに以つて、佛の菩提樹に供養す。28 華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して是の言を作さく。唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。29 爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於いて、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく、

聖主天中天 迦陵頻伽の聲にして
 衆生を哀愍したまふ者 我等今敬禮したてまつる
 31 世尊は甚だ希有にして 久遠に乃し一たび現じたまふ
 100 劫 空しく過ぎて佛有すこと無し
 32 三惡道充滿し 諸天衆減少せり
 今佛世に出でて 衆生の爲に眼と作り
 世間の歸趣する所として 一切を救護し
 衆生の父と爲りて 哀愍し饒益したまふ者なり

我等宿福慶 今得值世尊
 爾時。諸梵天王。偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。哀愍一切。轉於法輪。度脫衆生。時諸梵天王。一心同聲。而說偈言。

大聖轉法輪 顯示諸法相
 度苦惱衆生 令得大歡喜
 衆生聞此法 得道若生天
 諸惡道減少 忍善者增益

爾時。大通智勝如來。默然許之。又諸比丘。南方五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照耀。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。即各相詣。共議此事。以何因緣。我等宮殿。有此光曜。而彼衆中。有一大梵天王。名曰妙法。爲諸梵衆。而說偈言。

我等諸宮殿 光明甚威曜

われら宿福の慶ありて 今世尊に値ひたてまつることを得たり
 33 爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各是の言を作さく。唯願はくば世尊、一切を哀愍して、法輪を轉じ、衆生を度脱したまへ。34 時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を説きて言さく、

35 大聖法輪を轉じて 諸法の相を顯示し
 苦惱の衆生を度して 大歡喜を得しめたまへ
 36 衆生此の法を聞かば 道を得若は天に生じ
 諸の惡道減少し 忍善の者増益せん

37 爾の時に大通智勝如來、默然として之を許したまふ。38 又諸の比丘、南方五百萬億の國土、諸の大梵王、各自ら、宮殿の光明照耀して、昔より未だ有らざる所なるを見て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣いて、共に此の事を議す。39 何の因縁を以つて、我等が宮殿、此の光曜有る。40 而も彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名けて妙法と曰ふ。41 諸の梵衆の爲に、偈を説きて言はく。我等が諸の宮殿 光明甚威曜せり

此非無因緣 是相宜求之
 過於百千劫 未曾見是相
 爲大德天生 爲佛出世間

爾時五百萬億諸梵天王 與宮殿俱 各以衣祴 盛諸天華 共詣北方 推尋是相 見大通智勝如來 處于道場 菩提樹下 坐師子座 諸天 龍王 乾闥婆 緊那羅 摩睺羅伽 人非人等 恭敬圍繞 及見十六王子 請佛轉法輪 時諸梵天王 頭面禮佛 繞百千匝 即以天華 而散佛上 所散之華 如須彌山 并以供養 佛菩提樹 華供養已 各以宮殿 奉上彼佛 而作是言 唯見哀愍 饒益我等 所獻宮殿 願垂納處 爾時諸梵天王 卽於佛前 一心同聲 以偈頌曰

世尊甚難見 破諸煩惱者
 過百三十劫 今乃得一見

此因緣無きに非じ 是の相宜しく之を求むべし
 百千劫を過ぐれども 未だ曾て是の相を見ず
 爲大徳の天生るや 爲佛の世間に出でたまへるや

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴を以つて、諸の天華を盛りて、共に北方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如來の、道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬圍繞せるを見、及び十六王子の、佛に轉法輪を請するを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千匝して、卽ち天華を以つて、佛の上上に散す。所散の華、須彌山の如し。并びに以つて、佛の菩提樹に供養す。華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉上して、是の言を作さく。唯、我等を哀愍し饒益せられて、所獻の宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。爾の時に諸の梵天王、卽ち佛前に於いて、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく。

世尊は甚だ見たてまつり難し 諸の煩惱を破したまへる者なり
 百三十劫を過ぎて 今乃ち一たび見たてまつることを得

諸飢渴衆生 以法雨充滿
 昔所未曾觀 無量智慧者
 如優曇波羅 今日乃值遇
 我等諸宮殿 蒙光故嚴飾
 世尊大慈悲 唯願垂納受

爾時諸梵天王 偈讚佛已 各作是言 唯願世尊 轉於法輪 令一切世間 諸天 魔 梵 沙門 婆羅門 皆獲安穩 而得度脫 時諸梵天王 一心同聲 以偈頌曰

唯願天人尊 轉無上法輪
 擊于大法鼓 而吹大法唄
 普雨大法雨 度無量衆生
 我等咸歸請 當演深遠音

爾時大通智勝如來 默然許之 西南方 乃至下方 亦復如是 爾時上方 五百萬億國

諸の飢渴の衆生に 法雨を以つて充滿したまふ
 昔より未だ曾て觀ざる所の 無量の智慧者なり
 優曇波羅の如くにして 今日乃ち值遇したてまつる

我等諸の宮殿 光を蒙るが故に嚴飾せり
 世尊大慈悲をもつて 唯願はくば納受を垂れたまへ

爾の時に 諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、各是の言を作さく。唯願はくば世尊、法輪を轉じて一切世間の諸天、魔、梵、沙門、婆羅門をして、皆安穩なることを獲、而も度脱することを得しめたまへと。時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく、

唯願はくば天人尊 無上の法輪を轉じ
 大法の鼓を撃ち 大法の唄を吹き
 普く大法の雨を雨して 無量の衆生を度したまへ
 我等 咸く歸請したてまつる 當に深遠の音を演べたまふべし

爾の時に大通智勝如來、默然として、之を許したまふ。西南方、乃至、下方も亦復是の如し。爾の時に上方、五百萬億の國土の、

土。諸大梵王。皆悉自觀。所止宮殿。光明
威曜。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。即各
相詣。共議此事。以何因緣。我等宮殿。有斯
光明。而彼衆中。有一大梵天王。名曰尸
棄。爲諸梵衆。而說偈言。

今以何因緣 我等諸宮殿

威德光明曜 嚴飾未曾有

如是之妙相 昔所未聞見

爲大德天生 爲佛出世間

爾時。五百萬億。諸梵天王。與宮殿俱。各以
衣祴。盛諸天華。共詣下方。推尋是相。見大
通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子
座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。
人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛
轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千由
卽以天華。而散佛上。所散之華。如須彌山。

諸の大梵王、皆悉く、自ら所止の宮殿の、光明威曜して、昔
より未だ有らざる所なるを觀て、歡喜踊躍し、希有の心を生じて、
即ち各相詣いて、共に此の事を議す。何の因縁を以つて、我等
が宮殿に、斯の光明有る。而して彼の衆の中に、一りの大梵天王
あり、名けて尸棄と曰ふ。諸の梵衆の爲に、偈を説きて言さく。

今何の因縁を以つて 我等が諸の宮殿

威德光明曜き 嚴飾せること未曾有なる

是の如きの妙相は 昔より未だ聞見せざる所なり

爲大德の天の生ぜるや 爲佛の世間に出でたまへるや

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣祴を以つて、
諸の天華を盛りて、共に下方に詣いて是の相を推尋するに、大
通智勝如來の道場、菩提樹下に處し、師子の座に坐して、諸天、
龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、恭敬圍繞するを
見、及び十六王子の、佛に轉法輪を請するを見る。時に諸の梵天
王、頭面に佛を禮し、繞ること百千由して、即ち天華を以つて、
佛の上に散す。所散の華、須彌山の如し。并びに以つて、佛の菩

并以供養。佛菩提樹。華供養已。各以宮殿。
奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。
所獻宮殿。願垂納處。時諸梵天王。卽於佛
前。一心同聲。以偈頌曰。

善哉見諸佛 救世之聖尊

能於三界獄 勉出諸衆生

普智天人尊 愍哀羣萌類

能開甘露門 廣度於一切

於昔無量劫 空過無有佛

世尊未出時 十方常闇暝

三惡道增長 阿脩羅亦盛

諸天衆轉滅 死多墮惡道

不從佛聞法 常行不善事

色力及智慧 斯等皆減少

罪業因緣故 失樂及樂想

住於邪見法 不識善儀則

提樹に供養す。華の供養已りて、各宮殿を以つて、彼の佛に奉
上して、是の言を作さく。唯我等を哀愍し饒益せられて、所獻の
宮殿、願はくば納處を垂れたまへ。時に諸の梵天王、即ち佛前に
於いて、一心に聲を同じうして、偈を以つて頌して曰さく、

善哉諸佛 救世の聖尊を見たてまつる

能く三界の獄より 諸の衆生を勉出したまふ

普智天人尊 羣萌の類を愍哀して

能く甘露の門を開きて 廣く一切を度したまふ

昔の無量劫に於いて 空しく過ぎて佛有すること無し

世尊未だ出でたまはざりし時は 十方常に闇暝にして

三惡道增長し 阿脩羅亦盛なり

諸天衆轉滅じて 死して多く惡道に墮つ

佛に従ひて法を聞かず 常に不善の事を行じ

色力及び智慧 斯等皆減少す

68 罪業因縁の故に 樂及び樂の想を失ふ

邪見の法に住して 善の儀則を識らず

不蒙佛所化 常墮於惡道
 佛爲世間眼 久遠時乃出
 哀愍諸衆生 故現於世間
 超出成正覺 我等甚欣慶
 及餘一切衆 喜歎未曾有
 我等諸宮殿 蒙光故嚴飾
 今以奉世尊 唯垂哀納受
 願以此功德 普及於一切
 我等與衆生 皆共成佛道

爾時五百萬億諸梵天王。偈讚佛已。各自
 佛言。唯願世尊。轉於法輪。多所安穩。多所
 度脫。時諸梵天王。而說偈言

世尊轉法輪 擊甘露法鼓
 度苦惱衆生 開示涅槃道
 唯願受我請 以大微妙音

佛の所化を蒙らずして 常に惡道に墮つ
 佛は世間の眼と爲りて 久遠に時に乃し出でたまへり
 諸の衆生を哀愍したまふが故に 世間に現じ
 超出して正覺を成じたまへり 我等甚だ欣慶す
 及び餘の一切の衆も 喜びて未曾有なりと歎す
 71 我等が諸の宮殿 光を蒙るが故に嚴飾せり
 今以つて世尊に 奉る 唯哀を垂れて納受したまへ
 72 願はくば此の功德を以つて 普く一切に及して
 我等と衆生と 皆共に佛道を成せん
 73 爾の時に 五百萬億の諸の梵天王、偈をもつて佛を讚め已りて、
 各佛に白して言さく、唯願はくば世尊、法輪を轉じたまへ。安
 穩ならしむる所多く、度脱する所多からん。74 時に諸の梵天王、
 而も偈を説きて言さく、
 世尊法輪を轉じ 甘露の法鼓を撃ちて
 苦惱の衆生を度し 涅槃の道を開示したまへ
 75 唯願はくば我が請を受けて 大微妙の音を以つて

哀愍而敷演 無量劫習法

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王。及
 十六王子請。即時三轉。十二行法輪。若沙
 門。婆羅門。若天。魔。梵。及餘世間。所不能
 轉。謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及
 廣說十二因緣法。無明緣行。行緣識。識
 緣名色。名色緣六入。六入緣觸。觸緣受。
 受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老
 死。憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識
 滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六
 入滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛
 滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生
 滅則老死。憂悲苦惱滅。佛於天人。大衆之
 中。說是法時。六百萬億那由佗人。以不受。
 一切法故。而於諸漏。心得解脫。皆得深妙
 禪定。三明。六通。具八解脫。第二。第三。

哀愍して 無量劫に習へる法を敷演したまへ

五 爾の時に大通智勝如來、十方の諸の梵天王、及び十六王子の請
 を受けて、即時に三たび、十二行の法輪を轉じたまふ。若は沙門、
 婆羅門、若は天、魔、梵、及び餘の世間の轉すること能はざる所な
 り。謂はく、是苦、是苦の集、是苦の滅、是苦滅の道なり。及び廣
 く十二因緣の法を説きたまふ。無明は行に緣たり。行は識に緣
 たり。7 識は名色に緣たり。8 名識は六入に緣たり。9 六入は觸に
 緣たり。10 觸は受到緣たり。11 受は愛に緣たり。12 愛は取に緣たり。
 13 取は有に緣たり。14 有は生に緣たり。15 生は老死、憂悲、苦惱に緣
 たり。16 無明滅すれば、則ち行滅す。17 行滅すれば、則ち識滅す。
 18 識滅すれば、則ち名色滅す。19 名色滅すれば、則ち六入滅す。20 六
 入滅すれば、則ち觸滅す。21 觸滅すれば、則ち受滅す。22 受滅すれば
 則ち愛滅す。23 愛滅すれば、則ち取滅す。24 取滅すれば、則ち有滅
 す。25 有滅すれば、則ち生滅す。26 生滅すれば、則ち老死、憂悲、苦惱
 滅す。27 佛、天人大衆の中に於いて、是の法を説きたまひし時、六百
 萬億那由佗の人、一切の法を受けざるを以つての故に、而も諸漏に

第四。說法時。千萬億恆河沙。那由他等衆生。亦以不受。一切法故。而於諸漏。心得解脫。從是已後。諸聲聞衆。無量無邊。不可稱數。

爾時十六王子。皆以童子出家。而爲沙彌。諸根通利。智慧明了。已曾供養。百千萬億諸佛。淨修梵行。求阿耨多羅三藐三菩提。俱白佛言。世尊。是諸無量千萬億。大德聲聞。皆已成就。世尊。亦當爲我等。說阿耨多羅三藐三菩提法。我等聞已。皆共修學。世尊。我等志願。如來知見。深心所念。佛自證知。爾時轉輪聖王。所將衆中。八萬億人。見十六王子出家。亦求出家。王即聽許。爾時彼佛。受沙彌請。過二萬劫已。乃於四衆之中。說是大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。說是經已。十六沙彌。爲

於て、心解脫を得、皆深妙の禪定、三明、六通を得、八解脫を具しぬ。
第二、第三、第四の説法の時も、千萬億恆河沙那由他等の衆生、亦一切の法を受けざるを以つての故に、而も諸漏に於いて心解脫を得。是より已後諸の聲聞衆、無量無邊にして、稱數すべからず。

爾の時に十六王子、皆童子を以つて、出家して沙彌と爲りぬ。諸根通利にして、智慧明了なり。已に曾て、百千萬億の諸佛を供養し、淨く梵行を修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。俱に佛に白して言さく、世尊、是の諸の無量千萬億の大徳の聲聞は、皆已に成就しぬ。世尊、亦當に我等が爲に、阿耨多羅三藐三菩提の法を説くべし。我等聞き已りて皆共に修學せん。世尊我等如來の知見を志願す。深心の所念は、佛自ら證知したまはん。爾の時に、轉輪聖王の所將の衆の中の八萬億の人、十六王子の出家を見、亦出家を求む。王即ち聽許しき。爾の時に彼の佛沙彌の請を受けて、二萬劫を過ぎ已りて乃ち四衆の中に於いて、是の大乗經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。是の經を説き已りて、十六の沙彌、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、皆

阿耨多羅三藐三菩提故。皆共受持。誦誦通利。說是經時。十六菩薩沙彌。皆悉信受。聲聞衆中。亦有信解。其餘衆生。千萬億種。皆生疑惑。佛說是經。於八千劫。未曾休廢。說此經已。即入靜室。住於禪定。八萬四千劫。

是時十六菩薩沙彌。知佛入室。寂然禪定。各昇法座。亦於八萬四千劫。爲四部衆。廣說分別。妙法華經。一一皆度。六百萬億。那由他。恆河沙等衆生。示教利喜。令發阿耨多羅三藐三菩提心。大通智勝佛。過八萬四千劫已。從三昧起。往詣法座。安詳而坐。普告大衆。是十六菩薩沙彌。甚爲希有。諸根通利。智慧明了。已曾供養。無量千萬億數諸佛。於諸佛所。常修梵行。受持佛智。開示衆生。令入其中。汝等皆當。數數親近。

共に受持し、誦誦し、通利しき。10 是の經を説きたまひし時、十六の菩薩沙彌、皆悉く信受す、聲聞衆の中にも、亦信解する有り。11 其餘の衆生の千萬億種なるは、皆疑惑を生じき。12 佛是の經を説きたふこと、八千劫に於いて、未だ曾て休廢したまはず。13 此の經を説き已りて、即ち靜室に入りて、禪定に住したまふこと八萬四千劫なり。

是の時に十六の菩薩沙彌、佛の室に入りて、寂然として禪定したまふを知りて、各法座に昇りて、亦八萬四千劫に於いて、四部の衆の爲に、廣く妙法蓮華經を説き分別す。一一に皆、六百萬億那由他恆河沙等の衆生を度し、示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。大通智勝佛、八萬四千劫を過ぎ已りて、三昧より起ちて法座に往詣し、安詳として坐して、普く大衆に告げたまはく、是の十六の菩薩沙彌は、甚だ爲希有なり。諸根通利にして智慧明了なり。已に曾て、無量千萬億數の諸佛を供養し、諸佛の所に於いて、常に梵行を修し、佛智を受持し、衆生に開示して、其の中に入らしむ。汝等皆、當に數數親近して、之を供養

而供養之。所以者何。若聲聞。辟支佛。及諸菩薩。能信是十六菩薩。所說經法。受持不毀者。是人皆當得。阿耨多羅三藐三菩提。如來之慧。佛告諸比丘。是十六菩薩。常樂說是妙法蓮華經。一一菩薩。所化六百萬億那由他。恆河沙等衆生。世世所生。與菩薩俱。從其聞法。悉皆信解。以此因緣。得值四萬億諸佛世尊。于今不盡。諸比丘。我今語汝。彼佛弟子。十六沙彌。今皆得阿耨多羅三藐三菩提。於十方國土。現在說法。有無量百千萬億。菩薩聲聞。以為眷屬。其二沙彌。東方作佛。一名阿閼。在歡喜國。二名須彌頂。東南方二佛。一名師子音。二名師子相。南方二佛。一名虛空住。二名常滅。西南方二佛。一名帝相。二名梵相。西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切

すべし。7 所以は何ん。若聲聞、辟支佛、及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の、所説の經法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆、當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし。佛、諸の比丘に告げたまはく、是の十六菩薩は、常に樂ひて、是の妙法蓮華經を説く。9 一一の菩薩の所化の、六百萬億那由他恆河沙等の衆生、世世に生るる所、菩薩と俱にして、其に従ひて法を聞き、悉く皆信解せり。10 此の因縁を以つて、四萬億の諸佛、世尊に値ひたてまつることを得たり。今に盡きず。11 諸の比丘、我今汝に語る。彼の佛の弟子の十六の沙彌、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於いて、現在に法を説きたまふ。無量百千萬億の菩薩、聲聞有りて、以つて眷屬と爲り。12 其の二りの沙彌は、東方にして作佛す。13 一をば阿閼と名け。歡喜國に在す。二をば須彌頂と名く。14 東南方に二佛あり。一をば師子音と名け、二をば師子相と名く。15 南方に二佛あり。一をば虛空住と名け、二をば常滅と名く。16 西南方に二佛あり。一をば帝相と名け、二をば梵相と名く。17 西方に二佛あり。一をば阿彌陀と名け、二をば度一切世間苦

世間苦惱。西北方二佛。一名多摩羅跋梅檀香神通。二名須彌相。北方二佛。一名雲自在。二名雲自在王。東北方佛。名壞一切世間怖畏。第十六我釋迦牟尼佛。於娑婆國土。成阿耨多羅三藐三菩提。諸比丘。我等爲沙彌時。各各教化。無量百千萬億。恆河沙等衆生。從我聞法。爲阿耨多羅三藐三菩提。此諸衆生。于今有住。聲聞地者。我常教化。阿耨多羅三藐三菩提。是諸人等。應以是法。漸入佛道。所以者何。如來智慧。難信難解。爾時所化。無量恆河沙等衆生者。汝等諸比丘。及我滅度後。未來世中。聲聞弟子是也。我滅度後。復有弟子。不聞是經。不知不覺。菩薩所行。自於所得功德。生滅度想。當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。

惱と名く。17 西北方に二佛あり。一をば多摩羅跋梅檀香神通と名け、二をば須彌相と名く。18 北方に二佛あり。一をば雲自在と名け、二をば雲自在王と名く。19 東北方の佛をば、壞一切世間怖畏と名く。20 第十六は、我釋迦牟尼佛なり。娑婆國土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を成せり。21 諸の比丘、我等沙彌爲りし時、各各に、無量百千萬億恆河沙等の衆生を教化せり。我に従ひて法を聞きしは、阿耨多羅三藐三菩提を爲れり。22 此の諸の衆生、今に聲聞地に住せる者有り。我常に阿耨多羅三藐三菩提に教化す。是の諸人等、應に是の法を以つて、漸く佛道に入るべし。23 所以は何ん。如來の智慧は、難信難解なればなり。24 爾の時の所化の、無量恆河沙等の衆生は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の、未來世の中の聲聞の弟子是なり。25 我が滅度の後、復弟子有りて、是の經を聞かず。菩薩の所行を知らず、覺らず。自ら所得の功德に於いて、滅度の想を生じて、當に涅槃に入るべし。26 我餘國に於いて、作佛して、更に異名有らん。是の人滅度の想を生じ、涅槃に入ると雖も、而も彼の土に於いて、佛の智慧を求めて、是の經を聞くこと

是人雖生。滅度之想。入於涅槃。而是彼土。求佛智慧。得聞是經。唯以佛乘。而得滅度。更無餘乘。除諸如來。方便說法。諸比丘。若如來自知。涅槃時到。衆又清淨。信解堅固。了達空法。深入禪定。便集諸菩薩。及聲聞衆。爲說是經。世間無有二乘。而得滅度。唯一佛乘。得滅度耳。比丘當知。如來方便。深入衆生之性。知其志樂小法。深著五欲。爲是等故。說於涅槃。是人若聞。則便信受。譬如五百由旬。險難惡道。曠絕無人。怖畏之處。若有多衆。欲過此道。至珍寶處。有一導師。聰慧明達。善知險道。通塞之相。將導衆人。欲過此難。所將人衆。中路懈退。白導師言。我等疲極。而復怖畏。不能復進。前路猶遠。今欲退還。導師多諸方便。

を得ん。27 唯佛乘を以つて滅度を得。更に餘乘無し。諸の如來の方便の說法をば除く。28 諸の比丘、若如來、自ら涅槃時到り、衆又清淨に、信解堅固にして空法を了達し、深く禪定に入れりと知りぬれば、便ち諸の菩薩、及び聲聞衆を集めて、爲に是の經を説く。29 世間に二乗として、滅度を得ること有ること無し。唯一佛乘をもつて滅度を得るのみ。30 比丘當に知るべし。如來の方便は、深く衆生の性に入れり。其の小法を志樂し、深く五欲に著するを知りて、是等が爲の故に涅槃を説く。是の人、若聞かば則便信受す。31 譬へば、五百由旬の險難惡道の曠かに絶えて、人無き怖畏の處あらん。若多くの衆有りて、此の道を過ぎて、珍寶の處に至らんと欲せん。32 一の導師有り。聰慧明達にして、善く險道の通塞の相を知れり。衆人を將導して、此の難を過ぎんと欲す。33 所將の人衆、中路に懈退して、導師に白して言さく、我等疲極して復怖畏す。復進むこと能はず。前路猶遠し、今退き還りなんと欲す。34 導師諸の方便多くして、是の念を作さく、此等愍むべし。云何ぞ大珍寶を捨てて、退き還りなんと欲する。35 是の念を作し已り

而作是念。此等可愍。云何捨大珍寶。而欲退還。作是念已。以方便力。於險道中。過三百由旬。化作一城。告衆人言。汝等勿怖。莫得退還。今此大城。可於中止。隨意所作。若入是城。快得安穩。若能前至寶所。亦可得去。是時疲極之衆。心大歡喜。歎未曾有。我等今者。免斯惡道。快得安穩。於是衆人。前入化城。生已度想。生安穩想。爾時導師。知此人衆。既得止息。無復疲倦。卽滅化城。語衆人言。汝等去來。實處在近。向者大城。我所化作。爲止息耳。諸比丘。如來亦復如是。今爲汝等。作大導師。知諸生死。煩惱惡道。險難長遠。應去應度。若衆生。但聞一佛乘者。則不欲見佛。不欲親近。

て、方便力を以つて、險道の中に於いて三百由旬を過ぎて、一城を化作す。36 衆人に告げて言はく、汝等怖るること勿れ。退き還ることを得ること莫れ。37 今此の大城、中に於いて止つて、意の所作に隨ふべし。若是の城に入りなば、快く安穩なることを得ん。38 若能く前みて寶所に至らば、亦去ることを得べし。39 是の時に疲極の衆、心大いに歡喜して、未曾有なりと歎す。我等今者、斯の惡道を免れて、快く安穩なることを得つ。40 是に於いて衆人、前みて化城に入りて、已度の想を生じ、安穩の想を生ず。41 爾の時に導師、此の人衆の、既に止息することを得て、復疲倦無きを知りて、卽ち化城を滅して、衆人に語りて、汝等去來や、實處は近きに在り。向者の大城は、我が化作せる所なり。止息の爲ならくのみ。と言はんが如く、諸の比丘、如來も亦復是の如し。42 今汝等が爲に、大導師と作りて、諸の生死、煩惱の惡道、險難長遠にして、應に去るべく、應に度すべきを知れり。43 若衆生、但一佛乘を聞かば、則ち佛を見んと欲せず、親近せんと欲せじ。44 便ち是の念を作さく、佛道は長遠なり。久しく勤苦を受けて、乃し成ずることを得

便作是念。佛道長遠。久受勤苦。乃可得成。佛知是心。怯弱下劣。以方便力。而於中道。爲止息故。說二涅槃。若衆生住於二地。如來爾時。即便爲說。汝等所作未辦。汝所住地。近於佛慧。當觀察籌量。所得涅槃。非眞實也。但是如來方便之力。於一佛乘。分別說三。如彼導師。爲止息故。化作大城。既知息已。而告之言。寶處在近。此城非實。我化作耳。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

大通智勝佛 十劫坐道場
佛法不現前 不得成佛道
諸天神龍王 阿脩羅衆等
常雨於天華 以供養彼佛
諸天擊天鼓 并作衆伎樂
香風吹萎華 更雨新好者

べしと。佛是の心の、怯弱下劣なるを知らしめして、方便力を以つて中道に於いて止息せんが爲の故に、二涅槃を説く。若衆生、二地に住すれば、如來爾の時に、即便爲に説く。汝等は所作未だ辦ぜず。汝が所住の地は佛慧に近し。當に觀察し籌量すべし。所得の涅槃は、眞實に非ず。但是如來、方便の力をもつて、一佛乘に於いて、分別して三と説く。彼の導師の、止息の爲の故に、大城を化作し、既に息み已りぬと知りて、之に告げて、寶處は近きに在り、此の城は實に非ず。我が化作ならくのみ。と言はんが如し。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

大通智勝佛 十劫道場に坐したまへど
佛法現前せず 佛道を成ずることを得たまはず
諸の天神龍王 阿脩羅衆等
常に天華を雨して 以つて彼の佛に供養す
諸天鼓を撃ち 並びに衆の伎樂を作す
香風萎華を吹きて 更に新好の者を雨しき

過十小劫已 乃得成佛道
諸天及世人 心皆踴躍
彼佛十六子 皆與其眷屬
千萬億圍繞 俱行至佛所
頭面禮佛足 而請轉法輪
聖師子法雨 充我及一切
世尊甚難值 久遠時一現
爲覺悟羣生 震動於一切
東方諸世界 五百萬億國
梵宮殿光曜 昔所未曾有
諸梵見此相 尋來至佛所
散華以供養 并奉上宮殿
請佛轉法輪 以偈而讚歎
佛知時未至 受請默然坐
三方及四維 上下亦復爾
散華奉宮殿 請佛轉法輪

5 十小劫を過ぎ已りて 乃ち佛道を成ずることを得たまへり
6 諸天及び世人 心に皆踴躍を懐きき
7 彼の佛の十六の子 皆其の眷屬
8 千萬億の圍繞せると 俱に佛所に行き至りて
9 頭面に佛足を禮して 轉法輪を請す
10 聖師子法雨をもつて 我及び一切に充てたまへ
11 世尊は甚だ値ひたてまつること難し 久遠に時に一たび現じ
12 羣生を覺悟せんが爲に 一切を震動したまふ
13 東方の諸の世界 五百萬億國の
14 梵の宮殿光曜して 昔より未だ曾て有らざる所なり
15 諸梵此の相を見て 尋ねて佛所に來至して
16 華を散じて以つて供養し 並びに宮殿を奉上し
17 佛に轉法輪を請じ 偈を以つて讚歎す
18 佛時未だ至らずと知しめして 請を受け默然として坐したまへり
19 三方及び四維 上下亦復爾なり
20 華を散じ宮殿を奉り 佛に轉法輪を請す

世尊甚難值 願以大慈悲
 廣開甘露門 轉無上法輪
 無量慧世尊 受彼衆人請
 爲宣種種法 四諦十二緣
 無明至老死 皆從生緣有
 如是衆過患 汝等應當知
 宣暢是法時 六百萬億姪
 得盡諸苦際 皆成阿羅漢
 第二說法時 千萬恆沙衆
 於諸法不受 亦得阿羅漢
 從是後得道 其數無有量
 萬億劫算數 不能得其邊
 時十六王子 出家作沙彌
 皆共請彼佛 演說大乘法
 我等及營從 皆當成佛道
 願得如世尊 慧眼第一淨

12 世尊は甚だ値ひたてまつること難し 願はくば大慈悲を以つて
 廣く甘露の門を開き 無上の法輪を轉じたまへ
 13 無量慧の世尊 彼の衆人の請を受けて
 爲に種種の法 四諦十二縁を宣べたまふ
 14 無明より老死に至るまで 皆生縁に従ひて有り
 是の如きの衆の過患 汝等應當に知るべし
 15 是の法を宣暢したまふ時 六百萬億姪
 諸苦の際を盡すことを得て 皆阿羅漢と成る
 16 第二の說法の時 千萬恆沙の衆
 諸法に於いて受けずして 亦阿羅漢を得
 17 是より後の得道 其の數量有ること無し
 萬億劫に算數すとも 其の邊を得ること能はじ
 18 時に十六王子 出家して沙彌と作りて
 皆共に彼の佛に 大乘の法を演説したまへと請す
 19 我等及び營從 皆當に佛道を成すべし
 願はくば世尊の如く 慧眼第一淨なることを得ん

佛知童子心 宿世之所行
 以無量因緣 種種諸譬諭
 說六波羅蜜 及諸神通事
 分別眞實法 菩薩所行道
 說是法華經 如恆河沙偈
 彼佛說經已 靜室入禪定
 一心一處坐 八萬四千劫
 是諸沙彌等 知佛禪未出
 爲無量億衆 說佛無上慧
 各各坐法座 說是大乘經
 於佛宴寂後 宣揚助法化
 一一沙彌等 所度諸衆生
 有六百萬億 恆河沙等衆
 彼佛滅度後 是諸聞法者
 在在諸佛土 常與師俱生
 是十六沙彌 具足行佛道

20 佛童子の心 宿世の所行を知りしめて
 無量の因緣 種種の諸の譬諭を以つて
 六波羅蜜 及び諸の神通の事を説き
 眞實の法 菩薩所行の道を分別して
 是の法華經の 恆河沙の如き偈を説きたまひき
 21 彼の佛經を説き已りて 靜室にして禪定に入り
 一心にして一處に坐したまふこと 八萬四千劫
 22 是の諸の沙彌等 佛の禪より未だ出でたまはざるを知りて
 無量億の衆の爲に 佛の無上慧を説く
 23 各各に法座に坐して 是の大乘經を説き
 佛の宴寂の後に於いて 宣揚して法化を助く
 24 一一の沙彌等の 度する所の 諸の衆生
 六百萬億 恆河沙等の衆有り
 25 彼の佛の滅度の後 是の諸の聞法の者
 在在の諸の佛土に 常に師と俱に生ず
 26 是の十六の沙彌 具足して佛道を行じて

今現在十方 各得成正覺
 爾時聞法者 各在諸佛所
 其有住聲聞 漸教以佛道
 我在十六數 曾亦爲汝說
 是故以方便 引汝趣佛慧
 以是本因緣 今說法華經
 令汝入佛道 慎勿懷驚懼
 譬如險惡道 迴絕多毒獸
 又復無水草 人所怖畏處
 無數千萬衆 欲過此險道
 其路甚曠遠 經五百由旬
 時有一導師 強識有智慧
 明了心決定 在險濟衆難
 衆人皆疲倦 而白導師言
 我等今頓乏 於此欲退還
 導師作是念 此輩甚可愍

今現に十方に在りて 各正覺を成ずることを得たまへり
 27 爾の時の聞法の者 各諸佛の所に在り
 其の聲聞に住すること有るは 漸く教ふるに佛道を以つてす
 28 我十六の數に在りて 曾て亦汝が爲に説きき
 是の故に方便を以つて 汝を引きて佛慧に趣かしむ
 29 是の本因縁を以つて 今法華經を説きて
 汝をして佛道に入らしむ 慎んで驚懼を懷くこと勿れ
 30 譬へば險惡道の 廻かに絶えて毒獸多く
 又復水草無く 人の怖畏する處あらん
 31 無數千萬の衆 此の險道を過ぎんと欲す
 其の路甚だ曠遠にして 五百由旬を經
 32 時に一りの導師有り 強識にして智慧有り
 明了にして心決定せり 險きに在りて衆難を濟ふ
 33 衆人皆疲倦して 導師に白して言さく
 我等今頓乏せり 此より退き還らんと欲す
 34 導師是の念を作さく 此の輩甚だ愍むべし

如何欲退還 而失大珍寶
 尋時思方便 當設神通力
 化作大城郭 莊嚴諸舍宅
 周匝有園林 渠流及浴池
 重門高樓閣 男女皆充滿
 卽作是化已 慰衆言勿懼
 汝等入此城 各可隨所樂
 諸人既入城 心皆大歡喜
 皆生安穩想 自謂已得度
 導師知息已 集衆而告言
 汝等當前進 此是化城耳
 我見汝疲極 中路欲退還
 故以方便力 權化作此城
 汝今勤精進 當共至寶所
 我亦復如是 爲一切導師
 見諸求道者 中路而懈廢

如何ぞ退き還りて 大珍寶を失はんと欲する
 尋いで時に方便を思はく 當に神通力を設くべしと
 35 大城 郭を化作して 諸の舍宅を莊嚴す
 周匝して園林 渠流及び浴池
 重門高樓閣有りて 男女皆充滿せり
 36 卽ち是の化を作し已りて 衆を慰めて言はく懼るること勿れ
 汝等此の城に入りなば 各所樂に隨ふべし
 37 諸人既に城に入りて 心皆大いに歡喜し
 皆安穩の想を生じて 自ら已に度することを得たりと謂へり
 38 導師息み已りぬと知りて 衆を集めて告げて
 汝等當前進すべし 此は是化城ならくのみ
 39 我汝が疲極して 中路に退き還らんと欲するを見る
 故に方便力を以つて 權に此の城を化作せり
 汝今勤めて精進して 當に共に寶所に至るべしと言はんか如く
 40 我も亦復是の如し 爲一切の導師なり
 41 諸の道を求むる者の 中路にして懈廢して

不能度生死 煩惱諸險道
 故以方便力 爲息說涅槃
 言汝等苦滅 所作皆已辨
 既知到涅槃 皆得阿羅漢
 爾乃集大衆 爲說眞實法
 諸佛方便力 分別說三乘
 唯有一佛乘 息處故說二
 今爲汝說實 汝所得非滅
 爲佛一切智 當發大精進
 汝證一切智 十力等佛法
 具三十二相 乃是眞實滅
 諸佛之導師 爲息說涅槃
 既知是息已 引入於佛慧

妙法蓮華經卷第三

生死 煩惱の諸の險道を度すること能はざるを見る
 故に方便力を以つて 息めんが爲に涅槃を説きて
 汝等苦滅し 所作皆已に辨せりと云ふ
 41 既に涅槃に到り 皆阿羅漢を得たりと知りて
 爾して乃し大衆を集めて 爲に眞實の法を説く
 42 諸佛は方便力をもつて 分別して三乘を説きたまふ
 唯一佛乘のみ有り 息處の故に二を説く
 43 今汝が爲に實を説く 汝が所得は滅に非ず
 佛の一切智の爲に 當に大精進を發すべし
 44 汝一切智 十力等の佛法を證し
 三十二相を具しなば 乃ち是眞實の滅ならん
 45 諸佛の導師は 息めんが爲に涅槃を説きたまふ
 既に是息み已りぬと知れば 佛慧に引入したまふ

妙法蓮華經卷第三

妙法蓮華經五百弟子受記品第八

爾時富樓那彌多羅尼子。從佛聞是。智慧方便
 隨宜說法。又聞授諸大弟子。阿耨多羅
 三藐三菩提記。復聞宿世。因緣之事。復聞
 諸佛。有大自在。神通之力。得未曾有。心
 淨踊躍。即從座起。到於佛前。頭面禮足。
 卻住一面。瞻仰尊顏。目不暫捨。而作是念。
 世尊甚奇特。所爲希有。隨順世間。若干種
 性。以方便知見。而爲說法。拔出衆生。處
 處貪著。我等於佛功德。言不能宣。唯佛世
 尊。能知我等。深心本願。
 爾時佛告諸比丘。汝等見是。富樓那彌多羅
 尼子不。我常稱其。於說法人中。最爲第一。
 亦常歎其。種種功德。精勤護持。助宣我法。

妙法蓮華經五百弟子受記品第八

爾の時に富樓那彌多羅尼子、佛に従ひて是の智慧方便隨宜の
 説法を聞き、又諸の大弟子に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授け
 たまふと聞き、復宿世の因縁の事を聞き、復諸佛の、大自在神通
 の力有すことを聞きたてまつりて、未曾有なることを得、心淨
 く踊躍す。即ち座より起ちて佛前に到り、頭面に足を禮して、卻
 りて一面に住し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず。而も是の念
 を作さく、世尊は甚だ奇特にして、所爲希有なり。世間の若干の種
 性に隨順して、方便知見を以つて、爲に法を説きて、衆生の處處の
 貪著を拔出したまふ。我等佛の功德に於いて、言をもつて宣ぶる
 こと能はず。唯佛世尊のみ、能く我等が深心の本願を知しめせり。
 爾の時に佛、諸の比丘に告げたまはく、汝等、是の富樓那彌
 多羅尼子を見るや不や。我常に其が説法人中に於いて、最も第
 一なることを得たりと稱し、亦常に其の種種の功德を歎す。精

能於四衆。示教利喜。具足解釋。佛之正法。而大饒益。同梵行者。自捨如來。無能盡其言論之辯。汝等勿謂。富樓那。但能護持。助宣我法。亦於過去。九十億諸佛所。護持助宣。佛之正法。於彼說法人中。亦最第一。又於諸佛。所說空法。明了通達。得四無礙智。常能審諦。清淨說法。無有疑惑。具足菩薩神通之力。隨其壽命。常修梵行。彼佛世人。咸皆謂之。實是聲聞。而富樓那。以斯方便。饒益無量。百千衆生。又化無量。阿僧祇人。令立阿耨羅多三藐三菩提。爲淨佛土故。常作佛事。教化衆生。諸比丘。富樓那。亦於七佛。說法人中。而得第一。今於我所。說法人中。亦爲第一。於賢劫中。當來諸佛。說法人中。亦復第一。而皆護持。助宣佛法。亦於未來。護持助宣。無量無邊。諸佛之

勤して我が法を護持し助宣し、能く四衆に於いて示教利喜し、具足して佛の正法を解釋して、大いに同梵行者を饒益す。如來を捨ててよりは、能く其の言論の辯を盡すもの無けん。汝等、富樓那は、但能く我が法を護持し、助宣すと謂ふこと勿れ。亦、過去の九十億の諸佛の所に於いて、佛の正法を護持し、助宣し、彼の說法人の中に於いても、亦最も第一なりき。又諸佛の所說の空法に於いて、明了に通達し、四無礙智を得て、常に能く審諦に清淨に、法を説きて疑惑有ること無し。菩薩の神通の力を具足し、其の壽命に隨ひて、常に梵行を修しき。彼の佛世の人、咸く皆之實に聲聞なりと謂へり。而も富樓那は、斯の方便を以つて、無量百千の衆生を饒益し、又無量阿僧祇の人を化して、阿耨羅多三藐三菩提を立てしめき。佛土を淨めんが爲の故に、常に佛事を作して衆生を教化しき。諸の比丘、富樓那は亦、七佛の說法人の中に於いて、第一なることを得、今我が所の、說法人の中に於いても、亦第一なることを爲。賢劫の中の、當來の諸佛の說法人の中に於いても、亦復第一にして、皆佛法を護持し、助宣せん。亦

法。教化饒益。無量衆生。令立阿耨多羅三藐三菩提。爲淨佛土故。常勤精進。教化衆生。漸漸具足。菩薩之道。過無量。阿僧祇劫。當於此土。得阿耨多羅三藐三菩提。號曰法明如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其佛以恆河沙等。三千大千世界。爲一佛土。七寶爲地。地平如掌。無有山陵。谿澗溝壑。七寶臺觀。充滿其中。諸天宮殿。近處虛空。人天交接。兩得相見。無諸惡道。亦無女人。一切衆生。皆以化生。無有姪欲。得大神通。身出光明。飛行自在。志念堅固。精進智慧。普皆金色。三十二相。而自莊嚴。其國衆生。常以二食。一者法喜食。二者禪悅食。有無量阿僧祇。千萬

未來に於いても、無量無邊の諸佛の法を護持し、助宣し、無量の衆生を教化し、饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立てしめん。11 佛土を淨めんが爲の故に、常に勤めて精進し、衆生を教化せん。12 漸漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に此の土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。13 號をば、法明如來應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。14 其の佛、恆河沙等の三千大千世界を以つて、一佛土と爲し、七寶を地と爲し、地の平かなること、掌の如くにして、山陵、谿澗、溝壑有ること無けん。15 七寶の臺觀、其の中に充滿し、諸天の宮殿、近く虚空に處し、人天交接して、兩ら相見ることを得ん。16 諸の惡道無く、亦女人無くして、一切衆生、皆以つて化生し、姪欲有ること無けん。17 大神通を得て、身より光明を出して、飛行自在ならん。18 志念堅固に、精進智慧ありて、普く皆金色に、三十二相をもつて、而も自ら莊嚴せん。19 其の國の衆生は、常に二食を以つてせん。一には法喜食、二には禪悅食なり。20 無量阿僧祇千萬億那由佗の、諸の菩薩衆有りて、大神通、四無

億那由他。諸菩薩衆。得大神通。四無礙智。善能教化。衆生之類。其聲聞衆。算數校計。所不能知。皆得具足。六通三明。及八解脫。其佛國土。有如是等。無量功德。莊嚴成就。劫名寶明。國名善淨。其佛壽命。無量阿僧祇劫。法住甚久。佛滅度後。起七寶塔。徧滿其國。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
諸比丘諦聽 佛子所行道
善學方便故 不可得思議
知衆樂小法 而畏於大智
是故諸菩薩 作聲聞緣覺
以無數方便 化諸衆生類
自說是聲聞 去佛道甚遠
度脫無量衆 皆悉得成就
雖小欲懈怠 漸當令作佛

礙智を得て、善能く衆生の類を教化せん。其の聲聞衆、算數校計すとも知ること能はざる所なり。皆六通、三明、及び八解脫を具足することを得ん。其の佛の國土は、是の如き等の無量の功德有りて、莊嚴し成就せん。劫をば寶明と名け、國をば善淨と名く。其の佛の壽命、無量阿僧祇にして、法住すること、甚た久しからん。佛滅度の後、七寶の塔を起てて、其の國に徧滿せん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、
2 諸の比丘諦かに聽け 佛子所行の道は
善く方便を學せるが故に 思議することを得べからず
3 衆の小法を樂ひて 大智を畏るることを知れり
4 是の故に諸の菩薩 聲聞緣覺と作る
5 無數の方便を以つて 諸の衆生の類を化して
6 自らは聲聞なり 佛道を去ること甚だ遠しと説く
7 無量の衆を度脱して 皆悉く成就することを得ん
8 小欲懈怠なりと雖も 漸く當に作佛せしむべし

內秘菩薩行 外現是聲聞
少欲厭生死 實自淨佛土
示衆有三毒 又現邪見相
我弟子如是 方便度衆生
若我具足説 種種現化事
衆生聞是者 心則懷疑惑
今此富樓那 於昔千億佛
勤修所行道 宣護諸佛法
爲求無上慧 而於諸佛所
現居弟子上 多聞有智慧
所說無所畏 能令衆歡喜
未曾有疲倦 而以助佛事
已度大神通 具四無礙慧
知衆根利鈍 常說清淨法
演暢如是義 教諸千億衆
令住大乘法 而自淨佛土

6 内に菩薩の行を秘し 外に是聲聞なりと現す
7 少欲にして生死を厭へども 實には自ら佛土を淨む
8 衆に三毒有りと示し 又邪見の相を現す
9 我が弟子是の如く 方便して衆生を度す
10 若我具足して 種種の現化の事を説かば
衆生の是を聞かん者 心則ち疑惑を懷きなん
今此の富樓那は 昔の千億の佛に於いて
所行の道を勤修し 諸佛の法を宣護し
無上の慧を求むるを爲つて 而も諸佛の所に於いて
弟子の上に居し 多聞にして智慧有りと現じ
所説畏るる所無く 能く衆をして歡喜せしめ
未だ曾て疲倦有らずして 以つて佛事を助く
10 已に大神通に度り 四無礙慧を具し
衆根の利鈍を知りて 常に清淨の法を説き
是の如き義を演暢して 諸の千億の衆を教へ
大乘の法に住せしめて 自ら佛土を淨む

未來亦供養	無量無數佛
護助宣正法	亦自淨佛土
常以諸方便	說法無所畏
度不可計衆	成就一切智
供養諸如來	護持法寶藏
其後得成佛	號名曰法明
其國名善淨	七寶所合成
劫名爲寶明	菩薩衆甚多
其數無量億	皆度大神通
威德力具足	充滿其國土
聲聞亦無數	三明八解脫
得四無礙智	以是等爲僧
其國諸衆生	姪欲皆已斷
純一變化生	具相莊嚴身
法喜禪悅食	更無餘食想
無有諸女人	亦無諸惡道

11 未來にも亦 無量無數の佛を供養し
 正法を護りて助宣して 亦自ら佛土を淨む
 12 常に諸の方便を以つて 法を説くに畏るる所無く
 不可計の衆を度して 一切智を成就せしめ
 諸の如來を供養し 法の寶藏を護持して
 其の後に成佛することを得ん 號をば名けて法明と曰はん
 13 其の國をば善淨と名け 七寶の合成せる所
 劫をば名けて寶明と爲ん 菩薩衆甚だ多く
 其の數無量億にして 皆大神通に度り
 威德力具足して 其の國土に充滿せん
 15 聲聞亦無數にして 三明八解脫ありて
 四無礙智を得たる 是等を以つて僧と爲ん
 16 其の國の諸の衆生は 姪欲皆已に斷じ
 純一に變化生にして 相を具して身を莊嚴せん
 17 法喜禪悅食にして 更に餘の食想無けん
 諸の女人有ること無く 亦諸の惡道無けん

富樓那比丘 功德悉成滿
 當得斯淨土 賢聖衆甚多
 如是無量事 我今但略說

爾時千二百阿羅漢。心自在者。作是念。我等歡喜。得未曾有。若世尊。各見授記。如餘大弟子者。不亦快乎。佛知此等。心之所念。告摩訶迦葉。是千二百阿羅漢。我今當現前。次第與授。阿耨多羅三藐三菩提記。於此衆中。我大弟子。橋陳如比丘。當供養。六萬二千億佛。然後得成爲佛。號曰普明如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其五百阿羅漢。優樓頻迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。迦留陀夷。優陀夷。阿菟樓駄。離婆多。劫賓那。薄拘羅。周陀。莎伽陀等。皆當得阿耨多羅三藐三菩提。盡同一號。名曰普明。

18 富樓那比丘 功德悉く成滿して
 當に斯の淨土の 賢聖衆甚だ多きを得べし
 是の如き無量の事 我今但略して説く

四 爾の時に、千二百の阿羅漢の、心自在なる者、是の念を作さく。我等歡喜して、未曾有なることを得つ。若世尊、各授記せらるること、餘の大弟子の如くならば、亦快からざらんや。佛、此等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまはく。是の千二百の阿羅漢、我今當に、現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授くべし。此の衆の中に於いて、我が大弟子橋陳如比丘、當に六萬二千億の佛を供養し、然して後に、佛に成爲ることを得べし。號をば普明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の五百の阿羅漢、優樓頻迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿菟樓駄、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等、皆當に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。盡く同じく一號にして、名けて普明と曰はん。

爾時世尊欲重宣此義而說偈言

橋陳如比丘	當見無量佛
過阿僧祇劫	乃成等正覺
常放大光明	具足諸神通
名聞徧十方	一切之所敬
常說無上道	故號爲普明
其國土清淨	菩薩皆勇猛
咸昇妙樓閣	遊諸十方國
以無上供具	奉獻於諸佛
作是供養已	心懷大歡喜
須臾還本國	有如是神力
佛壽六萬劫	正法住倍壽
像法復倍是	法滅天人憂
其五百比丘	次第當作佛
同號曰普明	轉次而授記

五 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

橋陳如比丘、當に無量の佛を見たてまつりて
 阿僧祇劫を過ぎて、乃ち等正覺を成すべし
 常に大光明を放ち、諸の神通を具足し
 名聞十方に徧し、一切の敬ふ所として
 常に無上道を説かん、故に號けて普明と爲ん
 其の國土清淨にして、菩薩皆勇猛ならん
 咸く妙樓閣に昇りて、諸の十方の國に遊び
 無上の供具を以つて、諸佛に奉獻せん
 是の供養を作し已りて、心に大歡喜を懷き
 須臾に本國に還らん、是の如き神力有らん
 佛の壽六萬劫ならん、正法住すること壽に倍し
 像法復是に倍せん、法滅せば天人憂へん
 其の五百の比丘、次第に當に作佛すべし
 同じく號けて普明と曰はん、轉次して授記せん

我滅度之後	某甲當作佛
其所化世間	亦如我今日
國土之嚴淨	及諸神通力
菩薩聲聞衆	正法及佛像
壽命劫多少	皆如上所説
迦葉汝已知	五百自在者
餘諸聲聞衆	亦當復如是
其不在此會	汝當爲宣説

爾時五百阿羅漢於佛前、得受記已、歡喜踊躍、即從座起、到於佛前、頭面禮足、悔過自責、世尊我等常作是念、自謂已得、究竟滅度、今乃知之、如無智者、所以者何、我等應得、如來智慧、而便自以、小智爲足、世尊、譬如有人、至親友家、醉酒而臥、是時親友、官事當行、以無價寶珠、繫其衣裏、與

我が滅度の後に、某甲當に作佛すべし
 其所化の世間、亦我が今日の如くならん
 10 國土の嚴淨、及び諸の神通力
 菩薩聲聞衆、正法及び佛像
 壽命の劫の多少、皆上の所説の如くならん
 11 迦葉汝已知、五百の自在の者を知りぬ
 餘の諸の聲聞衆も、亦當に復是の如くなるべし
 其の此の會に在らざるには、汝當に爲に宣説すべし

六 爾の時に五百の阿羅漢、佛前に於いて、受記を得已りて歡喜踊躍す。即ち座より起ちて佛前に到り、頭面に足を禮し、過を悔いて自ら責む。世尊、我等常に是の念を作して、自ら已に究竟の滅度を得たりと謂ひき。今乃ち之を知りぬ。無智の者の如し。所以は何ん。我等應に、如來の智慧を得べかりき。而るを即ち自ら小智を以つて足んぬと爲しき。世尊、譬へば人有りて、親友の家に至りて、酒に酔ひて臥せり。是の時に親友、官事の當に行くべきありて、無價の寶珠を以つて、其の衣の裏に繫け、之を與へ

之而去。其人醉臥。都不覺知。起已遊行。到於佗國。爲友食故。勤力求索。甚大艱難。若少有所得。便以爲足。於後親友。會遇見之。而作是言。咄哉丈夫。何爲衣食。乃至如是。我昔欲令。汝得安樂。五欲自恣。於某年月。以無價寶珠。繫汝衣裏。今故現在。而汝不知。勤苦憂惱。以求自活。甚爲癡也。汝今可以此寶。貿易所須。常可如意。無所乏短。佛亦如是。爲菩薩時。教化我等。令發一切智心。而尋廢忘。不知不覺。既得阿羅漢道。自謂滅度。資生艱難。得少爲足。一切智願。猶在不失。今者世尊。覺悟我等。作如是言。諸比丘。汝等所得。非究竟滅。我久令汝等。種佛善根。以方便故。示涅槃相。

て去りぬ。其の人酔ひ臥して、都て覺知せず。起き已りて、遊行して佗國に到りぬ。衣食の爲の故に、勤力して求索すること、甚だ大いに艱難なり。若少し得る所有れば、便ち以つて足んぬと爲す。後に親友會ひ遇うて、之を見て是の言を作さく、咄哉丈夫、何ぞ衣食の爲に、乃ち是の如くなるに至る。我昔、汝をして安樂なることを得、五欲を自恣せしめんと欲して、某の年月に於いて、無價の寶珠を以つて、汝が衣の裏に繫けたり。今故現在に在り。而るを汝知らずして勤苦憂惱して、以つて自活を求む。甚だ爲癡なり。汝今此の寶を以つて所須に貿易すべし。常に意の如く乏短なる所無かるべしといはんが如く、佛も亦是の如し。菩薩爲りし時、我等を教化して、一切智の心を發さしめたまひき。而るを尋いで廢忘して知らず。既に阿羅漢道を得て、自ら滅度せりと謂ひ、資生艱難にして、少しを得て足んぬと爲す。一切智の願は、猶在りて失せず。今者世尊、我等を覺悟して、是の如き言を作したまはく。諸の比丘、汝等が得たる所は、究竟の滅に非ず。我久しく汝等をして、佛の善根を種らしめたれど

而汝謂爲。實得滅度。世尊。我今乃知。實是菩薩。得授阿耨多羅三藐三菩提記。以是因緣。甚大歡喜。得未曾有。

爾時阿若橋陳如等。欲重宣此義。而說偈言。

我等聞無上 安穩授記聲
歡喜未曾有 禮無量智佛
今於世尊前 自悔諸過咎
於無量佛寶 得少涅槃分
如無智愚人 便自以爲足
譬如貧窟人 往至親友家
其家甚大富 具設諸餽饍
以無價寶珠 繫著內衣裏
默與而捨去 時臥不覺知
是人既已起 遊行詣佗國

も、方便を以つての故に、涅槃の相を示す。而るを汝、爲實に滅度を得たりと謂へり。世尊、我今乃ち知りぬ。實に是菩薩なり。阿耨多羅三藐三菩提の記を授かることを得つ。是の因縁を以つて、甚だ大いに歡喜して、未曾有なることを得たり。

七 爾の時に阿若橋陳如等、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

我等無上 安穩の授記の聲を聞きたてまつりて
未曾有なりと歡喜して 無量智の佛を禮したてまつる
今世尊の前に於いて 自ら諸の過咎を悔ゆ
無量の佛寶に於いて 少しき涅槃の分を得
無智の愚人の如くして 便ち自ら以つて足んぬと爲しき
譬如貧窟の人 親友の家に往き至りぬ
其の家甚だ大いに富みて 具さに諸の餽饍を設け
無價の寶珠を以つて 內衣の裏に繫著し
默して與へて捨て去りぬ 時に臥して覺知せず
是の人既已に起きて 遊行して佗國に詣りぬ

求衣食自濟	資生甚艱難
得少便爲足	更不願好者
不覺內衣裏	有無價寶珠
與珠之親友	後見此貧人
苦切責之已	示以所繫珠
貧人見此珠	其心大歡喜
富有諸財物	五欲而自恣
我等亦如是	世尊於長夜
常慙見教化	令種無上願
我等無智故	不覺亦不知
得少涅槃分	自足不求餘
今佛覺悟我	言非實滅度
得佛無上慧	爾乃爲眞滅
我今從佛聞	授記莊嚴事
及轉次受決	身心徧歡喜

衣食を求めて自ら濟ひ 資生甚だ艱難にして
 少しきを得て便ち足んぬと爲して 更に好き者を願はず
 內衣の裏に 無價の寶珠有ることを覺らず
 珠を與へし親友 後に此の貧人を見て
 苦切に之を責め已りて 示すに繫けし所の珠を以つてす
 貧人此の珠を見て 其の心大いに歡喜し
 富みて諸の財物有りて 五欲に而も自ら恣ならんが如く
 我等も亦是の如し 世尊長夜に於いて
 常に慙みて教化せられて 無上の願を種るしめたまへり
 我等無智なるが故に 覺らず亦知らず
 9 我等無智なるが故に 覺らず亦知らず
 10 少しき涅槃の分を得て 自ら足んぬとて餘を求めず
 11 今佛我を覺悟して 實に滅度に非ず
 佛の無上慧を得て 爾して乃ち爲眞の滅なりと言ふ
 我今佛に従ひて 授記莊嚴の事
 及び轉次に受決せんことを聞きたてまつりて 身心徧く歡喜す

妙法蓮華經授學無學人記

品第九

爾時阿難。羅睺羅。而作是念。我等每自思惟。設得授記。不亦快乎。即從座起。到於佛前。頭面禮足。俱白佛言。世尊。我等於此。亦應有分。唯有如來。我等所歸。又我等。爲一切世間。天人阿修羅。所見知識。阿難常爲侍者。護持法藏。羅睺羅。是佛之子。若佛見授。阿耨多羅三藐三菩提記者。我願既滿。衆望亦足。爾時學無學。聲聞弟子。二千人。皆從座起。偏袒右肩。到於佛前。一心合掌。瞻仰世尊。如阿難。羅睺羅所願。住立一面。

爾時佛告阿難。汝於來世。當得作佛。號山海慧自在通王如來。應供。正徧知。明行。

妙法蓮華經授學無學人記品第九

爾の時に阿難、羅睺羅、而も是の念を作さく、我等毎に自ら思惟すらく、設授記を得ば、亦快からざらんや。即ち座より起ちて、佛前に到り、頭面に足を禮し、俱に佛に白して言さく、世尊、我等此に於いて、亦應に分有るべし。唯如來のみ有して、我等が歸する所なり。又我等は、爲一切世間の天、人、阿修羅に知識せらる。阿難は常に侍者と爲りて、法藏を護持す。羅睺羅は佛の子なり。若佛、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けらるれば、我が願既に満じて、衆の望亦足りなん。爾の時に、學無學の聲聞の弟子二千人、皆、座より起ちて、偏へに、右の肩を袒にし、佛の前に到り、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、阿難、羅睺羅の所願の如くにして、一面に住立せり。

爾の時に佛、阿難に告げたまはく、汝來世に於いて、當に作佛することを得べし。山海慧自在通王如來、應供、正徧知、明行

足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。當供養。六十二億諸佛。護持法藏。然後得阿耨多羅三藐三菩提。教化二十千萬億。恆河沙。諸菩薩等。令成阿耨多羅三藐三菩提。國名常立勝。其土清淨。瑠璃為地。劫名妙音。其佛壽命。無量千萬億。阿僧祇劫。若人於千萬億。無量阿僧祇劫中。算數校計。不能得知。正法住世。倍於壽命。像法住世。復倍正法。阿難。是山海慧自在通王佛。為十方。無量千萬億。恆河沙等。諸佛如來。所共讚歎。稱其功德。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我今僧中說 阿難持法者
當供養諸佛 然後成正覺
號曰山海慧 自在通王佛

足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。當供養。六十二億諸佛。護持法藏。然後得阿耨多羅三藐三菩提。教化二十千萬億。恆河沙。諸菩薩等。令成阿耨多羅三藐三菩提。國名常立勝。其土清淨。瑠璃為地。劫名妙音。其佛壽命。無量千萬億。阿僧祇劫。若人於千萬億。無量阿僧祇劫中。算數校計。不能得知。正法住世。倍於壽命。像法住世。復倍正法。阿難。是山海慧自在通王佛。為十方。無量千萬億。恆河沙等。諸佛如來。所共讚歎。稱其功德。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我今僧中にして説く 阿難持法者
當に諸佛を供養して 然して後に正覺を成ずべし
號をば山海慧 自在通王佛と曰はん

其國土清淨 名常立勝
教化諸菩薩 其數如恆沙
佛有大威德 名聞滿十方
壽命無有量 以愍衆生故
正法倍壽命 像法復倍是
如恆河沙等 無數諸衆生
於此佛法中 種佛道因緣
爾時會中。新發意菩薩八千人。咸作是念。我等尚不聞。諸大菩薩。得如是記。有何因緣。而諸聲聞。得如是決。爾時世尊。知諸菩薩。心之所念。而告之曰。諸善男子。我與阿難等。於空王佛所。同時發阿耨多羅三藐三菩提心。阿難常樂多聞。我常勤精進。是故我已。得成阿耨多羅三藐三菩提。而阿難。護持我法。亦護將來。諸佛法藏。教化成就。

其の國土清淨にして 常立勝と名けん
諸の菩薩を教化せること 其の數恆沙の如くならん
佛大威徳有して 名聞十方に満ち
壽命量有ること無けん 衆生を愍むを以つての故に
正法壽命に倍し 像法復是に倍せん
恆河沙等の如き 無數の諸の衆生
此の佛法の中に於いて 佛道の因縁を種るん
爾の時に、會中の新發意の菩薩八千人、咸く是の念を作さく、我等尚、諸の大菩薩の、是の如きの記を得ることを聞かず。何の因縁有りてか、諸の聲聞、是の如き決を得る。爾の時に世尊、諸の菩薩の心之所念を知しめて、之に告げて曰はく、諸の善男子、我と阿難等と、空王佛の所に於いて、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に勤めて精進す。是の故に我は、已に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。而るに阿難は、我が法を護持し、亦將來の諸佛の法藏を護りて、諸の菩薩衆を教化し成就せん。其の本願是の如し。故に

諸菩薩衆。其本願如是。故獲斯記。阿難面於佛前。自問授記。及國土莊嚴。所願具足。心大歡喜。得未曾有。即時憶念。過去無量千萬億。諸佛法藏。通達無礙。如今所聞。亦識本願。爾時阿難。而說偈言。

世尊甚希有 令我念過去
無量諸佛法 如今日所聞
我今無復疑 安住於佛道
方便爲侍者 護持諸佛法

爾時佛告羅睺羅。汝於來世。當得作佛。號蹈七寶華如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世閒解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。當供養十世界。微塵等數。諸佛如來。常爲諸佛。而作長子。猶如今也。是蹈七寶華佛。國土莊嚴。壽命劫數。所化弟子。正法像法。亦如山海慧。自在通王如來無異。

斯の記を獲。阿難面り佛前に於いて、自ら授記、及び國土の莊嚴を聞きて、所願具足し、心大いに歡喜して、未曾有なることを得たり。即時に過去の、無量千萬億の諸佛の法藏を憶念するに、通達無礙なること、今聞く所の如し。亦本願を識りぬ。爾の時に阿難、偈を説きて言さく、

世尊は甚だ希有なり 我をして過去の
無量の諸佛の法を念せしめたまふこと 今日聞く所の如し
我今復疑無くして 佛道に安住しぬ
方便をもつて侍者と爲りて 諸佛の法を護持せん

爾の時に佛、羅睺羅に告げたまはく、汝來世に於いて、當に作佛することを得べし。蹈七寶華如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。當に十世界、微塵等數の諸佛如來を供養すべし。常に諸佛の爲に、而も長子と爲ること、猶今の如くならん。是の蹈七寶華佛國土の莊嚴、壽命の劫數、所化の弟子、正法、像法、亦山海慧自在通王如來の如くにして、異なること無けん。亦此の佛の爲に、

亦爲此佛。而作長子。過是已後。當得阿耨多羅三藐三菩提。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我爲太子時 羅睺爲長子
我今成佛道 受法爲法子
於未來世中 見無量億佛
皆爲其長子 一心求佛道
羅睺羅密行 唯我能知之
現爲我長子 以示諸衆生
無量億千萬 功德不可數
安住於佛法 以求無上道

爾時世尊。見學無學二千人。其意柔軟。寂然清淨。一心觀佛。佛告阿難。汝見是學無學二千人不。唯然已見。阿難。是諸人等。當供養五十世界。微塵數。諸佛如來。恭

而も長子と作らん。是を過ぎて已後、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我太子爲りし時 羅睺長子と爲れり
我今佛道を成ずれば 法を受けて法子と爲く
未來世の中に於いて 無量億の佛を見たてまつりて
皆其の長子と爲りて 一心に佛道を求めん
羅睺羅の密行は 唯我のみ能く之を知れり
現に我が長子と爲りて 以つて諸の衆生に示す
無量億千萬の 功德數ふべからず
佛法に安住して 以つて無上道を求む

七 爾の時に世尊、學無學の二千人を見たまふに、其の意柔軟に寂然清淨にして、一心に佛を觀たてまつる。佛阿難に告げたまはく、汝、是の學無學二千人を見るや不や。唯然なり、已に見る。阿難、是の諸人等は、當に五十世界微塵數の諸佛如來を供養

敬尊重護持法藏。末後同時。於十方國。各得成佛。皆同一號。名曰寶相如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世閒解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。壽命一劫。國土莊嚴。聲聞菩薩。正法像法。皆悉同等。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

是二千聲聞 今於我前住
悉皆與授記 未來當成佛
所供養諸佛 如上說塵數
護持其法藏 後當成正覺
各於十方國 悉同一名號
俱時坐道場 以證無上慧
皆名為寶相 國土及弟子
正法與像法 悉等無有異
咸以諸神通 度十方衆生

し、恭敬尊重し、法藏を護持して、末後に同時に、十方の國に於いて、各成佛することを得べし。皆同じく一號にして、名けて寶相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。壽命一劫ならん。國土の莊嚴、聲聞、菩薩、正法、像法、皆悉く同等ならん。

是の二千の聲聞 今我が前に於いて住せる
悉く皆記を與へ授く 未來に當に成佛すべし
供養する所の諸佛は 上に説く塵數の如くならん
其の法藏を護持して 後に當に正覺を成すべし
各十方の國に於いて 悉く同じく一名號ならん
俱時に道場に坐して 以つて無上の慧を證し
皆名けて寶相と爲ん 國土及び弟子
正法と像法と 悉く等しくして異なること有ること無けん
咸く諸の神通を以つて 十方の衆生を度し

名聞普周徧 漸入於涅槃
爾時學無學二千人。聞佛授記。歡喜踊躍。而說偈言。

世尊慧燈明 我聞授記音
心歡喜充滿 如甘露見灌

名聞普く周徧して 漸く涅槃に入らん
爾の時に學無學の二千人、佛の授記を聞きたてまつりて、歡喜踊躍して、偈を説きて言さく、

世尊は慧の燈明なり 我授記の音を聞きたてまつりて
心の歡喜充滿せり 甘露をもつて灌がるが如し